

ひ	た	条	里	遺	跡	群
日	田	横	穴	墓	群	
さ	で	さ		遺	跡	
佐	ら	こ		遺	跡	
お	寺	迫		遺	跡	
大		い		遺	跡	
し		わ		遺	跡	
白		岩		遺	跡	
し		あ	が	遺	跡	
も		や	き	遺	跡	
下		綾	垣			

1997

大分県教育委員会

## 序 文

大分県教育委員会は昭和58年度以来、日本道路公団福岡建設局の委託を受け、九州横断自動車道（大分自動車道）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。この間、重要な遺跡も数多く発見されましたが、このような発掘調査の成果につきましては、前年度から順次報告書として取りまとめ刊行しているところであります。

今回は昭和63年度から平成5年度にかけて調査を実施した日田・玖珠間34遺跡のうち、日田市の日田条里遺跡群、佐寺横穴墓群、大迫遺跡と玖珠町の白岩遺跡、下綾垣遺跡の5遺跡について収録いたしました。今後、本書が文化財の保護・啓発並びに学術研究に役立てば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大なる御協力をいただいた関係各位に対して、衷心より感謝を申し上げます。

平成9年3月

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

## 例 言

1. 本書は九州横断自動車道建設（日田～玖珠間）に伴う事前調査のうち、平成2年度から平成5年度に調査した日田市の日田糸里遺跡群・佐寺横穴墓群・大道遺跡、玖珠町の白岩遺跡・下横垣遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は日本道路公団の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆者は次の通りである。
  - I. 友岡 信彦
  - II. 友岡 信彦 松本 康弘 染矢 和徳
  - III. 時枝 克安（島根大学総合理学部教授） 村上 久和 染矢 和徳
  - IV. 渋谷 忠章
4. 遺構の実測、写真撮影は調査員、調査補助員があたり、遺物の実測・製図は調査員の他に牧尾義則・西村しのぶ・阿部みゆき・横山明代・浜田千春の協力を得た。さらに遺物写真については藤田大祐氏（フジタフォトサービス）の協力を得た。
5. 発掘調査にあたっては、日田市教育委員会・玖珠町教育委員会、並びに地元の方のご助力を得た。
6. 出土遺物及び関係資料は大分県教育委員会文化課に保管している。
7. 本書の編集・構成は村上・友岡・染矢で行った。

# 本文目次

序文

例言

I. 調査の概要 .....	1
1. 調査に至る経過 .....	1
2. 調査の組織 .....	2
II. 日田地区の遺跡 .....	5
1. 遺跡の立地と環境 .....	5
2. 各遺跡の調査 .....	11
1) 口田条里遺跡群 .....	11
2) 佐寺横穴墓群 .....	19
3) 大迫遺跡 .....	37
III. 玖珠地区の遺跡 .....	63
1. 遺跡の立地と環境 .....	63
2. 各遺跡の調査 .....	69
1) 白岩遺跡 .....	69
2) 下綾垣遺跡 .....	75
IV. まとめ .....	103



## 挿 図 目 次

第1図	調査遺跡位置図	1
第2図	日田市主要遺跡分布図	7～8
第3図	日田糸里遺跡群周辺地形図	11
第4図	日田糸里遺跡群遺構配置図	12
第5図	1号竪穴住居跡実測図	13
第6図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図	14
第7図	1号竪穴住居跡出土鉄器実測図	14
第8図	1号土坑実測図	15
第9図	2号土坑実測図	15
第10図	日田糸里遺跡群出土石器実測図(1)	15
第11図	日田糸里遺跡群出土石器実測図(2)	16
第12図	佐寺横穴墓群周辺地形図	19
第13図	佐寺横穴墓群遺構配置図	20
第14図	1号横穴墓実測図	21
第15図	2号横穴墓出土遺物実測図	22
第16図	2号横穴墓実測図	22
第17図	3号横穴墓出土遺物実測図	23
第18図	3号横穴墓実測図	23
第19図	4号横穴墓実測図	24
第20図	4号横穴墓出土遺物実測図(1)	25
第21図	4号横穴墓出土遺物実測図(2)	26
第22図	5号横穴墓実測図	29
第23図	5号横穴墓出土遺物実測図	30
第24図	6号横穴墓実測図	31
第25図	大迫遺跡周辺地形図	37
第26図	大迫遺跡遺構配置図	38
第27図	1号墓実測図	39
第28図	2号墓実測図及び出土遺物実測図	40
第29図	3号墓実測図及び出土遺物実測図	40
第30図	4号墓実測図	41
第31図	5号墓実測図	42
第32図	6号墓実測図	42
第33図	6号墓出土遺物実測図	43
第34図	7号墓実測図	43

第35図	8号墓実測図	44
第36図	9号墓実測図	45
第37図	10号墓実測図	45
第38図	11号墓実測図及び出土遺物実測図	46
第39図	12号墓実測図	47
第40図	13号墓実測図及び出土遺物実測図	48
第41図	14号墓実測図	48
第42図	15号墓実測図及び出土遺物実測図	49
第43図	16号墓実測図	50
第44図	17号墓実測図及び出土遺物実測図	51
第45図	18号墓実測図	52
第46図	19号墓実測図	52
第47図	20号墓実測図	53
第48図	21号墓実測図	54
第49図	22号墓出土遺物実測図	54
第50図	22号墓実測図	54
第51図	23号墓実測図	55
第52図	24号墓実測図	56
第53図	25号墓実測図	56
第54図	26号墓実測図	57
第55図	26号墓出土遺物実測図	58
第56図	大迫遺跡出土遺物実測図	59
第57図	大迫遺跡石材別土壌配置図	61
第58図	玖珠町主要遺跡分布図	65~66
第59図	白岩遺跡周辺地形図	69
第60図	白岩遺跡復元図	69
第61図	白岩遺跡遺構配置図	70
第62図	白岩遺跡1号環濠土層図	70
第63図	白岩遺跡出土遺物実測図	71
第64図	白岩遺跡投弾実測図	72
第65図	下鏡垣遺跡周辺地形図	75
第66図	下鏡垣遺跡遺構配置図	76
第67図	1号竪穴住居跡実測図	77
第68図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図	77
第69図	1号竪穴住居跡カマド実測図	78
第70図	1号竪穴住居跡カマド出土遺物実測図	78
第71図	2号竪穴住居跡実測図	79
第72図	2号竪穴住居跡出土遺物実測図	79

第73図	3号竪穴住居跡実測図	80
第74図	3号竪穴住居跡出土遺物実測図	80
第75図	4号竪穴住居跡実測図	81
第76図	4号竪穴住居跡出土遺物実測図	81
第77図	5-a・5-b号竪穴住居跡実測図	82
第78図	5-a・5-b号竪穴住居跡出土遺物実測図	82
第79図	6号竪穴住居跡実測図	83
第80図	6号竪穴住居跡出土遺物実測図	83
第81図	7号竪穴住居跡実測図	83
第82図	7号竪穴住居跡出土遺物実測図	84
第83図	8号竪穴住居跡実測図	84
第84図	9号竪穴住居跡実測図	84
第85図	10・11号竪穴住居跡出土遺物実測図	84
第86図	10~12号竪穴住居跡実測図	85
第87図	13号竪穴住居跡実測図	86
第88図	13号竪穴住居跡出土遺物実測図	86
第89図	14号竪穴住居跡実測図	87
第90図	15号竪穴住居跡実測図	87
第91図	17号竪穴住居跡出土遺物実測図	87
第92図	16~18号竪穴住居跡実測図	88
第93図	1号墓主体部出土遺物実測図	88
第94図	1号墓実測図	89
第95図	1号墓主体部実測図	89
第96図	1号掘立柱建物跡実測図	90
第97図	2号掘立柱建物跡実測図	90
第98図	3号掘立柱建物跡実測図	90
第99図	4号掘立柱建物跡実測図	91
第100図	5号掘立柱建物跡実測図	91
第101図	6号掘立柱建物跡実測図	91
第102図	1号土坑実測図	91
第103図	2号土坑実測図	92
第104図	3号土坑実測図	92
第105図	1号陥穴実測図	93
第106図	溝状遺構実測図	93
第107図	玖珠盆地西部の古墳時代集落分布図	94
第108図	下綾垣遺跡遺構変遷図	95
第109図	1号住居跡カマドの残留磁気の方向	100
第110図	2号住居跡カマドの残留磁気の方向	100

第111図	5-b号住居跡カマドの残留磁気の方向	100
第112図	6号住居跡カマドの残留磁気の方向	100
第113図	7号住居跡カマドの残留磁気の方向	100
第114図	11号住居跡カマドの残留磁気の方向	100
第115図	12号住居跡カマドの残留磁気の方向	100
第116図	17号住居跡カマドの残留磁気の方向	100
第117図	1号焼土の残留磁気の方向	101
第118図	2号焼土の残留磁気の方向	101
第119図	下綾垣遺跡の焼土の残留磁気の平均方向と誤差の範囲	101
第120図	伊藤田窯跡群の城山2、3号窯、瓦ヶ迫1号窯の残留磁気の平均方向と誤差の範囲	102
第121図	下綾垣遺跡住居跡焼土と伊藤田窯跡群の城山2、3号窯、瓦ヶ迫1号窯の残留磁気の平均方向と誤差の範囲	102

## 表 目 次

第1表	佐寺横穴墓群3号横穴墓出土鉄器計測表	23
第2表	佐寺横穴墓群4号横穴墓出土貝輪計測表	25
第3表	佐寺横穴墓群4号横穴墓出土玉類計測表	27~28
第4表	佐寺横穴墓群5号横穴墓出土玉類計測表	32
第5表	佐寺横穴墓群4号横穴墓出土ガラス小玉色別構成比	33
第6表	大迫遺跡出土鉄器計測表	59
第7表	大迫遺跡出土玉類計測表	60
第8表	大迫遺跡土壙計測表	60
第9表	白岩遺跡投弾計測表	72
第10表	下綾垣遺跡の焼土の残留磁気の平均方向	97
第11表	5-b号住居跡カマド、1号焼土の地磁気年代	98
第12表	2、7、12号住居跡カマド、2号焼土の地磁気年代候補値	98
第13表	下綾垣遺跡の焼土の地磁気年代と土器年代	98
第14表	伊藤田窯跡群の城山2、3号窯、瓦ヶ迫1号窯の地磁気年代と考古学年代	98

## 写真図版目次

- 図版1 日田条里遺跡群全景  
日田条里遺跡群1号竪穴住居跡完掘状況
- 図版2 日田条里遺跡群住居跡内土坑検出状況  
日田条里遺跡群住居跡内土坑遺物出土状況
- 図版3 日田条里遺跡群1号土坑  
日田条里遺跡群2号土坑
- 図版4 日田条里遺跡群出土遺物
- 図版5 佐寺横穴墓群遠景  
佐寺横穴墓群近景
- 図版6 佐寺横穴墓群1号墓焚門  
佐寺横穴墓群1号墓玄室工具痕
- 図版7 佐寺横穴墓群2号墓焚門  
佐寺横穴墓群2号墓玄室
- 図版8 佐寺横穴墓群3号墓全景  
佐寺横穴墓群3号墓遺物出土状況
- 図版9 佐寺横穴墓群4号墓羨道部  
佐寺横穴墓群4号墓玄室敷石状況
- 図版10 佐寺横穴墓群4号墓遺物出土状況
- 図版11 佐寺横穴墓群5号墓全景  
佐寺横穴墓群5号墓玄室敷石状況
- 図版12 佐寺横穴墓群6号墓全景  
佐寺横穴墓群6号墓玄室
- 図版13 佐寺横穴墓群出土遺物
- 図版14 大迫遺跡全景  
大迫遺跡1号墓完掘状況
- 図版15 大迫遺跡2・3号墓掘り下げ状況  
大迫遺跡2・3号墓完掘状況
- 図版16 大迫遺跡4号墓完掘状況  
大迫遺跡5号墓完掘状況  
大迫遺跡6号墓遺物出土状況  
大迫遺跡6号墓完掘状況
- 図版17 大迫遺跡7・8号墓完掘状況  
大迫遺跡10号墓完掘状況  
大迫遺跡9号墓掘り下げ状況

- 図版18 大迫遺跡11・12号墓検出状況  
大迫遺跡11・12号墓完掘状況
- 図版19 大迫遺跡13号墓掘り下げ状況  
大迫遺跡13号墓完掘状況  
大迫遺跡14号墓検出状況  
大迫遺跡14号墓完掘状況
- 図版20 大迫遺跡15号墓検出状況  
大迫遺跡15号墓完掘状況  
大迫遺跡16号墓検出状況  
大迫遺跡16号墓完掘状況
- 図版21 大迫遺跡17号墓掘り下げ状況  
大迫遺跡17号墓完掘状況  
大迫遺跡18号墓検出状況  
大迫遺跡18号墓完掘状況
- 図版22 大迫遺跡19号墓検出状況  
大迫遺跡19号墓完掘状況
- 図版23 大迫遺跡20号墓検出状況  
大迫遺跡20号墓人骨出土状況  
大迫遺跡21号墓検出状況  
大迫遺跡21号墓完掘状況
- 図版24 大迫遺跡22号墓検出状況  
大迫遺跡22号墓完掘状況
- 図版25 大迫遺跡23号墓検出状況  
大迫遺跡23号墓完掘状況
- 図版26 大迫遺跡24号墓検出状況  
大迫遺跡24号墓完掘状況  
大迫遺跡25号墓検出状況  
大迫遺跡25号墓完掘状況
- 図版27 大迫遺跡26号墓検出状況  
大迫遺跡26号墓遺物出土状況
- 図版28 大迫遺跡出土遺物(1)
- 図版29 大迫遺跡出土遺物(2)
- 図版30 白岩遺跡遠景
- 図版31 白岩遺跡環濠遠景・近景・環濠土層
- 図版32 白岩遺跡1号土坑・遺物出土状況
- 図版33 白岩遺跡出土遺物・投擲
- 図版34 下陵垣遺跡全景

- 图版35 下陵垣遗址10·11·12号整穴住居跡  
下陵垣遗址14·15·16·17·18号整穴住居跡
- 图版36 下陵垣遗址5-a·5-b号整穴住居跡  
下陵垣遗址13号整穴住居跡
- 图版37 下陵垣遗址1号墓全景  
下陵垣遗址1号墓主体部遺物出土狀況
- 图版38 下陵垣遗址3号獨立柱建物跡  
下陵垣遗址溝状遺構全景
- 图版39 下陵垣遗址出土遺物(1)
- 图版40 下陵垣遗址出土遺物(2)

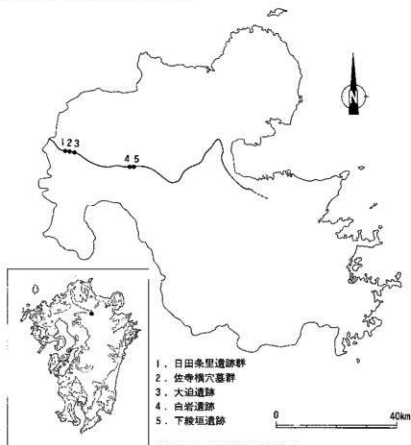
# I 調査の概要

## 1. 調査に至る経過

九州横断自動車道は、長崎市を起点とし、大分市に至る約252km（大分県内全区間約103km）の高速自動車道であり、途中既に共用中の九州縦貫自動車道と鳥栖ジャンクションで直結する。このうち、大分県関係は、県境～日田間が昭和44年1月22日、日田～大分間が昭和47年6月30日に基本計画決定され、昭和48年10月19日に、県境～日田間の整備計画決定及び国の施行命令が出された。日田～玖珠間の整備計画決定及び国の施行命令は昭和53年11月21日に出された。大分県教育委員会では、日本道路公団福岡建設局の依頼を受け、日田～玖珠間の道路建設予定地の分布調査を昭和58年から開始し、昭和61年7月で終了した。その結果、遺跡及び遺跡推定地は28ヶ所にのぼった。

日田～玖珠間の発掘調査は、昭和63年度から用地買収の終了した地域から順に実施され、平成5年度末までで路線内の全ての地域で調査を終えた。この間新たに確認された遺跡もあり、調査した遺跡数は試掘・立会い調査も含めると都合34遺跡で、その間とした調査期間は6年間の長期に及んだ。このうち日田市「堂園遺跡」、玖珠町「原田遺跡」、「岩塚古墳」、「玖珠SA地区遺跡群」、「谷ノ瀬遺跡」については既に報告書が刊行されている<sup>(注1)</sup>。今回報告の日田条里遺跡群、佐寺横穴墓群、大迫遺跡、白岩遺跡、下綾垣遺跡は、平成3～5年度に本調査を実施した遺跡である。

(注1)「堂園遺跡・原田遺跡・岩塚古墳・玖珠SA地区遺跡群・谷ノ瀬遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 大分県教育委員会1995



第1図 調査遺跡位置図



## 2. 調査の組織

調査の組織は次のとおりである。

### 平成2年度

- 調査委員 賀川 光夫（別府大学教授、県文化財保護審議会委員）  
小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議会委員）  
後藤 宗俊（別府大学教授）  
田中 良之（九州大学助教授）  
時枝 克安（島根大学助教授）  
後藤 正二（大分県教育庁参事兼管理部文化課長）
- 調査主任 渋谷 忠章（県文化課埋蔵文化財第2係長）
- 調査員 村上 久和（県文化課主査）、西 哲弘（同主任）、江田 豊（同主任）  
友岡 信彦（同主事）、松本 康弘（同主事）、永松みゆき（同嘱託）  
姫野 和子（同嘱託）、山本健太郎（同嘱託）、染矢 和徳（同嘱託）  
橋本 一彦（同嘱託）

### 平成3年度

- 調査委員 賀川 光夫（別府大学教授、県文化財保護審議会委員）  
小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議会委員）  
都出比呂志（大阪大学教授）  
後藤 宗俊（別府大学教授）  
下條 信行（愛媛大学教授）  
伊東 晴明（島根大学教授）  
時枝 克安（島根大学助教授）  
武末 順一（北九州考古博物館副館長）  
秋葉 正嗣（大分県教育庁管理部文化課長）
- 調査主任 渋谷 忠章（県文化課埋蔵文化財第2係長）
- 調査員 村上 久和（県文化課主査）、西 哲弘（同主査）、江田 豊（同主任）  
友岡 信彦（同主任）、染矢 和徳（同主事）、永松みゆき（同嘱託）  
山本健太郎（同嘱託）、橋本 一彦（同嘱託）、須原 緑（同嘱託）

### 平成4年度

- 調査委員 賀川 光夫（別府大学教授、県文化財保護審議会委員）  
小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議会委員）  
都出比呂志（大阪大学教授）  
後藤 宗俊（別府大学教授）  
桜木 晋一（九州帝京短期大学助教授）  
秋葉 正嗣（大分県教育庁文化課長）
- 調査主任 渋谷 忠章（県文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長）
- 調査員 村上 久和（県文化課主査）、西 哲弘（同主査）、江田 豊（同主任）  
友岡 信彦（同主任）、染矢 和徳（同主事）、橋本 一彦（同嘱託）

神崎 哲也（同囑託）、須原 緑（同囑託）、岩尾 和佳（同囑託）

平成5年度

調査委員

賀川 光夫（別府大学教授、県文化財保護審議会委員）

小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議会委員）

後藤 宗俊（別府大学教授）

田中 良之（九州大学助教授）

末広 利人（大分県教育庁文化課長）

調査主任

渋谷 忠章（県文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長）

調査員

西 哲弘（県文化課主査）、佐脇 義敏（同主査）、五十川孝正（同主任）

江田 豊（同主任）、友岡 信彦（同主任）、染矢 和徳（同主事）

橋本 一彦（同囑託）、神崎 哲也（同囑託）、志満 紀郎（同囑託）

須原 緑（同囑託）、岩尾 和佳（同囑託）

また、調査期間中、松本 直子、金 宰賢、Lise Hotdgkinson（以上九州大学）、伊 英明（専修大学）、岡 崇、柏木 善治、日高 広人、福岡 伸治（以上別府大学）、三代 俊幸（国学院大学）、久住 猛雄（早稲田大学）、高橋 千晶（立正大学）の協力を得た。

上記関係者のほか、広瀬 和雄（大阪府教育委員会）、土居 和幸、行時 志郎（日田市教育委員会）、池邊 千太郎（大分市教育委員会）、佐藤 祐二（玖珠町教育委員会）、小松 譲（佐賀県教育委員会）、桑原 幸則（神埼町教育委員会）、新宅 信久（粕屋町教育委員会）、白木 守（久留米市教育委員会）の諸氏には現地で指導・助言をいただいた。

## II 日田地区の遺跡

### 1. 遺跡の立地と環境

日田条里遺跡群、佐寺横穴墓群、大迫遺跡が立地する日田市は、大分県の北西部に位置し、福岡県と県境を接する。現在の日田市は古代以来の行政区分では西海道豊後国日田郡にあたる。その後慶応4年には明治新政府による廃藩置県で日田県が成立、しかし明治4年大分県の成立と共に日田県は廃止となり大分県に編入される。昭和15年には市制施行によって日田市となり現在に至る。

日田市は九州最大の河川である筑後川の上流域、三隈川の周囲に開けた盆地を中心としており、三隈川を西に下ると福岡県杷木・朝倉、東に遡ると玖珠盆地、南に遡ると熊本県小国町、北に峠を越えると豊前平野へと至る。このように日田市は北部九州と東九州を結ぶ文化・交通の要衝地として重要な位置を占めている。盆地の周囲は急峻な山々に囲まれ、盆地中心部は周囲の山間に水源を持つ多くの小河川が集合、三隈川と合流し、広大な沖積地を形成している。この沖積地を取り巻く様に周囲には多数の台地が形成されており、集落跡・古墳等の遺跡もまたこの台地上にほぼ集中している。

日田盆地周辺を取り巻く山地・台地は、新第三紀層を基盤とする筑紫溶岩により形成され、盆地に面した標高200～400mの高地は耶馬溪溶岩、150m前後の低台地は阿蘇溶結凝灰岩で形成されている。台地上には遺跡の存在は無論だが、斜面にも多数の横穴墓の存在が確認されている。

今回、報告する3遺跡は、日田盆地の北部に位置する。日田条里遺跡群（日田市大字三和字測ノ上、迫町、鶴町、当根町、大字西有田字塚塚、千手、シミドウ、小塚）は、花月川と有田川の合流する付近の沖積地に立地し、標高は90m前後を測る。当地域周辺は市内で最も広範に条里地割が検出できる地域ではあるが、反面、花月川・有田川の氾濫源にあたるため残りはよくない。調査区のほとんどの地域は表土・床土の下は礫・砂層であったが、中央付近の小子当根町で一部旧地形が残っており、遺構が検出された。調査区は4世紀代の住居跡1軒、土坑2基、自然流路数条等を検出した。今回の調査では条里遺構は検出されなかったが、このような旧地形の在り方からみて、当地域には条里遺構を含む他の遺構の存在する可能性は考えられる。

日田条里遺跡群の西には山田原・用松原・宮原・辻原と呼ばれる連続した台地や、独立した吹上台地があり、台地ごとに有数な遺跡が存在している。東には佐寺原台地があり、台地上からは弥生時代の集落跡が確認（平成2年度調査）されている。この佐寺原台地の北側斜面に今回報告の佐寺横穴墓群（日田市大字有田字佐寺）が立地する。西側斜面には夕田古墳・夕田横穴墓群（平成5年度調査）が、東南側斜面には水目横穴墓群が立地する。

佐寺横穴墓群の立地する斜面は台地の北側で、凹凸の激しい急傾斜地となっている。今回の調査は路線内に存在する一つの突出した尾根を中心に行い、先端を中心に2～3段に亘って築造されていた6基の横穴墓を確認した。6基とも先端及びその周辺での確認で、斜面の奥まった地点からは確認されなかった。この様な突出した尾根は路線外にも多数存在し、当地区以外でもかなりの数の横穴墓が存在する可能性は高い。

大迫遺跡（日田市大字有田字大茂）は佐寺原台地の東約1km、中尾原台地から北東へ延びる尾根状の低丘陵頂部に位置する。同丘陵上には中尾古墳群が、谷を隔てた東側丘陵上には尾瀆古墳（平成5年度調査）が位置する。大迫遺跡は丘陵の南側先端に位置し、緩やかな斜面となる。検出遺構は土坑墓・石蓋土坑墓等、阿蘇溶結凝灰岩に掘り込まれているため、崩落が激しく残りは悪かった。中尾古墳群は2基の小円墳で、調査区の北約100mに位置する。この間はほぼ平坦で、遺跡はさらに北に展開すると思われる。

#### 参考文献

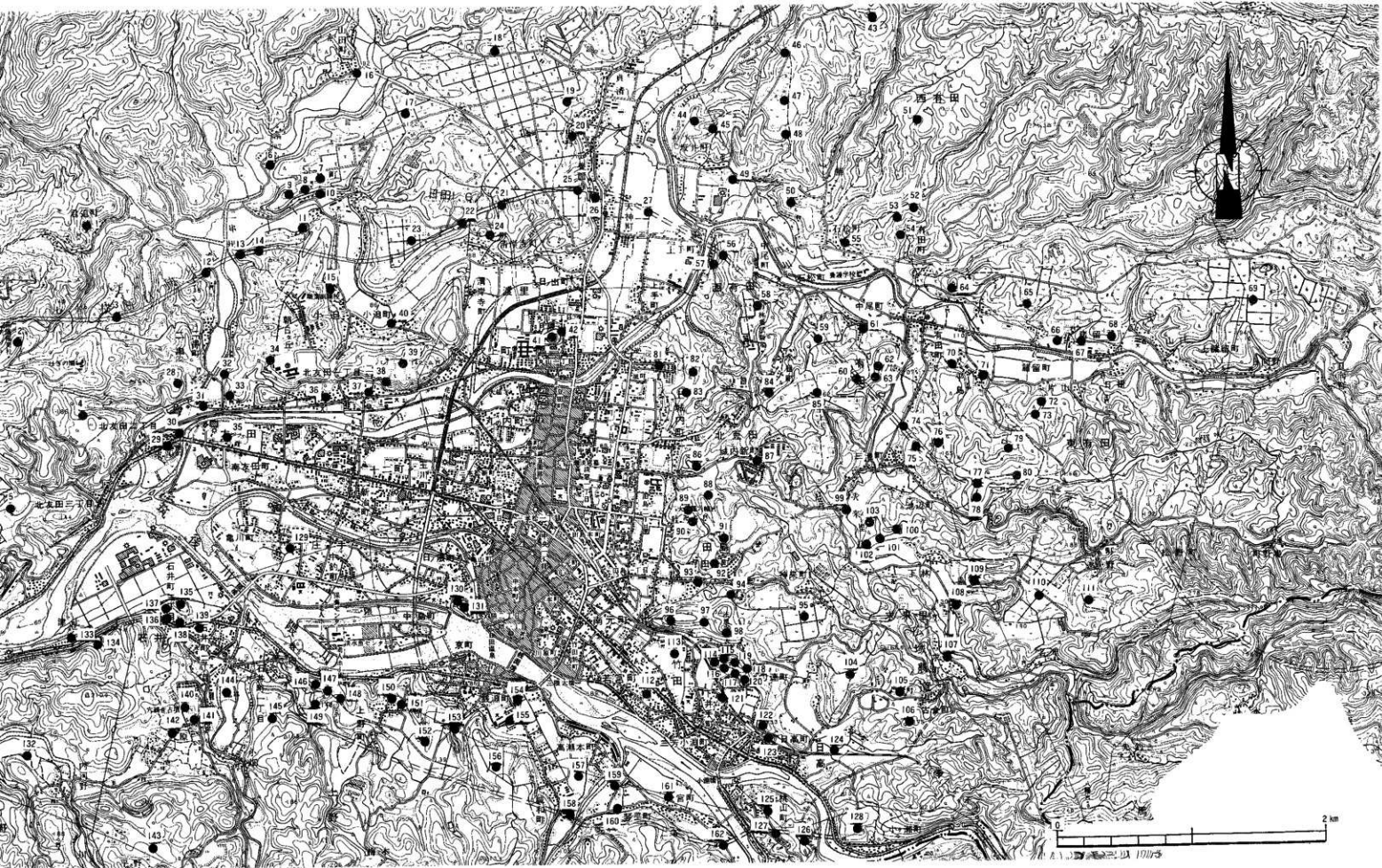
『日田市史』 日田市 1990

『大分県の地名』 平凡社 1995

番号	遺 跡 名
1	君迫遺跡
2	萩尾遺跡
3	二串西原遺跡
4	穴原遺跡
5	大見取遺跡
6	中ノ前遺跡
7	朝日宮ノ原遺跡
8	天満1号墳
9	天満2号墳
10	天神山横穴群
11	尾部田遺跡
12	山ノ神(二串)遺跡
13	小迫古墳
14	小迫横穴群
15	森本遺跡
16	岩崎遺跡
17	山田原遺跡
18	谷ノ久保遺跡
19	用松原遺跡
20	用松中村古墳
21	草場第1遺跡
22	草場第2遺跡
23	小迫辻原遺跡
24	本村古墳
25	後迫遺跡
26	羽野横穴群
27	日田糸里遺跡群
28	友田坂本遺跡
29	三郎丸遺跡
30	三郎丸古墳
31	大内田遺跡
32	鳥越古墳
33	片山石棺
34	向原遺跡
35	荻鶴遺跡
36	今泉遺跡
37	岳林寺遺跡
38	北友田・吹上横穴群
39	吹上遺跡
40	鍛冶屋廻り遺跡
41	月隈塚跡
42	月隈横穴群
43	柴尾遺跡
44	縫ノ迫1号墳
45	縫ノ迫2号墳
46	葛原古墳
47	有田葛原遺跡
48	寺坂古墳
49	峰崎遺跡
50	大行寺遺跡
51	西有田赤ハゲ遺跡
52	有田1号墳
53	有田古墳
54	上柳遺跡
55	京田遺跡

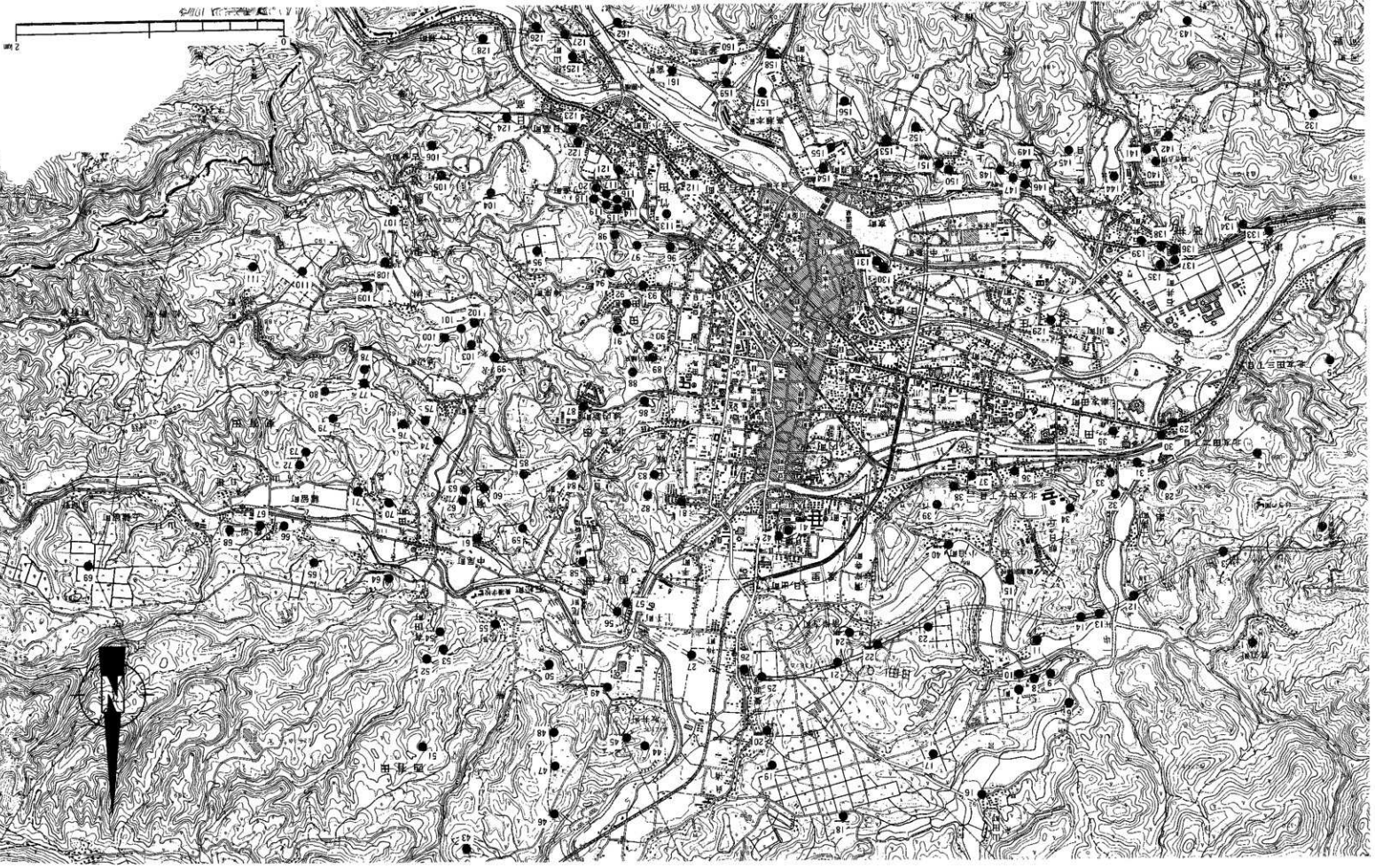
番号	遺 跡 名
56	夕田古墳
57	夕田横穴群
58	佐寺原遺跡
59	堂園遺跡
60	大迫遺跡
61	宮ノ下遺跡
62	中尾1号墳
63	中尾2号墳
64	グス園遺跡
65	須ノ原遺跡
66	世尊寺遺跡
67	城山遺跡
68	城山古墳
69	ハル遺跡
70	平島古墳
71	平島遺跡
72	クエト1号墳
73	クエト2号墳
74	尾瀬遺跡
75	尾瀬古墳
76	狐迫遺跡
77	有田塚ケ原1号墳
78	有田塚ケ原2号墳
79	平島横穴群
80	片山原遺跡
81	慈眼山瀬戸口遺跡
82	大蔵古城跡
83	丸山古墳
84	水目横穴群
85	中尾原遺跡
86	塚原遺跡
87	湯尻遺跡
88	赤迫遺跡
89	大波羅遺跡
90	薬師堂山古墳
91	丸尾神社古墳
92	丸尾古墳
93	会所宮遺跡
94	田島(後山)古墳
95	元宮遺跡
96	鳥羽塚古墳
97	会所山遺跡
98	会所山古墳
99	馬形遺跡
100	倉迫遺跡
101	ガニタ1号墳
102	ガニタ2号墳
103	ガニタ3号墳
104	東寺原遺跡
105	古金遺跡
106	株手遺跡
107	着来遺跡
108	求来里平島遺跡
109	亀ノ甲遺跡
110	町野原遺跡

番号	遺 跡 名
111	奥ノ迫遺跡
112	柳ノ本遺跡
113	鬼塚古墳
114	法恩寺1号墳
115	法恩寺2号墳
116	法恩寺3号墳
117	法恩寺4号墳
118	法恩寺5号墳
119	法恩寺6号墳
120	法恩寺7号墳
121	上井手遺跡
122	平松遺跡
123	東寺横穴群
124	日高遺跡
125	千人塚1号墳
126	千人塚2号墳
127	大部遺跡
128	小ヶ瀬遺跡
129	徳瀬遺跡
130	日隈古墳
131	日隈城跡
132	落久保遺跡
133	津辻1号墳
134	津辻2号墳
135	隈山遺跡
136	ガランドヤ1号墳
137	ガランドヤ2号墳
138	ガランドヤ3号墳
139	尾園遺跡
140	穴観音古墳
141	倉園古墳
142	長者原遺跡
143	平野遺跡
144	尾坪遺跡
145	上野赤塚遺跡
146	護願寺1号墳
147	護願寺2号墳
148	護願寺3号墳
149	寺内(護願寺)遺跡
150	上野姥塚古墳
151	上野カグネ塚古墳
152	上野遺跡
153	上野横穴群
154	姫塚古墳
155	鏡沢遺跡
156	陣が原辻原遺跡
157	条里跡
158	高瀬遺跡
159	惣田塚古墳
160	惣田遺跡
161	大宮遺跡
162	手崎遺跡



第2圖 日田市主要道跡分布圖

第2圖 日田市主要道路分布圖



# 日田糸里遺跡群

## 2. 各遺跡の調査

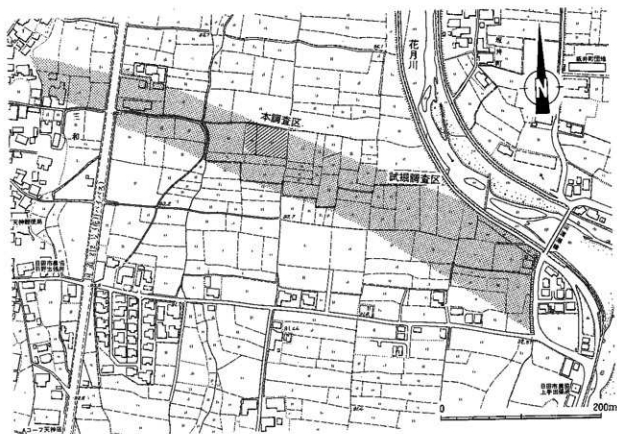
### 1) 日田糸里遺跡群

#### 遺跡の立地

調査区は日田盆地の北部、花月川と有田川の合流する沖積地上に所在している。当該地区は糸里遺跡内に位置し、西側の台地には古墳時代の羽野横穴墓群と弥生時代後期の後迫遺跡、東側の沖積地や台地斜面には古墳時代前期から後期にわたり夕田遺跡、夕田横穴墓群、夕田古墳群が展開しており、日田盆地において屈指の遺跡密度を示している。

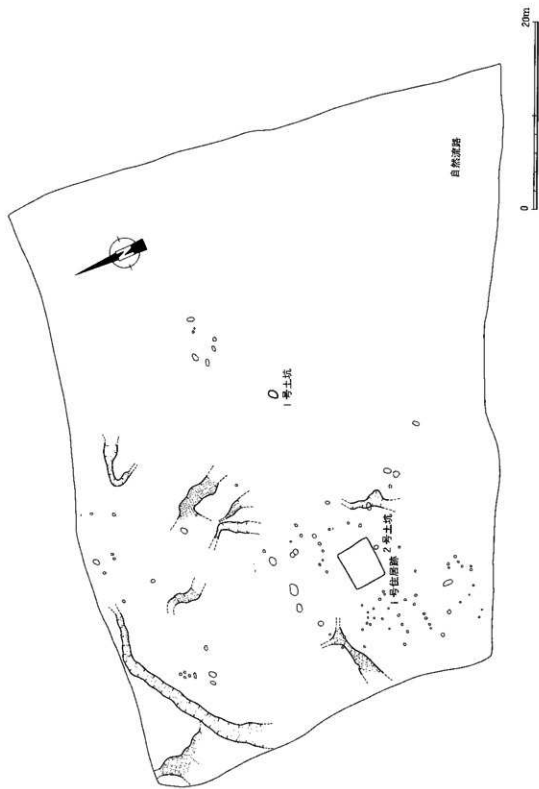
#### 調査の概要

調査範囲は大字三和字洲ノ上・迫町・鶴町・当根町、大字西有田字長塚・千手・シミドウ・小塚の最大幅90m、全長650mと長大なもので、全域にわたって試掘調査を実施した。試掘の結果、ほぼ全域で砂礫が確認されており花月川の氾濫域と推定される。調査区中央部（字当根町内の3000m<sup>2</sup>）からは遺構、遺物が検出されており、地勢から河川氾濫時に鳥状に取り残されたものと考えられる。調査区内の土砂堆積状況は表土層（現代の水田耕作土層で20～30cmの厚さ）—暗褐色粘質土層（水田の床土で酸化鉄が沈着し20～30cmの厚さ）—灰褐色土層（遺構検出面）の順である。遺構については古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、土坑2基、柱穴群、溝状遺構9条を確認した。溝状遺構については河川の氾濫に伴う自然流路と考えられる。遺物は住居跡からは罌、高坏、刀子等を、表採で扁平打製石弁等が出土している。糸里跡に係る遺構、遺物は確認されなかった。



第3図 日田糸里遺跡群周辺地形図



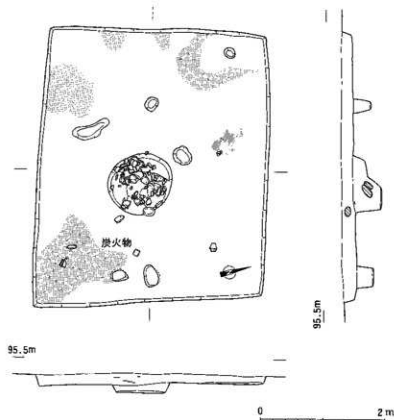


第4図 日田桑里道跡群遺構配置図

## 調査の成果

### 1号竪穴住居跡

遺構は調査区の南西側に位置する。平面プランは長方形で、規模は4.35m×3.75m、最大深20cmである。主柱穴は2本で東側に偏って設けられている。住居中央には平面プランが円形で、直径98cm、最大深48cmの二段掘の土坑を確認している。土坑内からは焼土ブロックを僅かに確認できるほか、礫を大量に出土している。住居床面からは部分的に炭化物が検出されており、焼失家屋の可能性もある。

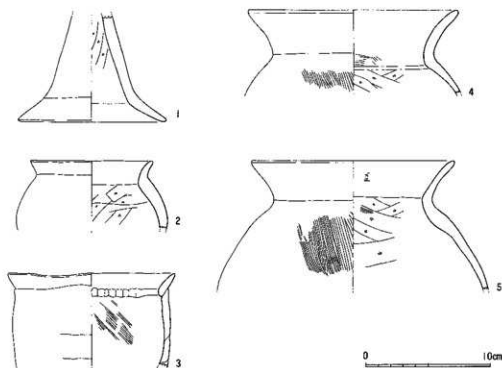


第5図 1号竪穴住居跡実測図

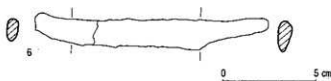
### 出土遺物

1は高坏の脚部である。色調は内外断面ともに褐色で、胎土は角閃石、石英、白色砂粒、赤色砂粒を含む軟質の土器である。内外面ともにナデ調整を僅かに確認できる。内面上部にはへら削りを確認できる。底径12.0cmである。2は甕で、口縁部は緩やかに外反している。色調は内外断面ともに褐色で、胎土は角閃石と白色砂粒を含む軟質の土器である。口縁部と外面はナデを施し、内面は左下から右上にへら削りを残している。口径9.8cmである。3は甕である。土器断面から粘土の積み上げ痕が確認できる。口縁部は貼り付けて外側に屈曲しているが、つくりは全体的に雑である。色調は内外断面ともに黄褐色で、胎土には角閃石と白色砂粒を含む軟質の土器である。外面と口縁部はナデを、内面にはハケ目を確認できる。内面の口縁接合部には指圧痕が明瞭に残されている。口径は13.4cmである。4は甕で、口縁部は外反している。色調は内外断面ともに灰褐色である。胎土は角閃石、白色砂粒、赤色砂粒を含む軟質の土器である。口縁部と外面はハケ目とナデを施し、内面には右下から左上と左

下から右上にヘラ削りを確認できる。口径は16.8cmである。5は壺である。口縁部はくの字状で僅かに外反する。色調は内外断面ともに褐色である。胎土は角閃石、白色砂粒、赤色砂粒を含む軟質の土器である。外面と口縁部はハケ目を持ち、内面は右下から左上と左下から右上にヘラ削りを施し僅かにハケ目を確認できる。口径は16.2cmである。6は刀子である。全長12.5cm、刃部長8.7cm、刃部厚0.6cm、刃幅1.5cm、頸幅0.9cm、頸厚0.7cmである。出土した遺物は弥生時代終末から古墳時代初頭に比定できよう。



第6図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図



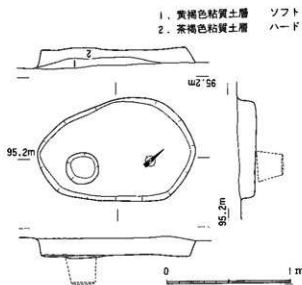
第7図 1号竪穴住居跡出土鉄器実測図

### 1号土坑

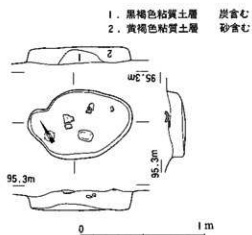
遺構は調査区の中央に位置する。平面プランは楕円形で立ち上がりは明瞭である。規模は長軸1.27m、短軸83cm、最大深14cmである。埋土の状況は2層で、緩やかな堆積状況を示している。遺構南西隅には直径26cm、最大深24cmの円形掘り方を確認している。遺物は出土しなかった。

### 2号土坑

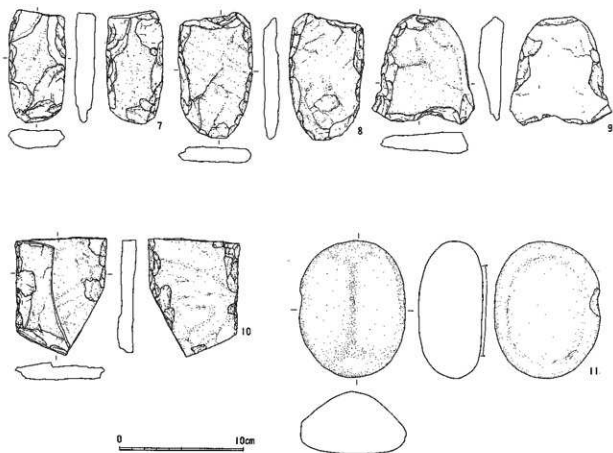
遺構は調査区の南西部に位置し、自然流路を切るかたちで検出された。平面プランはゆがんだ楕円形で立ち上がりは明瞭である。規模は長軸83cm、短軸55cm、最大深14cmである。埋土の状況は2層で緩やかな堆積状況を示している。遺物は土器片と河原石を出土した。土器片は劣化が著しく時期を特定するには至らなかった。



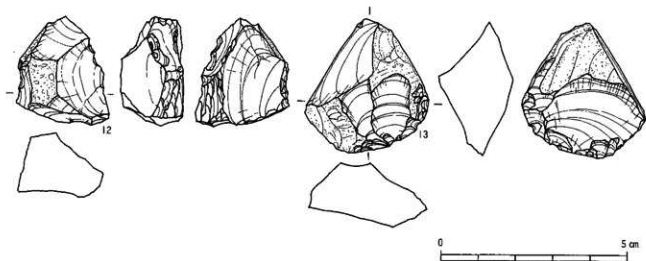
第8図 1号土坑実測図



第9図 2号土坑実測図



第10図 日田条里遺跡群出土石器実測図(1)



第11図 日田条里遺跡群出土石器実測図(2)

#### その他の出土遺物

7は泥岩の扁平打製石斧で表面採集である。確認できる寸法及び重量は最大長9.1cm以上、最大幅4.5cm、最大厚1.5cm、重量91.9gである。8は緑泥片岩の扁平打製石斧で表面採集である。確認できる寸法及び重量は最大長9.9cm以上、最大幅5.9cm、最大厚1.2cm、重量136.4gである。9は泥岩の扁平打製石斧で表面採集である。確認できる寸法及び重量は最大長8.6cm以上、最大幅8.2cm、最大厚1.6cm、重量157.3gである。10は安山岩の扁平打製石斧で表面採集である。確認できる寸法及び重量は最大長9.2cm以上、最大幅7.2cm、最大厚1.4cm、重量130.5gである。11は砂岩の磨石で表面採集である。寸法及び重量は最大長10.9cm、最大幅8.4cm、最大厚5.1cm、重量700.1gである。12は黒曜石のスクレイパーで表面採集である。寸法及び重量は最大長2.8cm、最大幅2.2cm、最大厚1.6cm、重量11.7gである。13は黒曜石のスクレイパーで表面採集である。寸法及び重量は最大長3.4cm、最大幅3.2cm、最大厚1.9cm、重量15.8gである。

#### 小 結

日田盆地における集落の存在は期的には弥生時代が中心である。地勢的には標高で120～170m、比高で40～50m程の台地上に発見されているのが大半であり、盆地北部の花月川及び二串川流域の吹上台地、小迫辻原台地等に遺跡の調査事例が多い状況である。一方、こうした台地の遺跡に比べて、段丘や沖積地の周知遺跡や発掘調査例は少なく盆地における集落の形成・発展を分析するうえで大きな障害となっていた。このことは、おそらく戦国末期から近世にかけての急激な都市化と現在の市街地の発生が大きな要因となっている。このようななかで盆地西南部、三隈川と庄手川に挟まれた微高地上に展開する徳瀬遺跡（昭和59年、60年、平成5、6、7年に調査実施）では弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての住居跡、溝状遺構、貯蔵穴等や、古墳時代前半の方形周溝墓、石棺、土墳墓で構成される墓域が確認されている。さらに平成4年には花月川を挟み調査区の対岸に位置する夕田遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物を出土する土坑、包含層を検出している。今回の調査で確認された弥生時代終末から古墳時代初頭に営まれていたとみられる住居跡等から、日田盆地においては弥生時代には段丘、沖積地に進出しており古墳時代に至っても断続的に人々の生活が営まれていたことを裏付けるものである。

#### 参考文献

『徳瀬遺跡』 大分県教育委員会 1996

『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報—日田～玖珠間— 第3集』 大分県教育委員会 1993

# 佐 寺 横 穴 墓 群

## 2) 佐寺横穴墓群

### 遺跡の立地

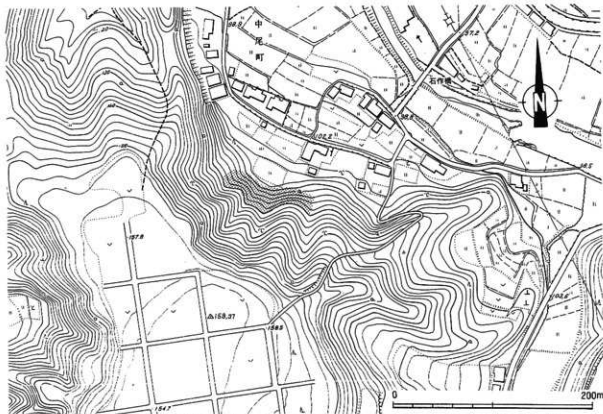
遺跡は日田市大字有田字佐寺に所在する。調査区は日田盆地を西に望む標高150mの佐寺原台地の北東側斜面に位置する。台地上は佐寺原遺跡として周知されており、平成2年度に台地の北東縁辺部約4000m<sup>2</sup>の調査を実施した結果、弥生時代中期～後期にかけての集落跡の一部が検出された。台地の西側斜面上には夕田古墳群や、夕田横穴墓群が存在し、盆地を挟んで対峙する山田原台地には小迫辻原遺跡、後迫遺跡、草場第二遺跡、羽野横穴墓群等がみられる。台地と盆地との比高差は約50mで、急峻な斜面となっている。この北東斜面上に横穴墓群は位置する。

今回の調査区は北東斜面のほぼ中央付近で、斜面からやや突出した丘壁の先端付近に位置する。この斜面は西側の有田川・花月川の合流地点で南に折れ、夕田横穴墓群の立地する丘陵斜面へと連なっている。

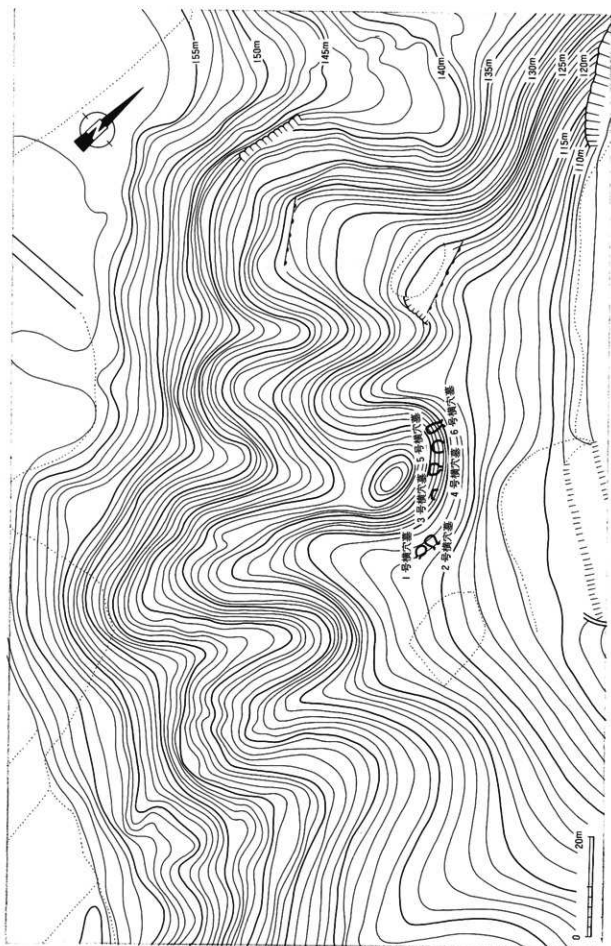
### 遺跡の概要

調査では標高115～120mの間に6基の横穴墓を検出、調査した。横穴墓は凝灰岩質の斜面に3段にわたり構築されている。遺構検出段階で既に3基開口しており、人為的な二次使用を受けていた。このため、閉塞や敷石等の施設は残っていなかった。残りの3基は急斜面、高位置、立木のため、当初は確認できなかったが、道路建設工事での重機による斜面削岩時に確認された。斜面の崩落、重機の削岩のため残りは悪く玄室或いは玄室の一部分しか残っていなかったが、敷石等の施設や遺物が検出されたため、後世の二次使用は受けていなかったと考えられる。

遺構は全体的に残りが悪く、前庭部は2・6号横穴墓で認められる程度である。羨門部は1・2・6号横穴墓で残存していた。特に6号横穴墓は飾縁を持つ。玄室の構造は妻入りの羽子板状の形態が半数以上を占める。天井部分は崩落・削平を受け不明のものは除き、四角錐形がほとんどで1基だけが切妻に造られている。敷石の認められる横穴墓は3基で、人頭大の河原石を敷き、その上面及び隙間に5～10cm程の河原小石を敷き詰めているが、4号横穴墓は奥壁寄りの部分には安山岩板石を敷いている。副葬品は鉄鏃、イモ貝製腕輪、玉類、提瓶が検出されたが、そのほとんどが4号横穴墓からの出土である。



第12図 佐寺横穴墓群周辺地形図 (1:2,500 日田市都市計画図 豆田地区より転載)



第13图 左寺洞穴群选槽配置图



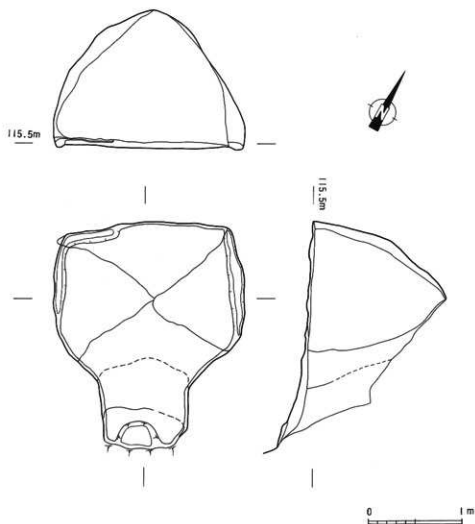
### 1号横穴墓

1号横穴墓は調査区の東端に立地し、南東方向に開口する。標高は玄室床面で115.5mを測り、玄室主軸方位はN-29°-Wである。当横穴墓は調査以前から開口しており、イモ穴、或いはゴミ穴として二次使用されていた。調査は玄室内のゴミ等の除去作業後遺構実測を行った。横穴墓自体の残りは良かったが、閉塞石や、敷石等の施設は残っていなかった。

#### 規模、構造

前庭部及び閉塞施設は既に存在しない。羨門は天井が若干崩れているが比較的残りが良く、推定の高さ85cm、床面での幅は80cmである。羨道は長さ52cm、玄門の高さ90cm、玄門幅96cmである。

玄室は二次使用を受けており、敷石等も存在しない。玄室内は長さ179cm、中央幅202cmで平入り長方形を呈している。床面は若干の凹凸はあるもののほぼ平坦であり、玄門から奥壁に向かって緩やかに上昇している。奥壁寄りの左右側壁の一部には周溝を巡らしている。天井は四角錐形を呈していて、床面からの高さは147cmである。左側壁と奥壁中央付近には幅5cm程の工具痕跡が認められた。遺物は出土していない。



第14図 1号横穴墓実測図

## 2号横穴墓

2号横穴墓は1号横穴墓の北約2mに位置し、東方向に開口する。標高は前庭部床面で117.8mを測り、玄室主軸方位はW-6°-Sである。当横穴墓は調査以前から開口しており、後世の二次使用を受けている。調査は前庭部及び玄室内の二次堆積土の除去作業後、遺構実測を行った。

### 規模・構造

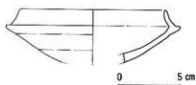
前庭部は羨門部付近の一部が残っている。造り出し等の施設は存在しない。羨門付近での床面幅は85cm、羨門からの長さは65cmである。

羨門は天井が崩落していて、高さは推定で80cm前後、幅は50cmである。羨門前の床面には長さ80cm、幅20cm、深さ10cm程の掘り込みが見られる。閉塞石を立てるための掘り込みみであろう。

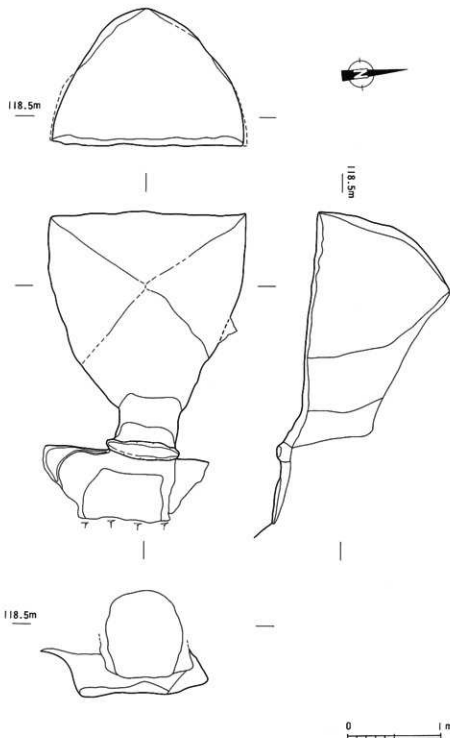
閉塞施設は検出されなかった。

羨道は長さ35cm、玄門の高さは不明、幅は88cmである。

玄室は長さ210cm、幅は奥壁付近で210cmを測り、玄門へと狭まっていく。形態は妻入りの羽子板状をしている。玄室は二次使用を受けており、敷石等は存在しない。床面はほぼ平坦で、玄門か



第15図 2号横穴墓出土遺物実測図



第16図 2号横穴墓実測図

ら奥壁に向かって緩やかに上昇している。排水溝は存在しない。天井は四角錐形を呈していて、床面からの高さは148cmである。

#### 遺物の出土状況

前底部の二次堆積土内から須恵器坏身破片が1点出土した。当横穴墓の副葬品かどうかは明確ではない。口径11.6cm、器高は不明である。胎土に角閃石、石英、白色砂粒を含み、色調は灰色である。

#### 3号横穴墓

3号横穴墓は調査区のほぼ中央に位置し、北東方向に開口すると思われる。標高は玄室床面より119.4m、玄室主軸方向はS-41°-Wを指すと思われる。当横穴墓は、急斜面、高位置、立木のため最初は確認できず、工事中の重機による斜面削岩時に、玄室の開口によって確認できた。このため残りが悪く、玄室の一部分だけが辛うじて削平を免れた。

#### 規模・構造

前底部・閉塞施設・羨門・羨道は既に削平を受け、存在しない。

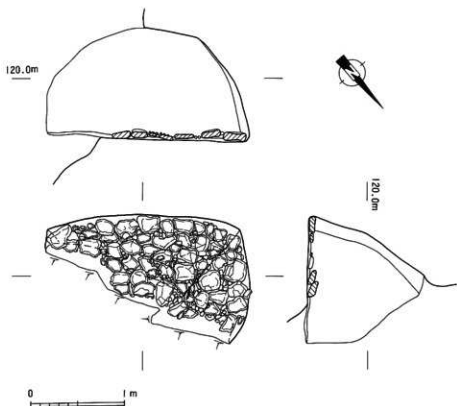
玄室は全体の三分の一から四分の一が残っていると思われる。床面には扁平河原石を敷き、その上面及び隙間に5～10cm程の河原小石を敷き詰めている。後世の二次使用は受けていない。玄室の幅は奥壁付近で208cmを測る。平面形態は不明。床面はほぼ平坦である。天井形は残存壁からみて、四角錐或いは切妻形と推測される。

#### 遺物の出土状況

遺物は右側壁から50cm、奥壁から70cm程の位置から刀子1点が出土した。柄には鹿角が残る。刀子は敷石の上面に位置し、刃部先端は羨門方向を向いている。



第17図 3号横穴墓出土遺物実測図



第18図 3号横穴墓実測図

第1表 佐寺横穴墓群 3号横穴墓出土鉄器計測表

(単位: cm)

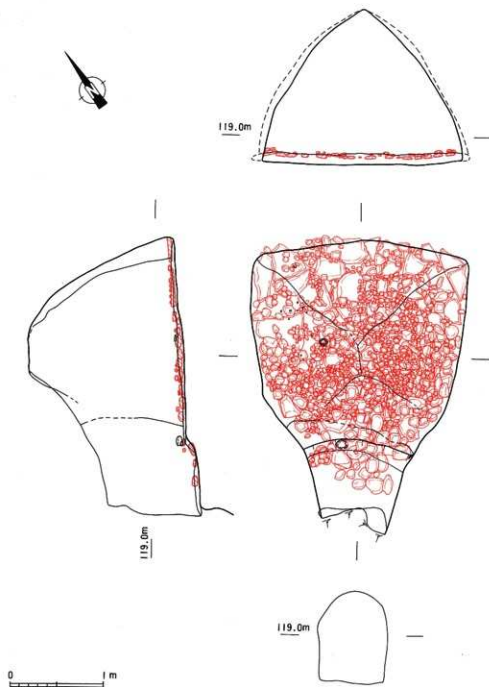
番号	器種	全長	頭部長	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
1	刀子	14.5	10.1	1.3	0.6	0.6	—	鹿角残存

#### 4号横穴墓

4号横穴墓は調査区のほぼ中央、3号横穴墓の北西約3mに位置し、北東方向に開口する。標高は玄室床面で118.7m、玄室主軸方向はS-37°-Wである。当横穴墓は3号横穴墓と同様工事中に羨道部の開口によって確認された。削平により、前庭部・閉塞施設・羨門及び羨道の一部は消滅している。玄室は後世の二次使用及び削平は受けておらず、完全な形で残っていた。玄室内から副葬品が出土した。

#### 規模・構造

前庭部・閉塞施設・羨門は現存しない。



第19図 4号横穴墓実測図

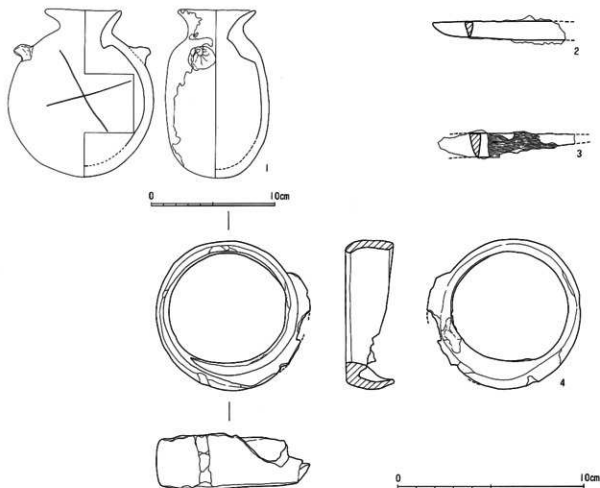
羨道は天井が崩落しているため高さは不明であるが、長さは現状で約80cm、幅は中央でほぼ100cmである。玄室との境には約10cmの段差を持つ。床には扁平の河原石を敷いている。敷石除去後の床面はほぼ平坦である。玄門は一部崩落しているもののほぼ原形を保っている。高さは98cm、床での幅は68cmである。

玄室は天井の一部が崩落しているものの残りは良い。長さは210cm、幅は奥壁付近で231cm、玄門付近で120cmで、妻入りの羽子板状を呈している。床は奥壁から約50cmの位置まで安山岩板石を敷き、玄門寄りの床面には扁平の河原石を敷いている。その後この敷石の上面及び隙間に径5～10cmの小石を補填している。床面は奥壁の板石敷きの部分が数cm高く造られている。他はほぼ平坦で、奥壁に向かって緩やかに上昇している。天井は切妻形を呈している。床面からの高さは168cmである。

#### 遺物の出土状況

副葬品は玄室奥壁左隅付近で勾玉1・小玉1を、玄室中央左端付近でイモ貝製腕輪1・切子玉4・管玉2・小玉4・歯を、玄室中央から右端にかけて刀子1・歯を、玄門付近で提瓶1・刀子1・歯を検出した。これ以外にも玄室内の土壌洗浄により約80個の小玉を検出した。

遺物の出土状況からみて被葬者は3～4人と考えられる。

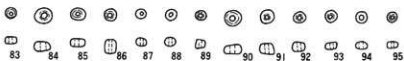
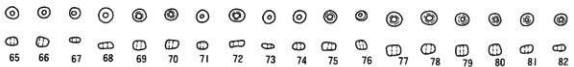
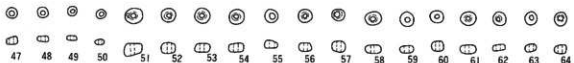
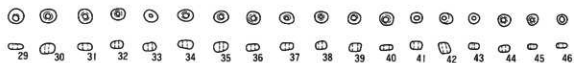
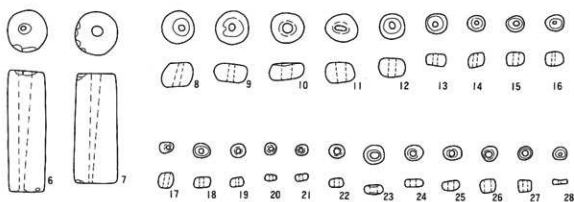
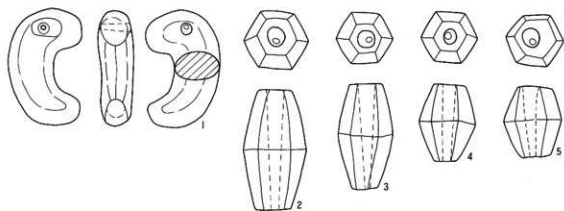


第20図 4号横穴墓出土遺物実測図(1)

第2表 佐寺横穴墓群4号横穴墓出土具輪計測表

(単位: cm, g)

番号	材質	外径	断面径	重量	備考
1	イモガイ	7.9×8.1	2.5×0.4	58.4	



第21图 4号横穴墓出土物实测图(2)

第3表 佐寺横穴墓群4号横穴墓出土玉類計測表

(単位: mm, g)

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
1	勾玉	瑪瑙	琥珀	31.2	9.0	3.2~1.5	7.0	片面穿孔
2	切子玉	水晶	透明	32.0	18.0	5.0~2.0	11.0	〃
3	〃	〃	〃	28.5	15.0	5.0~1.5	7.0	〃
4	〃	〃	〃	20.5	15.0	4.0~2.0	5.3	〃
5	〃	〃	〃	19.0	16.0	4.5~1.5	5.1	〃
6	管玉	碧玉	深緑	32.2	10.6	3.8~1.3	7.1	〃
7	〃	〃	〃	29.4	11.2	2.5~1.2	7.9	〃
8	小玉	ガラス	コバルトブルー	8.0	6.5	1.8	0.9	
9	〃	〃	〃	8.5	5.0	2.0	0.7	
10	〃	〃	〃	9.0	4.3	2.3	0.5	
11	〃	〃	〃	8.2	5.3	3.0	0.5	
12	〃	〃	〃	6.5	5.2	2.0	0.4	
13	〃	〃	〃	5.5	3.5	1.2	0.1	
14	〃	〃	〃	4.5	3.8	1.0	0.1	
15	〃	〃	〃	4.7	3.5	1.3	0.1	
16	〃	〃	〃	4.8	4.0	1.0	0.1	
17	〃	〃	〃	4.0	4.3	1.3	0.1	
18	〃	〃	〃	4.2	2.8	1.2	0.1	
19	〃	〃	〃	3.8	2.2	1.0	0.1	
20	〃	〃	〃	3.2	2.0	1.2	0.05	
21	〃	〃	〃	3.2	2.0	1.2	0.05	
22	〃	〃	〃	3.8	2.5	1.5	0.1	
23	〃	〃	〃	5.3	2.5	2.0	0.1	気泡有
24	〃	〃	〃	4.8	2.0	1.2	0.1	
25	〃	〃	〃	5.2	3.0	1.5	0.1	
26	〃	〃	〃	4.5	3.8	1.7	0.1	
27	〃	〃	〃	3.8	3.0	2.0	0.05	
28	〃	〃	〃	4.3	1.8	0.8	0.05	
29	〃	〃	〃	4.0	1.3	1.5	0.05	
30	〃	〃	〃	4.0	3.0	1.2	0.05	
31	〃	〃	〃	3.8	2.0	1.2	0.05	
32	〃	〃	〃	3.5	2.5	1.3	0.05	
33	〃	〃	〃	3.8	2.2	1.0	0.05	
34	〃	〃	〃	4.0	2.3	1.5	0.05	
35	〃	〃	〃	3.8	2.8	1.2	0.05	気泡有
36	〃	〃	〃	3.8	2.0	1.2	0.05	〃
37	〃	〃	〃	3.5	2.2	1.2	0.05	
38	〃	〃	〃	3.3	2.2	1.2	0.05	
39	〃	〃	〃	3.0	2.2	1.8	0.05	
40	〃	〃	〃	3.3	1.8	1.7	0.05	
41	〃	〃	〃	3.1	2.0	1.2	0.05	
42	〃	〃	〃	3.0	2.8	1.0	0.05	
43	〃	〃	〃	2.8	1.8	0.8	0.05	
44	〃	〃	〃	3.0	2.2	1.2	0.05	
45	〃	〃	〃	2.5	1.5	1.3	0.05	
46	〃	〃	〃	3.0	1.1	1.5	0.05	
47	〃	〃	〃	2.9	1.2~2.0	1.2	0.05	
48	〃	〃	〃	2.8	1.8	1.0	0.05	気泡有

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
49	小玉	ガラス	マリンブルー	2.4	1.0	1.0	0.05	
50	〃	〃	〃	2.6	1.5	1.0	0.05	
51	〃	〃	〃	4.2	3.3	1.0	0.05	
52	〃	〃	〃	3.7	2.8	1.2	0.05	
53	〃	〃	〃	4.0	1.3	1.2	0.05	
54	〃	〃	〃	3.5	2.5	1.2	0.05	
55	〃	〃	〃	3.7	2.0~1.5	1.5	0.05	
56	〃	〃	〃	3.2	2.2	1.2	0.05	気泡有
57	〃	〃	〃	3.2	3.0	1.7	0.05	
58	〃	〃	〃	4.2	2.2	1.0	0.05	
59	〃	〃	〃	4.0	2.0	1.3	0.05	
60	〃	〃	〃	3.3	3.0	1.0	0.05	気泡有
61	〃	〃	〃	4.0	2.5	1.2	0.05	
62	〃	〃	〃	3.2	1.7	1.0	0.05	
63	〃	〃	〃	3.5	2.0	1.0	0.05	
64	〃	〃	〃	3.2	2.3	1.5	0.05	
65	〃	〃	〃	3.3	2.2	1.2	0.05	気泡有
66	〃	〃	〃	3.0	2.8	1.0	0.05	
67	〃	〃	〃	2.9	1.2	1.2	0.05	気泡有
68	〃	〃	〃	4.0	1.8	1.5	0.05	
69	〃	〃	薄緑青	3.5	2.5	1.3	0.05	
70	〃	〃	〃	3.3	2.5	1.2	0.05	気泡有
71	〃	〃	〃	3.2	2.0	0.8	0.05	
72	〃	〃	〃	4.0	1.5	1.5	0.05	
73	〃	〃	〃	3.5	1.2	1.0	0.05	
74	〃	〃	〃	3.2	2.0	1.2	0.05	
75	〃	〃	〃	3.2	2.2	1.2	0.05	
76	〃	〃	〃	2.8	2.6	0.8	0.05	
77	〃	〃	レモンイエロー	4.0	2.8	1.3	0.05	
78	〃	〃	〃	4.0	2.8	1.5	0.05	
79	〃	〃	〃	3.3	2.8	1.0	0.05	
80	〃	〃	〃	3.5	3.2	1.2	0.05	
81	〃	〃	〃	3.7	2.2	1.2	0.05	
82	〃	〃	〃	3.2	1.7	1.0	0.05	
83	〃	鉛ガラス	赤褐	2.8	1.8	1.0	0.05	
84	〃	翡翠	マリンブルー	4.7	2.7	1.8	0.05	
85	〃	〃	〃	3.5	2.0	1.0	0.05	
86	〃	〃	〃	3.0	3.8	0.8	0.05	
87	〃	〃	〃	2.8	2.2	1.0	0.05	
88	〃	〃	薄青緑	3.0	2.3	1.0	0.05	
89	〃	〃	〃	2.8	2.5	1.2	0.05	
90	〃	〃	黄緑	4.7	2.5	1.3	0.05	
91	〃	〃	〃	3.5	2.8	1.0	0.05	
92	〃	〃	〃	3.2	2.7	1.2	0.05	
93	〃	〃	〃	3.0	2.0	1.0	0.05	
94	〃	〃	〃	3.2	2.0	1.2	0.05	
95	〃	〃	〃	2.8	1.7	0.8	0.05	



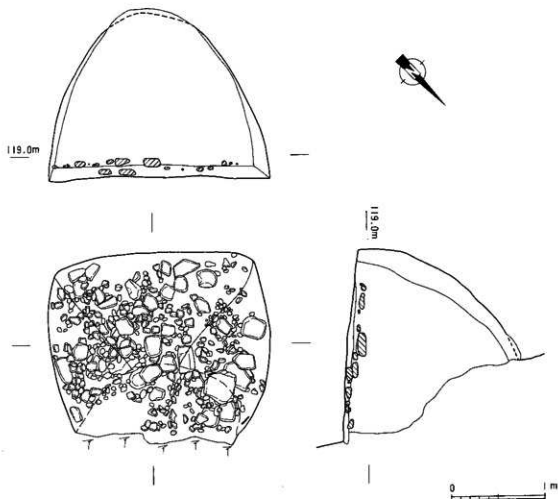
## 出土遺物

1は提瓶で口径6.2cm、器高13.4cm、胴部最大径11.7cmである。口頸部は外反ししながら延び、端部は丸い。胴部は丸く、外面両肩に把手を持つ。外面には回転カキ目を施し、緑色の自然釉がみられる。胴部中央にはヘラ記号を有する。

2・3は刀子で、2は基部を欠く。3は刃部と基部の一部を欠くが、基部には鹿角が残存している。4は完形のイモ貝製腕輪で、横切りである。

玉類は勾玉1、切子玉4、管玉2、小玉88個が出土している。勾玉は瑪瑙製で、長さ3.1cmと比較的大型の製品で片面穿孔である。形態は、尾部に向かって僅かに細くなるものの全体の幅はほぼ近い値となり、コ字形を呈している。切子玉は水晶製で、長径1.9〜3.2cm、短径1.5〜1.8cmを測り、片面穿孔である。管玉は碧玉製で、長さ2.9〜3.2cmで片面穿孔である。小玉は88個出土し、この内ガラス製は76個で、12個は翡翠製である。

当横穴墓は出土遺物からみて6世紀後半の構築と考えられる。



第22図 5号横穴墓実測図

### 5号横穴墓

5号横穴墓は調査区の北側に位置し、北東方向に開口すると思われる。標高は玄室床面で118.8m、玄室の主軸方向はS-43°-Wである。当横穴墓は3～4号横穴墓と同様、工事中に確認された。削平により前庭部・閉塞施設・羨道部・玄室の一部は消滅している。玄室は全体の三分の二ほどが残存、後世の二次使用は受けていないと思われる。

#### 規模・構造

先に触れたように前庭部・閉塞施設・羨道部は存在しない。

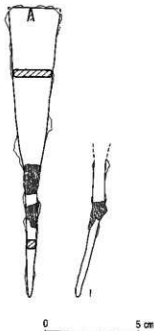
玄室は全体の三分の二程度が残っていると思われる。床面に石を敷いているが乱雑である。敷石は径20～30cmの扁平石をまばらに敷き、隙間を補填するように径5～10cmの小石で埋めており、敷き詰めている状況ではない。玄室の幅は中央付近で236cmを測る。平面形態は妻入り形と推測される。敷石除去後の床面はほぼ平坦であるが、玄門方向から奥壁に向かって緩やかに上昇している。排水溝等の施設は確認されなかった。天井は切妻或いは四角錐を呈していると思われる。

#### 遺物の出土状況

兩葬品は玄室右側壁付近で鉄鍔1点が出土した。鍔は短頭で、鍔身上部が刃部となり、方頭形を呈している。鍔被はほとんどなく、緩やかにすぼまって頸部へ移行する。全長は15.5cm、頭部長8.4cm、刃幅2.2cm、頸幅0.7cm、刃部厚0.4cm、頸厚0.7cmであり、茎部には木質部が残存している。

これ以外にも玄室内の土壌洗浄により、28個の小玉を検出した。ガラス製が26個で翡翠製が2個である。

出土した鉄鍔の形態からみて、当横穴墓の造営時期は6世紀後半代に求められよう。



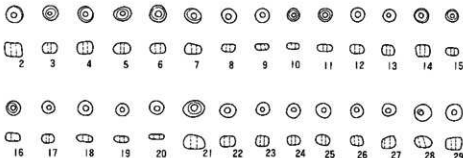
### 6号横穴墓

6号横穴墓は調査区の北端に位置し、北北東方向に開口する。標高は前庭部床面で117mを測り、玄室主軸方向はS-17°-Wを示す。当横穴墓は草木の伐開時に玄室が開いていたため確認された。玄室は二次使用を受けており、敷石等の施設は存在しない。調査は前庭部及び玄室内の二次堆積土の除去作業後、遺構実測を行った。

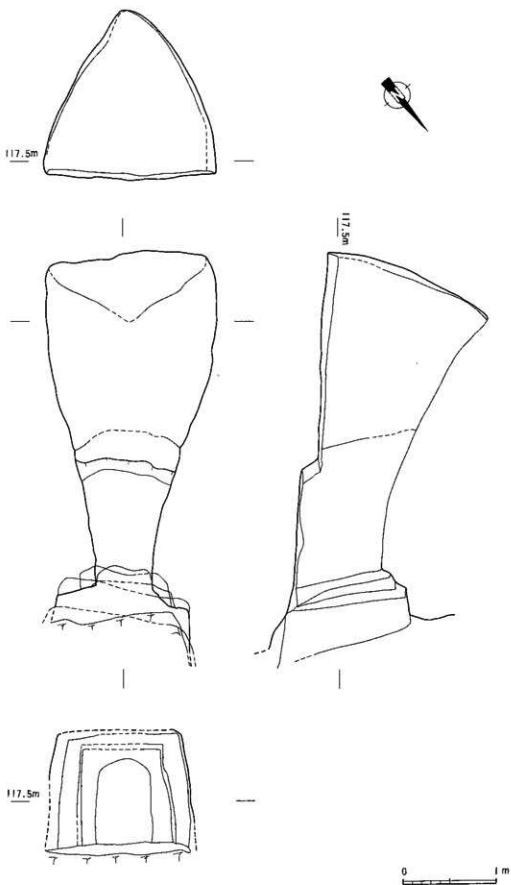
#### 規模・構造

前庭部は羨門部

前面の一部が残っているだけである。床面幅は最大142cmで、埋土等は残っていない。羨門は高さ91cm、床面での幅は60cmである。



第23図 5号横穴墓出土遺物実測図



第24图 6号横穴墓实测图

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
2	小玉	ガラス	藍	4.7	3.8	1.5	0.2	
3	〃	〃	〃	4.2	2.8	1.0	0.1	気泡有
4	〃	〃	〃	4.1	3.2	1.2	0.1	
5	〃	〃	〃	4.7	3.0	1.0	0.1	
6	〃	〃	〃	4.1	2.8	1.3	0.1	
7	〃	〃	〃	4.5	3.0	1.3	0.1	気泡有
8	〃	〃	〃	4.0	2.0	1.4	0.1	
9	〃	〃	〃	3.5	1.8	1.2	0.1	気泡有
10	〃	〃	〃	3.5	1.5	1.0	0.1	
11	〃	〃	〃	4.0	1.8	1.2	0.1	
12	〃	〃	〃	3.8	2.5	1.5	0.1	
13	〃	〃	〃	3.5	2.5~2.8	1.0	0.05	
14	〃	〃	〃	3.8	3.2	1.0	0.1	
15	〃	〃	〃	3.4	2.2	1.2	0.1	
16	〃	〃	〃	4.0	2.0	1.2	0.1	
17	〃	〃	緑青色	3.5	2.4	1.0	0.1	
18	〃	〃	マリンプルー	4.0	1.8	1.5	0.1	
19	〃	〃	〃	3.7	1.6	1.2	0.05	
20	〃	〃	〃	4.0	1.2	1.5	0.1	気泡有
21	〃	〃	緑青色	5.8	3.0~3.8	1.7	0.2	〃
22	〃	〃	マリンプルー	4.5	2.6	1.5	0.1	〃
23	〃	〃	緑青色	3.5	2.8	1.0	0.1	
24	〃	〃	〃	3.5	2.5	1.0	0.1	
25	〃	〃	マリンプルー	3.8	2.6	1.2	0.1	気泡有
26	〃	〃	〃	3.3	2.5	1.2	0.1	〃
27	〃	〃	緑青色	3.8	2.8~3.2	1.4	0.1	
28	〃	翡翠	モスグリーン	4.5	2.9	1.7	0.1	
29	〃	〃	〃	4.5	3.3	1.2	0.1	

第4表 佐寺横穴墓群5号横穴墓出土玉類計測表 (単位: mm, g)

羨門の周囲には二段の飾り縁が残る。天井の一部が欠損しているが、ほぼ完全な形で残っており、今回の調査では唯一飾り縁を有する横穴墓である。閉塞施設は残っていない。

羨道は比較的長く、玄門に向かって開いていく。天井は崩落している。羨道と玄門部の境は明瞭で、高さ18cm程の段差を持つ。長さ133cm、幅は玄門付近で106cmである。床面はほぼ平坦である。

玄門部の椽は、崩落はあるもののほぼ明瞭に残っている。

玄室は長さ220cm、幅は奥壁付近で183cmを測る。平面形態は妻入り長方形の羽子板状を呈している。床は二次使用を受けたと思われる、敷石等の施設はみられない。床面はほぼ平坦で、奥壁に向かって緩やかに上昇している。排水溝は存在しない。天井形態は四角錐形であり、奥壁の両端途中から延びる稜線が認められる。この稜線の交わる部分が一番高く、床からは177cmである。天井の一部は崩落している。

当横穴墓からは遺物の出土はない。

## 小 結

佐寺横穴墓群の立地する斜面は凹凸の激しい複雑な地形を呈しており、傾斜はかなりの急勾配である。

横穴墓は斜面の突出部先端周辺にはほぼ3段にわたり、構築されていたが、数基が連続して構築されている状況ではなく、平成5年度に調査の行われた夕田横穴墓群とは若干の様相の違いがみられた。

今回調査を行った6基の横穴墓は前庭部が削平を受けていたり、二次使用により埋土が除去されており、埋土による追葬ラインを追うことができなかった。玄室はやはり削平や二次使用を受けており、ほぼ原形が残っている横穴墓は4号墓だけである。

4号横穴墓玄室内からは、玉類・貝輪・須臾器提瓶・刀子が出土した。須臾器の形態から見て当横穴墓は6世紀後半前後の使用幅と考えられる。以下、4号横穴墓の副葬品について検討してみる。

貝輪はイモ貝製の横型で、日田市内では草場第二遺跡97号石棺(古墳時代後期)、北友田横穴墓群(6世紀後半)、周辺では竹田市の十一横穴墓(6世紀中～後半)、三光村上ノ原横穴墓群12号(6世紀後半～7世紀中葉)、22号(6世紀後半～7世紀中葉)、24号(6世紀中葉～6世紀後半)、62号(5世紀末～6世紀中葉)、69号(6世紀末～7世紀前半)、行橋市の馬ヶ岳横穴墓(6世紀後半)、竹並横穴墓群では6期の横穴墓(6世紀末～7世紀初頭)から出土している。いずれもイモ貝製の横型製品である。上記以外にも貝輪の出土した遺跡は多数存在するが、ほとんどが古墳出土であり時期的には5世紀中頃～6世紀代である。

このようにしてみると豊前・豊後周辺では横穴墓より出土する貝輪はいずれもイモ貝であり、6世紀中葉～7世紀前半に集中している。このことは追葬の時代幅を考慮しても、4号横穴墓の時期と一致する。

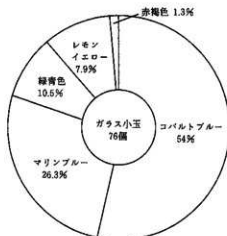
玉類は洗浄出土遺物の小玉を除くと、玄室内の2ヵ所で集中した地点がみられる。第1地点は奥壁左隅付近で勾玉1とガラス小玉4個が出土している。第2地点は左側壁中央付近で、切子玉4、管玉2、小玉4個、これに貝輪と歯が出土している。

次に小玉(総数88個)の分類であるが、ガラス製小玉は76個(鉛ガラスを含む)で全体の86.4%を占める。色調はコバルトブルーが最も多く55.9%(41個)、次にマリンプルーで26.3%(20個)、以下緑青10.5%(8個)、レモンイエロー7.9%(6個)、赤褐色鉛ガラス1.3%(1個)と続く。このなかでレモンイエローガラス小玉と赤褐色鉛ガラス小玉が全体の9.2%を占めているのが注目される。これら2種類のガラス小玉は全体の生産量が少なく貴重であったとされているが、4号横穴墓に関してはかなりの割合を占めている。5号横穴墓からも洗浄遺物でガラス小玉が出土していたが、いずれもコバルトブルー・マリンプルー・緑青で、レモンイエロー・赤褐色の小玉は出土しなかった。

被葬者の数は、先述した様に玉類の検出状況で2名の被葬者がいると思われる。さらに右側壁中央付近で刀子・歯が、玄門付近で提瓶・刀子・歯が出土した。この2地点も被葬者の頭位と推測される。これらの事例から考えて当横穴墓には少なくとも4名の被葬者がいたと思われる。埋葬順位・性別等は不明である。

## 参考文献

- |       |                  |                   |      |
|-------|------------------|-------------------|------|
| 石塚久則他 | 『塚廻り古墳群』         | 群馬県教育委員会          | 1980 |
| 橋本博文他 | 『常陸福山古墳』         | 大分県教育委員会          | 1981 |
| 村上久他  | 『上ノ原横穴墓群』        | 大分県教育委員会          | 1991 |
| 池邊千太郎 | 『豊前・豊後の横穴墓形態変遷論』 | 『おおいた考古』3、大分県考古学会 | 1990 |



第5表 佐寺横穴墓群4号横穴墓出土  
ガラス小玉色別構成比

大 迫 遺 跡

### 3) 大迫遺跡

#### 遺跡の立地 (第25図)

大迫遺跡は、日田盆地をとり囲む低丘陵の北東部大字有田字大茂に所在し、その間を貫く求々里川右岸の標高145mの舌状丘陵上に立地する。調査区は南北約50m、東西約20mの低丘陵頂部の平坦地に位置する。丘陵の周囲は急峻な斜面となっており、有田の低湿地との比高差は約40mある。峰続きの北側平坦部には中尾1・2号墳が所在することから、当古墳群との関係が考えられた。

#### 遺跡の概要

当遺跡は平成3年2月から試掘調査を行い、土墳墓・石蓋土墳墓などを確認した。それをうけて平成3年度は、4月から本調査に入った。その結果、古墳時代の土墳墓・石蓋土墳墓・石棺など合計26基を検出し、調査した。当調査区は凝灰岩上に形成されており、石蓋の陥没、土墳側壁の崩落、さらには後世の削平を受けていて残りはあまり良くなかった。

土墳墓は8基を確認したが付近に棺材が散在していることから、このうちの数基は石蓋土墳墓であった可能性は否定できない。規模は長辺1~2m前後、短辺0.5m前後で、隅丸長方形をしている。副葬品としては鉄鏃・小玉・土師器などが出土した。

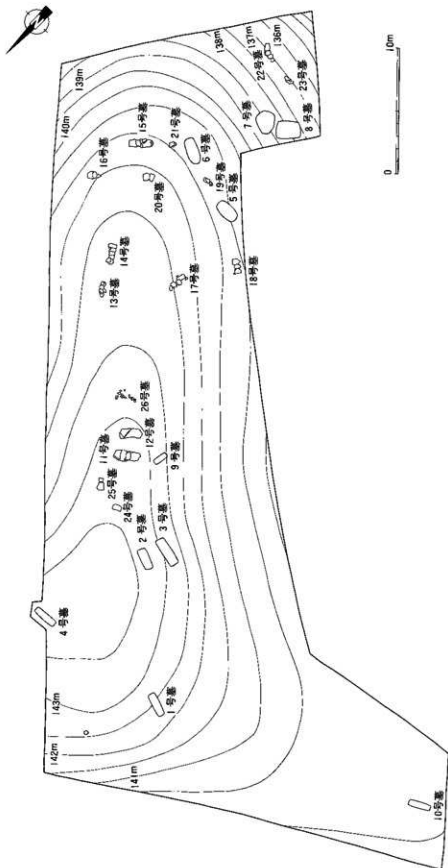
石蓋土墳墓は15基を確認した。石蓋の石材は安山岩・凝灰岩の2種類を使用しており、それぞれの割石を数枚重ね合わせている土壌、両方とも使用している土壌、あるいは1枚石の石蓋土墳墓などが検出された。副葬品としては鉄鏃・土師器等が出土した。このうち2基から人骨が出土した。この15基のうち3基は0.5×0.3m前後の小児用であり、棺材は0.8m程の凝灰岩を1枚、あるいは2枚使用して石蓋としている。

石棺は1基確認されたが、北側小口部分が残存しているだけであり石蓋および割石は存在は不明である。墓壇も削平を受けており形成時の様相は残していない。副葬品は鉄鏃・鉄剣等鉄器が大量に出土した。

今回の調査は低丘陵の南東向きに開けた地点を対象に行ったが、道路幅という限られた範囲であったため、丘陵全体の広がりを探ることができなかった。さらに約100m北側の平坦部には2基の古墳が存在することより同古墳群の一部とも考えられる。



第25図 大迫遺跡周辺地形図 (1:2,500 日田市都市計画図 有田地区より転載)



第26図 大迫遺跡遺構配置図



## 調査の成果

### 凡例

本文中で使用する語句は、「墓塚」は墓が占地する部分を浅く掘った一時的な墳を指し、その中心部に遺体や棺を納めるために深く掘った二次的な墳を「土塚」と呼ぶ。また墓塚が検出されたものは「二段掘り込み」、されなものは「一段掘り込み」の名称を用いた。

墓塚の規模をいう場合は墓塚底面の長軸×短軸である。また土塚の規模をいう場合は上面の長軸×頭位最大幅×土塚の深さであり、内法は土塚底面の長軸×短軸である。

頭位方向は土塚の一方を広くつくること、また床面の一方を高くつくることなどにより判断したが、すべてが確定したものではない。主軸方向の角度をいう場合は頭位方向によって示している。方位は磁北であり、真北から西偏約6度（1975年測定）である。また方位の表現に方位角を用いた。したがって北が0度、東が90度、南が180度、西が270度である。

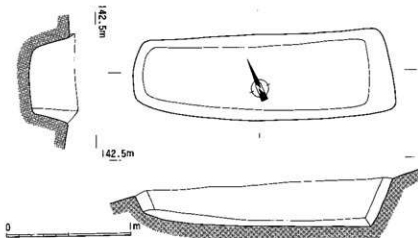
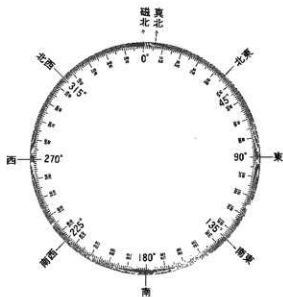
石蓋土塚墓の場合は、上段に検出された石蓋の平面実測図を、中段には蓋石を除き完掘した土塚平面図を、下段と左右いずれかには、蓋石を被せたままの断面図を配している。

### 1号墓（第27図）

調査区の西に位置する。標高は142.3m前後であり、主軸を方位角112度（292度）にとる一段掘り込みの土塚墓である。土塚の規模は2.08×0.68×0.38mで隅丸長方形をしている。内法は1.82×0.51mである。土塚の残りは良くほぼ原形を保っている。

床面は南東方向が広くつくられていることより頭位方向と思われるが、北西方向が若干高くつくられているため確定はできない。

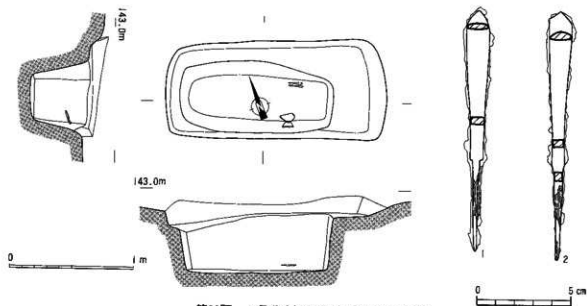
土塚上面付近から土師器破片が出土したが流れ込みあるいは棺外副葬の可能性が高い。



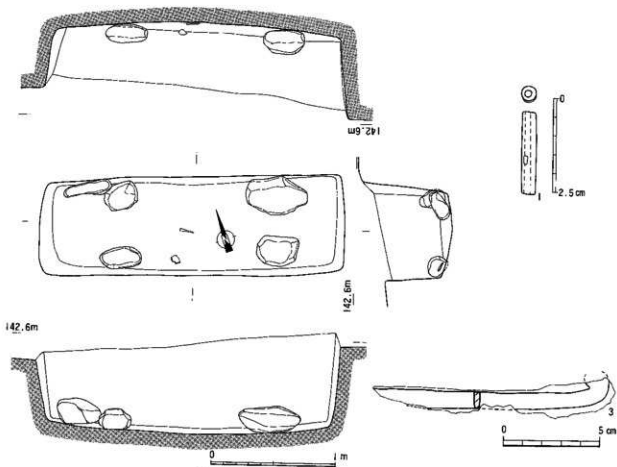
第27図 1号墓実測図

2号墓 (第28図)

調査区の中央やや西に位置する。標高は142.9m前後であり、主軸を方位角110度にとる二段掘り込みの土壌墓である。墓壇の規模は1.78×0.78m、土壇の規模は1.23×0.57×0.45mで隅丸長方形をしている。内法は1.11×0.35mである。土壇の規模からして小児用と思われる。



第28図 2号墓実測図及び出土物実測図



第29図 3号墓実測図及び出土物実測図

墓墳底面から粘土目張りの痕跡が確認されなかったため、蓋の存在は不明である。土壌内外での赤色顔料の使用は認められない。また床面には枕に使用したと考えられる粘土や礫等の施設は認められないが、南東側が広く、若干高くつくられていることより頭位方向と思われる。

副葬品は土壌東側の北壁付近から長頸阿瓦造壺前式鉄2点(第6表・第28図)がほぼ床面直上で出土し、その先端は頭位方向を向いている。土師器片も2点出土したが、流れ込みあるいは棺外副葬の可能性が高い。

### 3号墓(第29図)

調査区の中央やや西、2号墓の南に位置する。標高は142.5m前後であり、主軸を方位角110度(290度)にとる一段掘り込みの土墳墓である。土壌の規模は2.45×0.79×0.68mで長方形をしている。内法は2.28×0.68mである。

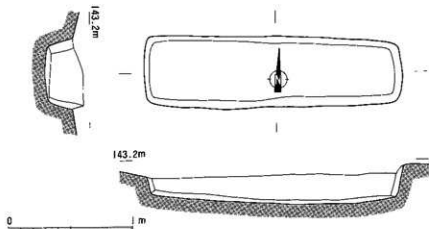
土壌の残りは非常に良くほぼ原形を保っている。底面は中央部分がやや窪んでいるが、ほぼ平坦に整形されており、その四隅に25cm～50cm大の5個の河原石が置かれていた。これらの石の上面は床面より20cm程度で揃っており、この土墳墓は石上に棺を埋置した木棺墓である可能性も考えられる。土壌内での赤色顔料の使用は認められない。3号土壌は床面の幅は東側が若干広いことより頭位方向と思われるが、底面がほぼ平坦なため確定はできない。

副葬品は土壌中央付近から藤手刀子1点(第6表・第29図3)、碧玉製の管玉1点(第7表・第29図1)、および土器片が出土した。土器片は流れ込みあるいは棺外副葬の可能性が高い。

### 4号墓(第30図)

調査区の北側に位置する。標高は142.5m前後であり、主軸を方位角268度にとる一段掘り込みの土墳墓である。土壌の規模は2.08×0.57×0.26mで長方形をしている。内法は1.97×0.45mを測る。

4号墓は尾根の頂部に近いため、土壌の残りはよくない。床面には枕に使用したと考えられる粘土や礫あるいは礫床等の施設は認められないが、西側が広く、また若干高くつくられていることより頭位方向と思われる。土壌内での赤色顔料の使用は認められない。

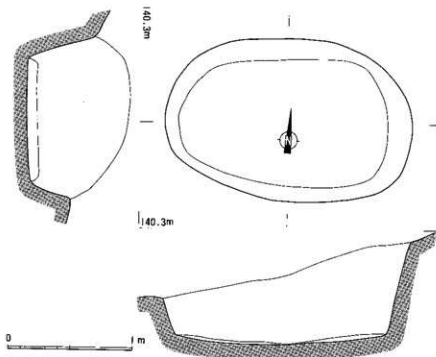


第30図 4号墓実測図

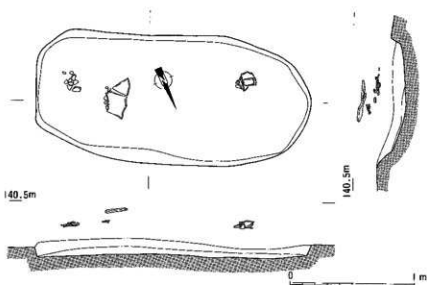
5号墓 (第31図)

調査区の南側に位置する。標高は140.3m前後であり、主軸を方位角85度にとる一段掘り込みの土壇墓である。土壇の規模は2.21×1.02×0.12mで隅丸長方形をしている。内法は2.17×0.87mである。

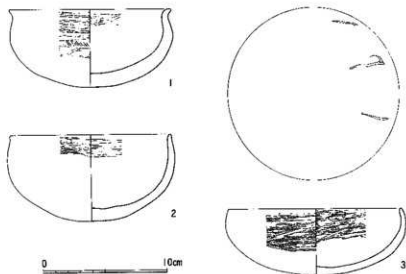
土壇内は側壁の崩落が激しく土壇形成時の様相は残していない。床面は中央部分がやや窪んでいるが、西側が広く、また若干高くつくられていることより頭位方向と思われる。土壇内での赤色顔料の使用は認められない。



第31図 5号墓実測図



第32図 6号墓実測図



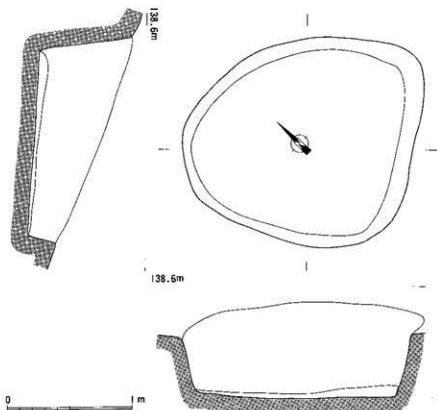
第33図 6号墓出土遺物実測図

6号墓 (第32・33図)

調査区の南側に位置する。標高は140.2m前後であり、主軸を方位角332度にとる一段掘り込みの土壌墓である。土壌の規模は1.99×1.29×0.73mで楕円形をしている。内法は1.68×1.00mである。

土壌内は側壁の崩落が激しく土壌形成時の様相は残していないが、北西側が若干高くつくられていることより頭位方向と思われる。土壌内での赤色顔料の使用は認められない。

土師器片も3点出土した(第33図)。いずれも内外面とも丁寧なヘラ磨きの施された良質の坏である。1は口縁が強く外反し、胴部に若干丸みをもつ。内面底部と外面胴部に丹が残っている。口径13.0cm、器高6.2cm。2は口縁が若干外反し、胴部に丸みをもつ。口径13.0cm、器高6.9cm。3は口縁が内湾し、胴部に若干丸みをもつ。口径13.9cm、器高5.3cm。内面にヘラ記号がみられる。



第34図 7号墓実測図

#### 7号墓 (第34図)

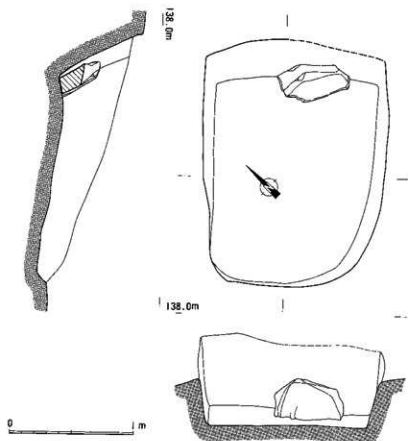
調査区の南側に位置し、標高は138.5m前後である。一段掘り込みの土墳墓で、土墳の規模は1.84×1.65×0.74mで不定形をしており、内法は1.65×1.27mである。

土墳内は側壁の崩落が激しく土墳形成時の様相は残しておらず、底面も平坦につくられていることより頭位方向は不明である。土墳内での赤色顔料の使用は認められない。

#### 8号墓 (第35図)

調査区の南、7号墓の南西で確認された。標高は137.9m前後であり、主軸を方位角47度にとる一段掘り込みの土墳墓である。土墳の規模は1.97×1.46×0.56mで隅丸長方形をしており、内法は1.65×1.27mである。

土墳内は側壁の崩落が激しく土墳形成時の様相は残していないが、北東側が若干高くつくられていることより頭位方向と思われる。頭位側の小口に幅10cmの板石が一枚立てられていた。しかし足位や両側の底面で板石の抜き取り痕や目張り用の粘土が確認されなかったため、板石は頭位側のみを立てられたと思われる。土墳内での赤色顔料の使用は認められない。

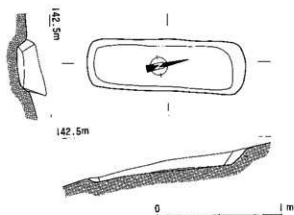


第35図 8号墓実測図

#### 9号墓 (第36図)

調査区の中央やや南、11号墓、12号墓の南西で確認された。標高は142.4mであり、主軸を方位角12度にとる一段掘り込みの土墳墓である。土墳の規模は1.27×0.42×0.12mで隅丸長方形をしており、内法は1.00×0.32mである。土墳の規模から小児用と考える。

床面には枕に使用したと考えられる粘土や礫等の施設は認められないが、北側が広く、かなりの傾斜で高くつくられていることより頭位方向と思われる。土墳内での赤色顔料の使用は認められない。

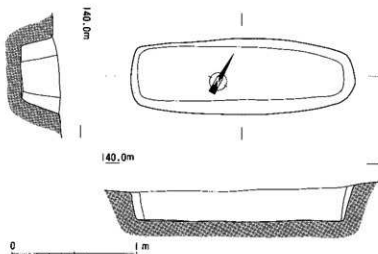


第36図 9号墓実測図

10号墓 (第37図)

調査区の西に位置する。標高は139.8m前後であり、主軸を方位角301度にとる一段掘り込みの土墳墓である。土墳の規模は1.79×0.61×0.31mで隅丸長方形をしており、内法は1.64×0.42mである。

床面には枕に使用したと考えられる粘土や礫等の施設は認められないが、南西側が広く、若干高くつくられていることより頭位方向と思われる。また、土墳内は側壁上面の崩落がみられるが、床面全体に約2cmの厚さで赤色顔料が残存していることから、土墳全面に赤色顔料が塗布されていたと考えられる。



第37図 10号墓実測図

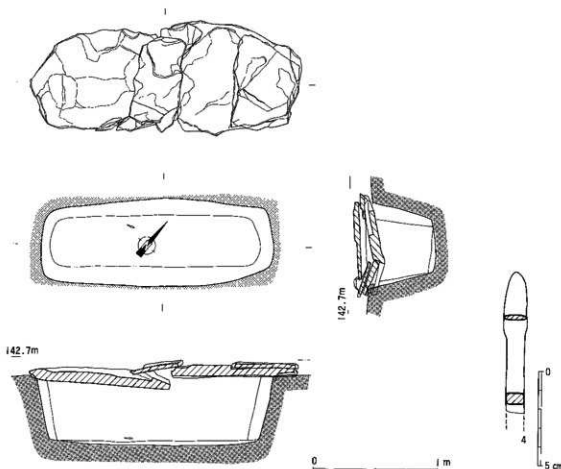
11号墓 (第38図)

調査区のほぼ中央に位置する。標高は142.7m前後であり、主軸を方位角40度にとる石蓋土墳墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土墳の規模は1.87×0.71×0.51mで隅丸長方形をしており、内法は1.69×0.4mである。

土墳の周囲には、床面と石蓋間の隙間を補うよう粘土で厚さ3cm程度の補填を行っている。石蓋は面取りした3枚の凝灰岩割石を使用しているが、側壁の崩落のため中央部が若干落ち込んでいる。石蓋の形態は約1.00×0.85×0.10m平均の大型の蓋石2枚で土墳を覆い、その後中央を小型の蓋石で補っている。裏面には全面に赤色顔料を塗布している。

土壌内は崩落が激しくほとんど原形をとどめていないが、側壁および床面には一部赤色顔料が残存していることから、赤色顔料は土壌全面に塗布されていたことが考えられる。床面はほぼ平坦であり、枕に使用したと考えられる粘土や藁、あるいは礫床等の施設は認められないが、底面の幅は北東側が若干広いことより頭位方向と思われる。

副葬品としては、土壌中央北側壁付近から鉄鏝1点（第6表・第38図）がほぼ床面直上で出土した。その先端は頭位方向を向いている。長頸両丸造鋳前式鏝で基部を欠損している。残存長は7.5cm、身部長は3.5cm、身部幅は1.3cmである。



第38図 11号墓実測図及び出土遺物実測図

#### 12号墓（第39図）

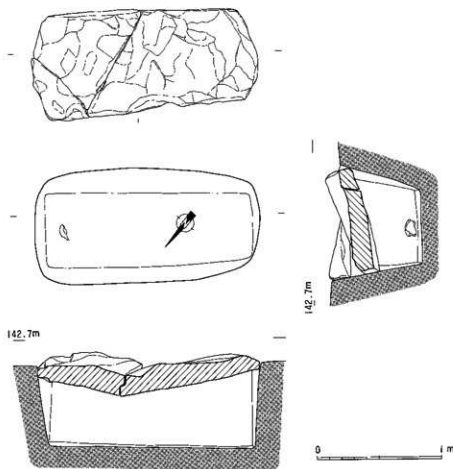
調査区のほぼ中央、11号墓の北東約1mの場所に並行して確認された。標高は142.6mであり、主軸を方位角50度にとる石蓋土墳墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土壌の規模は $1.80 \times 0.92 \times 0.65$ mで隅丸長方形をしており、内法は $1.67 \times 0.59$ mの長方形である。

蓋石は面取りをした凝灰岩の $1.82 \times 0.85 \times 0.20$ mの1枚岩を用いているが、北東側壁の崩落のため全体に土壌内に落ち込み、中央付近で破砕している。蓋石の規模は $1.82 \times 0.85 \times 0.18$ mであり、裏面には全体に赤色顔料を塗布している。

土壌内は側壁上面の崩落が激しく土壌形成時の様相は残していないが、側壁および床面の一部に赤色顔料が残存していることから、土壌全面に赤色顔料が塗布されていたと考えられる。床面は平坦であり、北東側が高くつ



くられていること、さらに北東先端より頭蓋骨が出土したことから頭位は北東方向のものである。床面は枕に使用したと考えられる粘土や礫あるいは襦床等の施設は認められない。



第39図 12号墓実測図

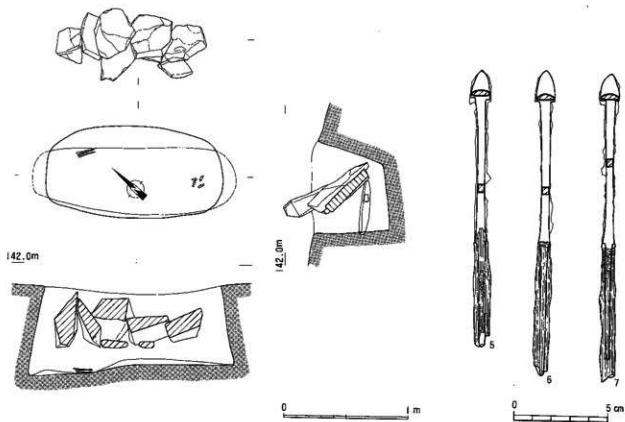
#### 13号墓 (第40図)

調査区の中央やや東側に位置する。標高は141.9m前後であり、主軸を方位角141度にとる石蓋土壌墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土壌の規模は $1.42 \times 0.74 \times 0.72\text{m}$ で隅丸長方形をしており、内法は $1.63 \times 0.53\text{m}$ である。

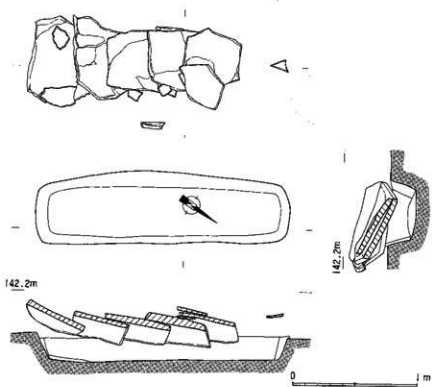
蓋石は $0.50 \times 0.30 \times 0.15\text{m}$ 平均の安山岩の割石を南東側から順にいよめる数重ねに5枚重ね合わせた後土壌中央に1枚の蓋石をしたものと考えられるが、両小口側の石は抜き取られている。石重ねの順番は頭位方向から重ねていったものである。北東側壁の崩落のため全体に土壌内に落ち込んでいる。蓋石の位置からして、本来の土壌の深さは0.8mはあったと思われる。

土壌は南東側が若干広く、床面も高くつくられており、さらに南東側中央部から歯が出土されたことより頭位は南東方向と考えられる。床面には枕に使用したと考えられる粘土や礫あるいは襦床等の施設は認められない。

副葬品としては、土壌北東壁の足位の床面直上から鉄鏃3点(第6表・第40図)が出土した。いずれも先端は足位方向を向いている。長頸両丸造鑿筋式鏃である。5は全長は14.8cm、身部長は1.4cm、身部幅は1.0cmで、6は全長は16.3cm、身部長は1.6cm、身部幅は1.0cmで、7は全長は16.4cm、身部長は1.5cm、身部幅は0.9cmでいずれも基部には柄木質および桜樹皮巻痕が残っている。



第40图 13号墓实测图及び出土遺物实测图



第41图 14号墓实测图

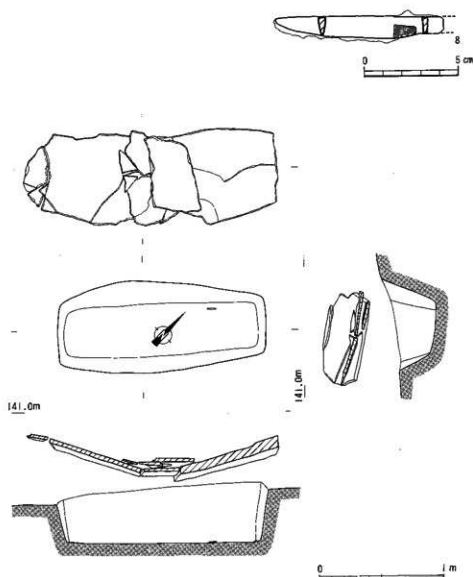
14号墓 (第41図)

調査区の中央やや東側、24号墓の南東2mに位置する。標高は142.1m前後であり、主軸を方位角145度にとる石蓋土壌墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土壌の規模は2.02×0.55×0.21mで隅丸長方形をしており、内法は1.84×0.38mである。

蓋石は安山岩の割石を南側から順に5枚重ね合わせたいわゆる蓋重ねのものと考えられるが、北小口側の石は抜き取られている。石重ねの順番は頭位方向から重ねていったものである。頭位方向の2枚の石は他の石より大きなものが用いられている。また、蓋石は南西側壁の崩落のため全体に土壌内に落ち込んでいるが、現在の位置からして本来の土壌の深さは0.4mはあったと思われる。

土壌は床面がほぼ平坦であるが、南東側が若干広くつくられていることより、頭位方向と思われる。床面には枕に使用したと考えられる粘土や礎あるいは礎床等の施設は認められない。

副葬品としては土壌内から、鉄鏝1点、翡翠製の小玉 (第7表・第56図) が1点出土している。



第42図 15号墓実測図及び出土遺物実測図

### 15号墓 (第42図)

調査区の南西側に位置する。標高は140.8mであり、主軸を方位角226度にとる石蓋土墳墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土壌の規模は1.67×0.74×0.43mで隅丸長方形をしており、内法は1.55×0.42mである。

石蓋は4枚の安山岩割石を使用している。石蓋の形態は約1.00×0.70×0.10m平均の大型の蓋石2枚で土壌を覆い、その後中央を小型の蓋石で補っている。これは11号墓と類似している。蓋石はまず中央部で陥没して、その後北西側壁の崩落のため全体的に北西側に傾斜して落ち込んでいる。現在の位置からして本来の土壌の深さは0.8mはあったと思われる。

土壌は南西側が若干広く、床面も高くつくられていることより頭位は南西方向と考えられる。床面には枕に使用したと考えられる粘土や礫あるいは礫床等の施設は認められないが、北西壁側が少し深めに掘られている。また、床面全体に赤色顔料が残存していることから、土壌全面に赤色顔料が塗布されていたと考えられる。

副葬品としては、土壌北西壁側の足位において刀子1点(第6表・第42図)が床面直上から出土している。

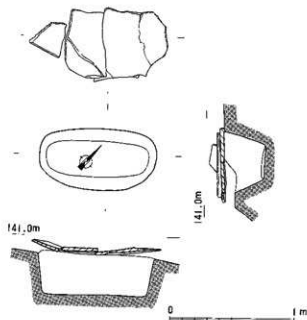
### 16号墓 (第43図)

調査区の南西側に位置する。標高は140.9m前後であり、主軸を方位角227度にとる石蓋土墳墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土壌の規模は0.93×0.49×0.32mで隅丸長方形をしており、内法は0.82×0.28mである。土壌の規模からして小児用と思われる。

蓋石は安山岩の割石を北側から順に2枚重ね合わせたいわゆる鉾重ねのものと考えられる。石重ねの順番は足位方向から重ねていったものである。蓋石は南東壁中央部が陥没したため全体的に落ち込んでいる。現在の位置からして本来の土壌の深さは0.4mはあったと思われる。

土壌は南西側が若干広く、床面も高くつくられていることより頭位は南西方向と考えられる。床面には枕に使用したと考えられる粘土や礫あるいは礫床等の施設は認められない。また、土壌内での赤色顔料の使用も認められない。

副葬品として、土壌内から翡翠製の小玉が1点出土した(第7表・56図-17)。



第43図 16号墓実測図

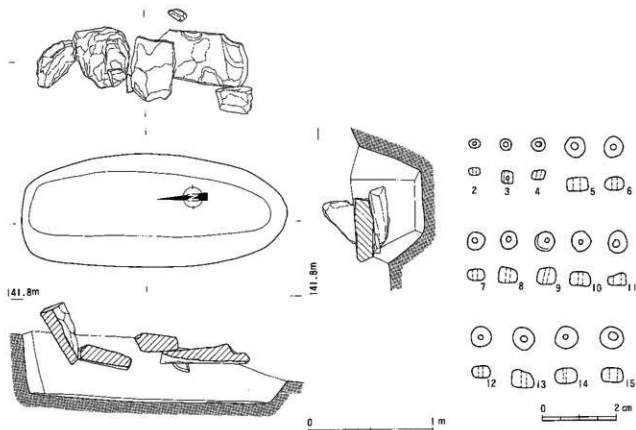
### 17号墓 (第44図)

調査区の中央や南側に位置する。標高は141.7m前後であり、主軸を方位角3度にとる石蓋土墳墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土墳の規模は $2.12 \times 0.90 \times 0.49$ mで隅丸長方形をしており、内法は $1.92 \times 0.52$ mである。

蓋石は、凝灰岩の割石を南側から順に4枚重ね合わせたいわゆる鍔重ねのものと考えられる。石重ねの順番は足位方向から重ねていったものである。蓋石は西壁が崩落したため全体的に落ち込んでいる。現在の蓋石の位置からして本来の土墳の深さは0.65mはあったと思われる。

土墳は北側が若干広く、床面も高くつくられていることより頭位方向と考えられる。床面には枕に使用したと考えられる粘土や礎等の施設は認められない。また、土墳内での赤色顔料の使用も認められない。

副葬品としては、土墳内からガラス製小玉が2点、翡翠製小玉が12点出土している。(第7表・第44図)



第44図 17号墓実測図及び出土遺物実測図

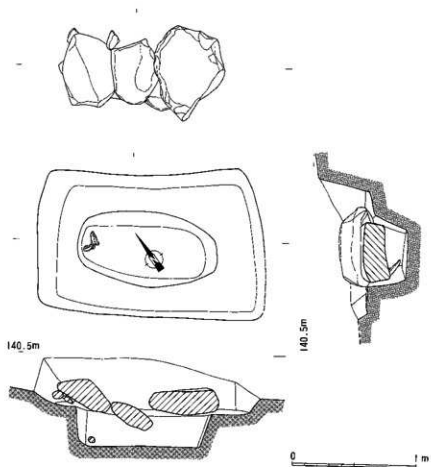
### 18号墓 (第45図)

調査区中央の南側、17号墓のさらに南に位置する。標高は140.5m前後であり、主軸を方位角130度にとる二段掘り込みの石蓋土墳墓である。墓墳の規模は $1.82 \times 1.12 \times 0.40$ m、土墳の規模は $1.12 \times 0.57 \times 0.29$ mで隅丸長方形をしており、内法は $1.00 \times 0.38$ mである。土墳の規模からして小児用と思われる。

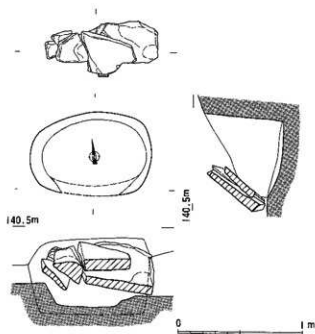
蓋石は、凝灰岩の割石を北西側から順に3枚重ね合わせたいわゆる鍔重ねのものと考えられる。石重ねの順番は足位方向から重ねていったものである。蓋石は中央部が崩落したため土墳内に落ち込んでいる。

土墳は南東側が若干広く、床面も高くつくられていることより頭位方向と考えられる。床面には北西側(足位)に $15$ cm大の凝灰岩が2個検出されたが、床面から浮いていることより蓋石の裏込め石が流れ込んだものと思われる。

る。また、土壌内での赤色顔料の使用は認められない。



第45図 18号墓実測図



第46図 19号墓実測図

#### 19号墓 (第46回)

調査区の中央やや南側、5号墓と6号墓の中間に位置する。標高は140.7m前後であり、主軸を方位角95度(275度)にとる石蓋土墳墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土墳の規模は $0.97 \times 0.66 \times 0.63$ mで隅丸長方形をしており、内法は $0.83 \times 0.52$ mである。土墳の規模からして小児用と思われる。

蓋石は、まず大型と小型の2枚の安山岩で土墳を覆い、その後中央部に1枚の板石を乗せている。蓋石は西側壁が崩落したため中央付近で破砕して土墳内に落ち込んでいる。

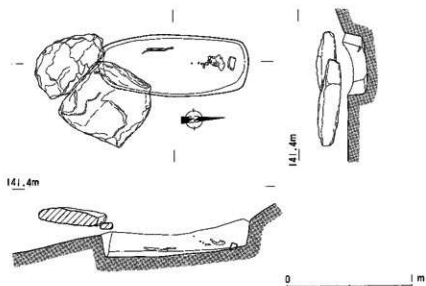
土墳は南側が若干広く、床面も高くつくられているが、土墳壁の崩落が激しいため頭位方向の確定はできない。土墳内での赤色顔料の使用は認められない。

#### 20号墓 (第47回)

調査区の中央やや南東に位置する。標高は140.7mであり、主軸を方位角3度にとる石蓋土墳墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土墳の規模は $1.20 \times 0.50 \times 0.14$ mで隅丸長方形をしており、内法は $1.13 \times 0.45$ mである。土墳の規模からして小児用と思われる。

蓋石は面取りをした凝灰岩が南側で2枚だけ確認された。その北側の石は抜き取られたものと思われる。現在の蓋石の位置からして本来の土墳の深さは0.25mはあったと思われる。

土墳は北側が若干広く、床面も高くつくられていること、北側先端より、15cm大の凝灰岩の石枕および頭蓋骨が出土したことから頭位は北方向と考えられる。土墳内での赤色顔料の使用は認められない。



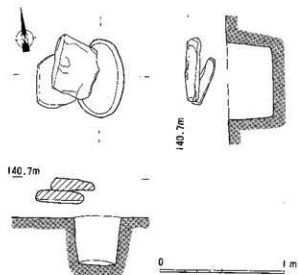
第47回 20号墓実測図

#### 21号墓 (第48回)

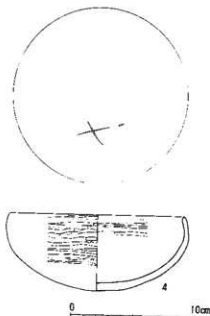
調査区の中央やや南東、6号墓と15号墓の中間で確認された。標高は141.3m前後であり、主軸を方位角9度(189度)にとる石蓋土墳墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土墳の規模は $0.62 \times 0.38 \times 0.35$ mで楕円形をしており、内法は $0.57 \times 0.29$ mである。土墳の規模からして小児用と思われる。

蓋石は面取りをした凝灰岩が2枚重なりあった状態で確認された。側壁の崩落により、全体的に傾斜している。現在の蓋石の位置からして本来の土墳の深さは0.5mはあったと思われる。

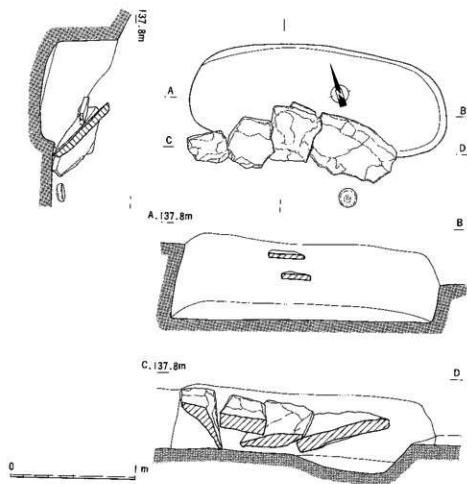
土墳は側壁の崩落が激しく、底面の高さもほぼ均一のため頭位方向は断定できない。土墳内での赤色顔料の使用も認められない。



第48图 21号墓实测图



第49图 22号墓出土遗物实测图



第50图 22号墓实测图



## 22号墓 (第49、50図)

調査区の南側に位置する。標高は137.8m前後であり、主軸を方位角109度にとる石蓋土墳墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土墳の規模は $2.05 \times 0.83 \times 0.59$ mで隅丸長方形をしており、内法は $2.09 \times 0.76$ mである。しかし、土墳は側壁の崩落が激しく、土墳形成時の様相を残していない。蓋石の規模から考えて、本来は $1.50 \times 0.50$ mであろう。

蓋石は面取りをした幅0.4mの安山岩を東側から順に4枚重ね合わせたいわゆる鉋重ねのものである。石は頭位から順に重ねたと思われる。現在、蓋石は南側壁の崩落により、全体的に傾斜して、土墳内に落ち込んでいる。

土墳は側壁の崩落が激しいため土墳幅からは判断できないが、底面は東側が高くつくられていることより、頭位方向と思われる。土墳内での赤色顔料の使用も認められない。

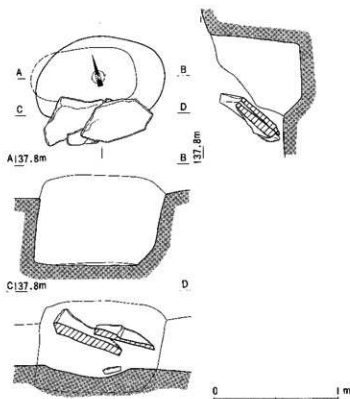
遺物としては土師器環が1点出土した(第49図)。口縁が内湾し、胴部に若干丸みをもつ。口径13.9cm、器高6.1cm。外面全体と内面口縁部に丁寧なヘラ磨きが施されている。また内面にはヘラ記号がみられる。

## 23号墓 (第51図)

調査区の南側、22号墓の西で確認された。標高は137.7mであり、主軸を方位角100度にとる石蓋土墳墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土墳の規模は $1.02 \times 0.67 \times 0.72$ mで不定形をしており、内法は $0.84 \times 0.44$ mである。土墳の規模からして小児用と思われる。

蓋石は $0.50 \times 0.40 \times 0.10$ m平均の安山岩を西側から順に2枚重ね合わせたいわゆる鉋重ねのものである。石は足位から順に重ねたと思われる。足位の1石は抜き取られている。現在、蓋石は南側壁の崩落により、全体的に傾斜して、土墳内に落ち込んでいる。

土墳は側壁の崩落が激しく、土墳形成時の様相を残していないが、東側が若干広く、底面が高くつくられていることより、頭位方向と思われる。土墳内での赤色顔料の使用は認められない。



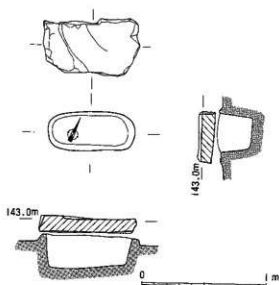
第51図 23号墓実測図

24号墓 (第52図)

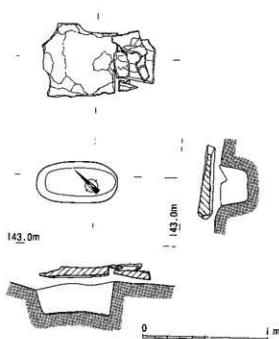
調査区の中央部やや北側で確認された。標高は143.0m前後であり、主軸を方位角67度にとる石蓋土墳墓である。本来は二段張り込みであったと思われる。土墳の規模は0.69×0.32×0.26mで隅丸長方形をしており、内法は0.61×0.23mである。土墳の規模からして小児用と思われる。

蓋石は面取りをした0.77×0.45×0.13mの凝灰岩が1枚確認された。現在の蓋石の位置からして、本来の土墳の深さは0.3mはあったと思われる。

土墳は北東側が若干広く、底面が高くつくられていることより、頭位方向と思われる。土墳内での赤色顔料の使用は認められない。



第52図 24号墓実測図



第53図 25号墓実測図

### 25号墓（第53図）

調査区の中央部やや北側、11号墓と24号墓の中間で確認された。標高は142.8mであり、主軸を方位角317度にとる石蓋土壌墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土壌の規模は0.63×0.33×0.26mで隅丸長方形をしており、内法は0.54×0.22mである。土壌の規模からして小児用と思われる。

面取りをした大型の凝灰岩と小型の安山岩の蓋石2枚でまず土壌を覆い、その後中央部に小型の安山岩の板石1枚を乗せている。現在の蓋石の位置からして、本来の土壌の深さは0.3mはあったと思われる。

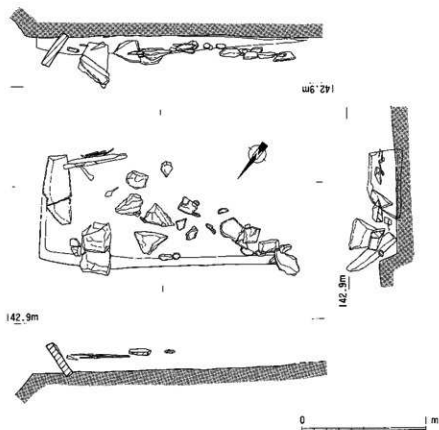
土壌は北西側が若干広く、底面が高くつくられていることより、頭位方向と思われる。土壌内での赤色顔料の使用は認められない。

### 26号墓（第54・55図）

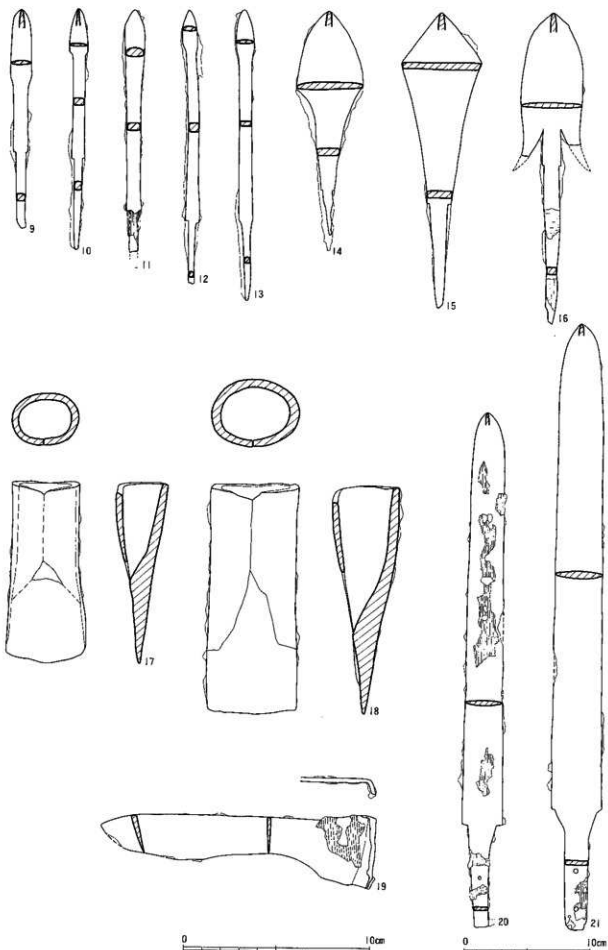
調査区のほぼ中央11・12号墓の北東に並行して確認された。標高は142.8m前後であり、主軸を方位角49度にとる石棺である。しかし、後世の削平により小口および側石の一部分が残存するのみであり、本来の形態を残していない。現在、土壌内には凝灰岩を用いた側石の破片が散在している。残存部分の土壌最大値は1.9×0.95m、深さは北側壁付近で0.15mである。

土壌内では枕に使用したと考えられる粘土や礫あるいは礫床等の施設、また赤色顔料の使用は確認されなかった。床面は平坦であり、標高は142.5mである。棺の形態からみて頭位は北東方向のものと思われる。

副葬品は北東小口壁寄りの東側壁ぎわから鉄剣2点、鉄鏃6点、鉄斧1点および鉄鎌1点が、同じく北東小口壁から0.3m中央寄りに鉄鎌1点が、さらに東小口壁より0.1mの北側壁ぎわから鉄鎌1点および鉄斧1点がそれぞれ床面から0.1m浮いた状態で検出された（第6表・第55図）。



第54図 26号墓実測図



第55图 26号墓出土文物实测图

この石棺は、多数の副葬品を持ち、丘陵の中央部分に単独で存在することより古墳の可能性も考えられたため、周閉に周溝の存在を想定し確認作業を行ったが、削平により消滅したのか検出は無理であった。

出土遺物からみて、この石棺の時期は5世紀末のものであると考えられる。

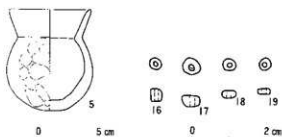
#### 出土遺物 (第55図)

9～13は長頸無篋被両丸造整前式鎌で、11は基部に桜樹皮巻痕が残る。14は短頸無篋被両丸造柳葉式鎌である。15は短頸無篋被柳葉式鎌である。16は短頸無篋被腰扶両丸造柳葉式鎌で、逆刺は欠損しているが、外へ開き篋被は無い。基部には桜樹皮巻痕が残る。17・18は鍛造鉄斧で袋部のつくりはよく、折り返し部は密着している。19は鉄鎌で、基部付近には柄木質が残る。20・21は鉄剣で、20の関節部は一方が直角をなし、他方は鈍角をなしている。基部は身部の中心線より片側へ寄り、その中央に目釘穴1孔がみられる。21の基部中央にも目釘穴2孔がみられ、木質が残存している。

#### 大迫遺跡出土遺物

16は14号墓出土の翡翠製の小玉、17は16号墓出土の翡翠製の小玉、18、19はいずれも表採の小玉で、18はガラス製、19は碧玉製。

5は表採の小型壺。口縁部は直に外反し、最大径は胴部にある。器壁外面は指頭瓦痕で仕上げている。



第56図 大迫遺跡出土遺物実測図

号墓	番号	器種	全長	頭部長	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
2号墓	1	鉄鎌	12.9	8.3	1.2		0.5	0.4	木質残存
＃	2	＃	13.2	8.2	1.3		0.4	0.4	＃
3号墓	3	麻手刀子	11.3以上	5.2	2.4以上	1.0	0.3	0.35	
11号墓	4	鉄鎌	7.5以上	3.5	1.3	1.1	0.3	0.6	
13号墓	5	＃	14.7	1.8	1.0	0.4	0.4	0.45	木質・桜樹皮巻残存
＃	6	＃	16.3	1.6	1.0	0.4	0.4	0.4	＃
＃	7	＃	16.4	1.5	0.9	0.4	0.4	0.4	＃
15号墓	8	刀子	9.1	6.4	1.1	0.95	0.4	0.3	
26号墓	9	鉄鎌	11.6	4.0	1.1		0.3		
＃	10	＃	12.8	2.5	1.0	0.6	0.2	0.4	
＃	11	＃	12.7		1.2	0.6	0.2	0.3	桜樹皮巻残存
＃	12	＃	14.3	2.7	1.1	0.7	0.2	0.3	
＃	13	＃	15.5	2.8	1.1	0.7	0.2	0.3	
＃	14	＃	12.8	8.0	3.6	1.1	0.3	0.4	
＃	15	＃	15.7	9.5	4.3	1.3	0.4	0.4	
＃	16	＃	16.5	8.4	3.3	0.6	0.2	0.4	桜樹皮巻残存
＃	17	鉄斧	9.5		4.0				袋部内径3.6×2.8
＃	18	＃	12.0		4.7				袋部内径2.8×2.1
＃	19	鉄鎌	14.7		2.4				柄木質残存
＃	20	鉄剣	40.8	32.7	3.0	1.2	0.4	0.3	
＃	21	＃	48.2	38.5	4.0	1.9	0.6	0.4	

第6表 大迫遺跡出土鉄器計測表

(単位: cm)

号墓	番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
3号墓	1	管玉	碧玉	暗緑	21.8	4.0	1.8	0.6	
14号墓	16	小玉	翡翠	ターコイズブルー	3.0	3.4	0.8	0.05	透明
16号墓	17	〃	翡翠	黄緑	4.8	3.0	0.1	0.05	〃
17号墓	2	〃	ガラス	マリンプルー	3.0	2.0	1.0	0.05	〃
〃	3	〃	翡翠	〃	3.2	3.0	1.2	0.1	〃
〃	4	〃	ガラス	〃	3.8	2.5	1.5	0.1	〃
〃	5	〃	翡翠	ターコイズブルー	5.8	3.5	2.0	0.15	
〃	6	〃	〃	緑青	5.2	3.7	1.6	0.15	
〃	7	〃	〃	〃	4.5	3.0	1.2	0.1	
〃	8	〃	〃	〃	4.8	4.2~3.0	1.2	0.15	
〃	9	〃	〃	〃	4.8	4.3	1.0	0.2	
〃	10	〃	〃	〃	5.8	4.0	1.0	0.15	
〃	11	〃	〃	〃	4.8	3.2~2.2	1.8	0.2	
〃	12	〃	〃	〃	5.1	3.0	1.2	0.1	
〃	13	〃	〃	〃	5.8	5.0~3.5	1.5	0.2	
〃	14	〃	〃	〃	6.0	4.0	1.1	0.2	
〃	15	〃	〃	〃	6.0	3.8	2.7	0.2	
一括	18	〃	ガラス	コバルトブルー	4.0	2.0	1.2	0.05	透明
〃	19	〃	碧玉	灰色	3.3	1.2	1.2		計測不能

第7表 大迫遺跡出土玉類計測表

(単位: mm, g)

No	分類	主軸	石材	墓壇の内法			土壇の内法			副葬品の有無	備考
				長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ		
1	土壇墓	112°(292°)				182	51	38	土師器坏		
2	土壇墓	110°		159	68	7	111	35	45	土師器、鉄鏃	
3	土壇墓	110°(290°)				228	68	68		土師器、須恵器、鉄鏃、管玉	
4	土壇墓	268°				197	45	26			
5	土壇墓	85°				168	100	73			
6	土壇墓	332°				217	87	12		土師器坏	
7	土壇墓					165	145	74			
8	土壇墓	47°				165	127	56			
9	土壇墓	12°				110	32	12			
10	土壇墓	301°				164	42	31			
11	石蓋土壇墓	40°	凝灰			169	40	51		鉄鏃	
12	石蓋土壇墓	50°	凝灰			167	59	65			頭骨
13	石蓋土壇墓	141°	安・凝			163	53	72		鉄鏃	
14	石蓋土壇墓	145°	安山			184	38	21		鉄鏃、小玉	
15	石蓋土壇墓	226°	安山			155	42	43			
16	石蓋土壇墓	227°	安山			82	28	32			
17	石蓋土壇墓	3°	凝灰			192	52	49		小玉	
18	石蓋土壇墓	130°	凝灰	182	112	40	100	38	29		
19	石蓋土壇墓	95°(275°)	安山			83	52	63			
20	石蓋土壇墓	3°	凝灰			113	45	14			人骨
21	石蓋土壇墓	9°(189°)	凝灰			57	29	35			
22	石蓋土壇墓	109°	安山			209	76	59		土師器坏	
23	石蓋土壇墓	100°	安山			84	44	72			
24	石蓋土壇墓	67°	凝灰			61	23	26			
25	石蓋土壇墓	317°	安・凝			54	22	26			
26	石棺墓	49°	凝灰			190	95	15		鉄剣、鉄鏃、鉄斧、鉄鏃、小玉	

第8表 大迫遺跡土壇計測表

(単位: cm)

## 小 結

大迫遺跡は比高差40mの低丘陵上にあり、峰続きの北側平坦部には中尾1・2号墳が存在することから、同古墳群の一部と考えられる。眼下には有田川やその支流である求々里川といった中小河川が流れており、その沖積地には求々里平島遺跡のような5世紀後半の小集落も存在する。

今回の調査は、土壌が阿蘇溶結凝灰岩を掘り込んで作られていること、また調査区の大部分が斜面であることから崩落が激しく原形を留めていない土壌が多く、頭位方向（主軸）を確定することは難しかった。その頭位方向による規則性はみられず、これによる分類はできない。また、6号墓、22号墓出土の土師器環は5世紀後葉と考えられるが、土器を伴う土壌が少ないため全体としての時期比定が難しい。鉄器による編年研究も進んでいるが、本遺跡は時期幅があまり無く、明確な時期比定は難しい。そこで、石蓋土壌墓の石材によるグルーピングを試みた(第57図)。すると石蓋に安山岩を用いた土壌墓は調査区の東側、丘陵の先端から斜面にかけて見られ、凝灰岩を用いたものはそれより西側の調査区中央部に多く見られた。当地域の草場第2遺跡、小迫古墳群<sup>1)</sup>では安山岩製の石蓋土壌墓は凝灰岩製のそれより古いとされていることから、本遺跡はまず5世紀後葉に丘陵の先端部に墓がつくられ、その後5世紀末には丘陵全体に広まったと思われる。

3号墓の兼手刀子は、出土例としては大分市野間10号墳にみられるだけで県下では2例目である。

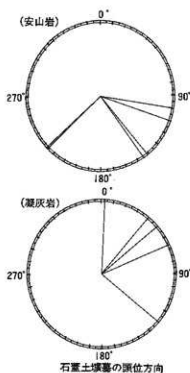
今回の調査は道路幅という限られた範囲での調査であったため、中尾古墳を含めた丘陵上の墓域、さらには下の沖積地にある集落などを全体の広がりとしてつかむことができなかった。今後、有田川や求々里川の河川改修が進められていくようだが、このあたりをその際の調査に期待する。

註1 小迫古墳群については小柳和宏氏の教示をえた。

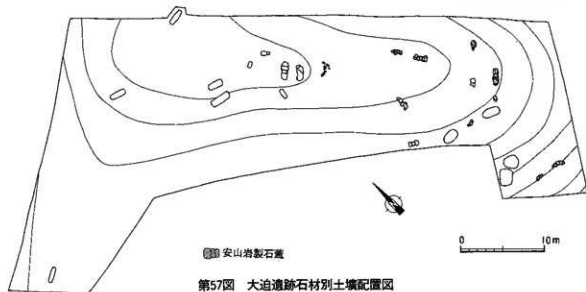
## 参考文献

【草場第2遺跡】大分県教育委員会 1989

【野間古墳群緊急発掘調査】大分県教育委員会 1967



石蓋土壌墓の頭位方向



第57図 大迫遺跡石材別土壌配置図

### III 玖珠地区の遺跡

#### 1. 遺跡の立地と環境

大分県の西部に位置する玖珠町は、東は大分郡湯布院町、南は玖珠郡九重町、熊本県阿蘇郡小国町、西は日田市・日田郡天瀬町、北は宇佐郡安心院町、院内町、下毛郡耶馬溪町、山国町と接している。周辺には、第4紀の万年山溶岩や耶馬溪溶結岩により形成された万年山をはじめ、大岩扇山、小岩扇山、青野山、伐株山、角塚山等の卓状台地（メサ）が創りだされ、山々に囲まれた地形は東西に細長い三日月状の玖珠盆地を生み出している。盆地内を西流する玖珠川は、九重連山に源を発し、日田市で大山川と合流し三隈川と呼ばれ、福岡県に至り筑後川となって有明海に注いでいる。玖珠盆地は玖珠川を中心に開けており、川沿いは河岸段丘、沖積地を形成し、南側は伐株山の山麓を侵食し形成された扇状地、北側には玖珠川に流れこむ小河川により作り出された南北に細長い谷筋が展開している。玖珠地域は、日田地域とともに筑後川上流域に位置しており、北部九州と東九州を結ぶ文化・交通の要衝の地として重要な位置を占めている。当地域は前述したように台地や河岸段丘が発達しており、旧石器時代から近世に至る遺跡が数多く存在している。扇状地には集落跡、台地上には旧石器時代の遺物、古墳、石棺等の墳墓、中近世の城館跡が確認されている。

玖珠川の南東岸に位置するおごもり遺跡では、弥生時代終末期の集落跡が確認され、土坑内から中国後漢の鏡片が出土している。さらに当遺跡では5世紀前半の方形周溝墓も確認され、主体部の4基の箱式石棺から多数の副葬品が出土しており、当地域の支配者層の墳墓であると考えられる。その北側には盆地内で唯一の前方後円墳である龜部起古墳が存在している。この周辺には石棺群、横穴墓群、円墳を持つ船岡山遺跡など支配者層の墳墓群が集中している。玖珠川の南岸である伐株山の裾野の微高地には將軍塚古墳、陣ヶ台彦塚古墳、姫塚古墳、扇状地上には石棺群が確認されている小笠遺跡、寺山古墳、山王古墳が存在している。

玖珠川南岸の扇状地では昭和60～61年度にかけて小田遺跡群の調査が行われていた。ここでは縄文時代から中世に至る遺跡が確認され、なかでも弥生時代後期末から奈良時代までの集落変遷が明らかにされた。西田遺跡では7世紀後半から8世紀初めの土坑から円形硯が出土しており、太宰府跡出土土簡にみる「久須須」との関係語る貴重な資料といえる。小田遺跡群の一角には横穴式石室を持つ鬼塚古墳が存在しているが、石室内には彩色の壁画を有しており、日田、筑後川沿いの古墳との関係が指摘されている。

玖珠川北岸には石室内に鳥や木の葉を線刻している鬼ヶ城古墳、竪穴式石室と小児用石棺が併存する瀬戸古墳、四日市上ノ原横穴墓群や玄室内に装飾を施した黒塚横穴墓群が存在する。台地上には後漢鏡を出土した名草台遺跡、十ノ釣遺跡、十ノ釣古墳が知られている。

中世の遺跡をみると盆地のほぼ中央部に玖珠城（伐株山城）跡がある。元来は高勝寺という寺院であったが、文献資料から、南北朝時代に戦乱が本格化するにつれ寺院としての性格を持ちつつ山城へと様相を変えていったと考えられる。玖珠城は天正14年（1586年）、薩摩島津軍の豊後侵攻により落城し、城としての幕を閉じている。他にも台地や丘陵上に魚返城、野田城、古後城、帆足城、岩室砦、松木城、恵良城、向城、岐部城、釘野城、野上城、野上山城といった山城、さらに織豊系城郭である角半礼城が知られている。

今回、報告する2遺跡は、玖珠盆地の北西部、玖珠川北岸の山頂部と谷部平坦地に位置する。山頂部に位置する遺跡は白岩遺跡である。この遺跡は標高390mに位置する弥生時代後期の高地性集落である。遺跡内には焼土ピットが確認されていることから、築煙をあげる施設とみられている。谷部に位置する遺跡は下綾垣遺跡である。標高345mに位置する6世紀後半を中心とする集落跡である。集落は単発的に営まれており、同事業で確認された原田遺跡、谷ノ瀬遺跡と同様の展開を示している。

#### 参考文献

「名草台千人塚石棺群調査報告」 大分県教育委員会 1953

「おごもり遺跡調査概報」 玖珠町教育委員会 1977

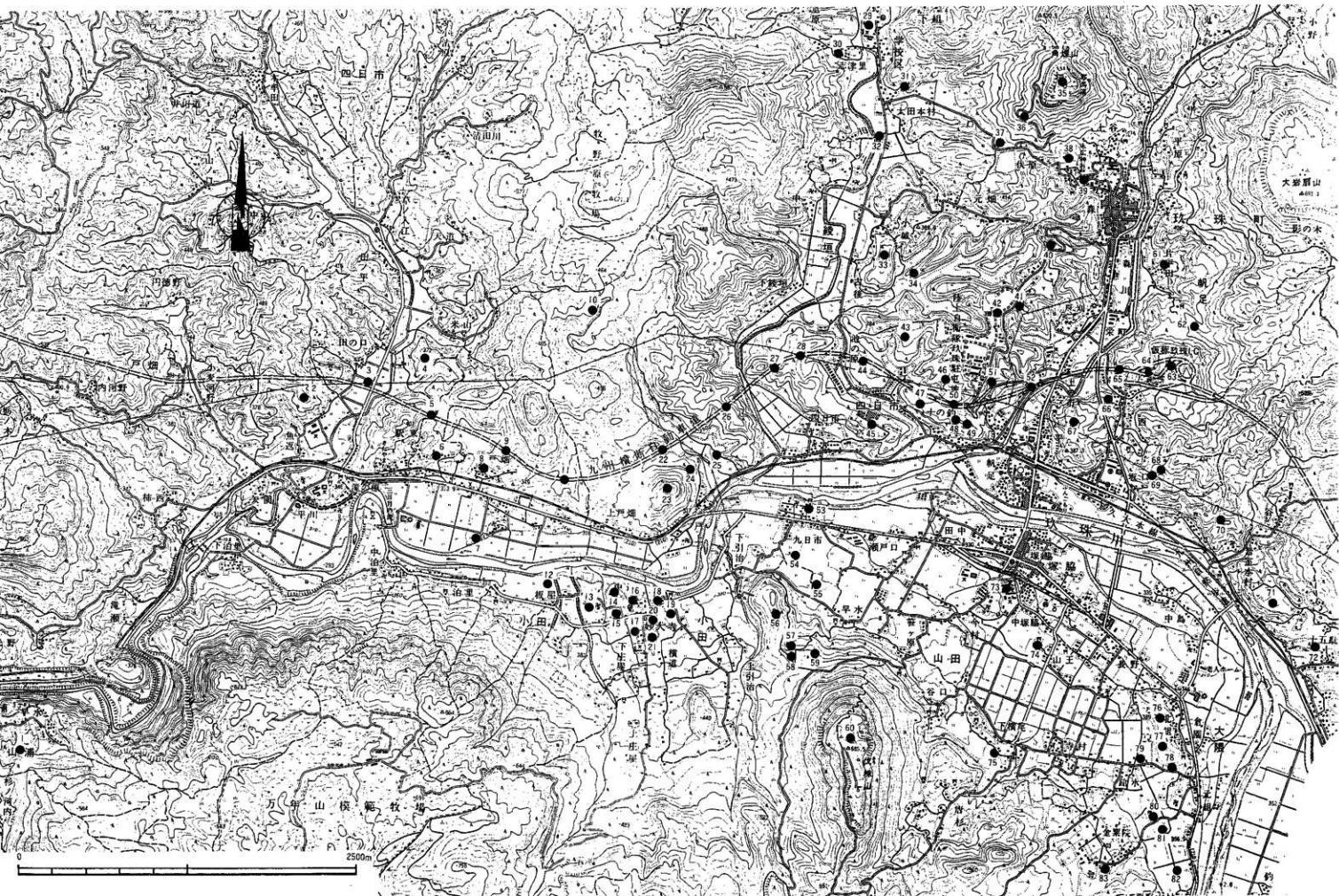
「小田遺跡群」 玖珠町教育委員会 1983

「宮園遺跡 原田遺跡 岩塚遺跡 玖珠S A遺跡群 谷ノ瀬遺跡」 大分県教育委員会 1995



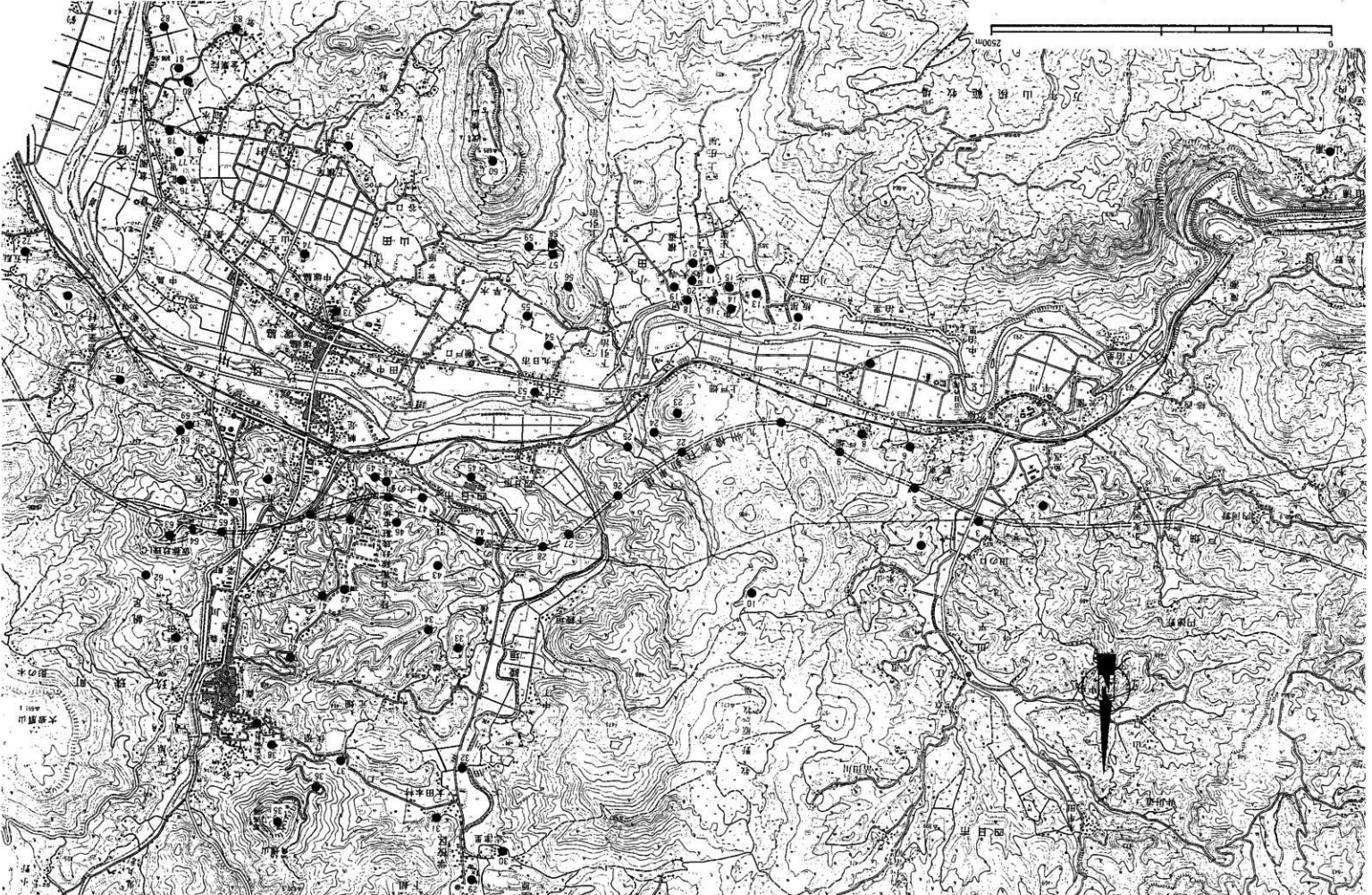
番号	遺 跡 名
1	杉河内遺跡
2	魚返砦跡
3	魚返遺跡
4	米山遺跡
5	原田遺跡
6	駅東横穴群
7	榎城山古墳
8	戸畑遺跡
9	岩塚古墳
10	白石北遺跡
11	玖珠 S A 地区遺跡群
12	板屋遺跡
13	西田遺跡
14	冷酒庵 A 遺跡
15	冷酒庵 B 遺跡
16	冷酒庵 C 遺跡
17	中西遺跡
18	妙大寺 A 遺跡
19	妙大寺 B 遺跡
20	鬼塚古墳
21	鬼塚周辺石棺群
22	谷ノ瀬遺跡
23	野田城跡
24	野田遺跡
25	野田古墳
26	白岩遺跡
27	下綾垣横穴群
28	下綾垣遺跡
29	八幡中学校遺跡
30	志津里横穴墓
31	太田本村遺跡
32	太田遺跡
33	古後城跡
34	中原古墳
35	角牟礼城跡
36	太田巨石遺跡
37	太田中学校遺跡
38	伏原立石
39	本村遺跡
40	上ノ原遺跡
41	千人塚古墳
42	名草台遺跡

番号	遺 跡 名
43	池ノ原遺跡
44	池ノ原 B 遺跡
45	四日市遺跡
46	井ノ尻古墳
47	井ノ尻遺跡
48	十ノ釣古墳
49	十ノ釣遺跡
50	上ノ原横穴群
51	鷹巣横穴群
52	治別当遺跡
53	中山田遺跡
54	小竿遺跡
55	早水野中遺跡
56	將軍塚古墳
57	陣ヶ台姫塚古墳
58	陣ヶ台遺跡
59	陣ヶ台彦塚古墳
60	伐株山城跡
61	平原横穴墓
62	鬼ヶ城古墳
63	帆足城跡
64	瀬戸遺跡
65	瀬戸古墳
66	西遺跡
67	平台遺跡
68	般若寺 1 号墳
69	般若寺 2 号墳
70	岩屋砦跡
71	旦ノ原遺跡
72	五行塚古墳
73	寺山 (古墳) 遺跡
74	山王古墳
75	下横尾遺跡
76	船岡山古墳
77	船岡山石棺群
78	船岡山横穴群
79	鎗水遺跡
80	龜都起古墳
81	祇園遺跡
82	おごもり遺跡
83	金粟院遺跡
84	



第58図 玖珠町主要遺跡分布図

第58图 珠球町主要道路分布图



# 白 岩 遺 跡

## 2. 各遺跡の調査

### 1) 白岩遺跡

#### 遺跡の立地

遺跡は玖珠郡玖珠町大字四日市宇白岩に所在する。遺跡は玖珠町西部の玖珠川左岸、標高390mの山頂にあり、調査面積は3,000㎡である。遺跡の立地する山頂は牧野原岳より南にのびる山岳の先端部で眼下に盆地を望む。

盆地との比高差は約90mを測る。本遺跡の立地する山裾部には縄文早期～前期の遺跡がある。

#### 遺跡の概要

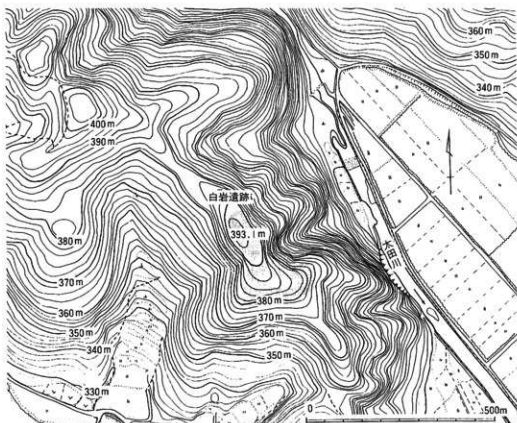
調査は山頂平坦部を中心にを行った。その結果、山頂尾根裾部では全長約56m、深さ1～2m、幅1.5～3mの断面逆台形の環濠を検出した。環濠東端は崖部分に落ち、南側は発掘区域外の南方に延びている。濠の北側溝底より柱穴が確認された。

環濠埋土にはブロック状に焼土層や炭層が混入している。さらに最下層、中層、最上層の三層は黒褐色の風化土層であることから、この環濠は徐々に埋まったものと考えられる。また、埋土の状況から外側に土塁があったと推定される。

環濠内の尾根頂部は平坦に地山整形され、上面は長径20m、短径12mの範囲を平坦にカットしている。また、斜面部との境にも浅い溝を巡らす。この溝は北側で切られており、その斜面の下方で柱穴を検出したところから、この部分が入り口の施設と考えられる。頂部平坦面西側斜面ぎわに長さ2.5m、最大幅1.0m、深さ0.4mの楕円形土坑(1号土坑)を検出した。

出土遺物は環濠内よりほぼ完形の壺形土器1点、底部片2点、磨製石鏃1点、拳大の河原石を再利用した石投弾200点以上が、1号土坑より壺口縁部と磨製石鏃の原石がそれぞれ出土した。

時期は弥生時代後期後半のもので遺跡の性格としては都出比呂志氏の弥生時代高地性集落カテゴリーAタイプに属し、九州島内における環濠をもつ高地性集落としては福岡県杷木町西ノ迫遺跡について2例目のものである。

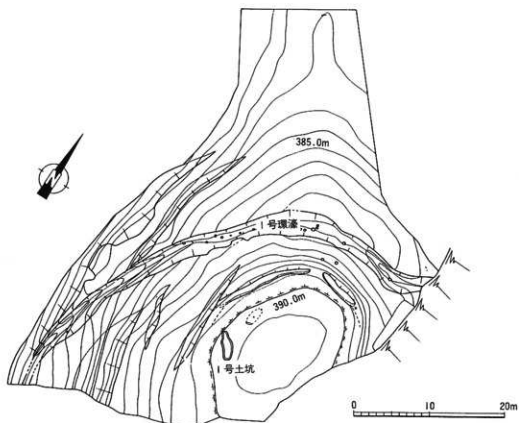


第59図 白岩遺跡周辺地形図

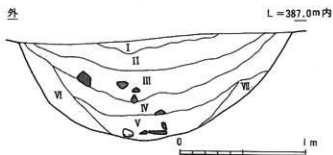
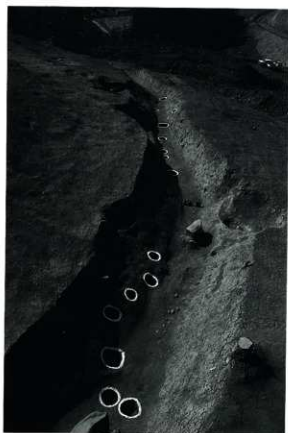


第60図 白岩遺跡復元図





第61図 白岩遺跡遺構配置図



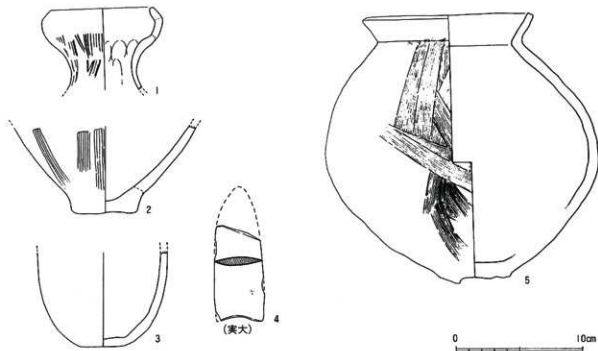
- I層……黒褐色粘質土、ハード、皮、木根を多く含む。風化が著しい。
- II層……暗茶褐色粘質土、極くハード、風化がやや進む。乾燥するとクラックになる。
- III層……黒色粘質土、粘質性強くハード、風化が著しい。河川礫や土器を包含する。
- IV層……暗褐色粘質土、ハード、風化が進んでいる。炭・焼土を包含する。丘陵部側より堆積する。
- V層……III層と同じ。
- VI層……暗黄褐色粘質土、極くハード、風化が若干認められる。平地からの流入土（土器埋土）
- VII層……黄褐色粘質土、ハード、風化はほとんど認められない。丘陵部側より堆積する。

第62図 白岩遺跡1号環濠土層図

### 出土遺物 (第63図 1～5)

1は1号土坑出土の袋状口縁部である。復元口径8.0cmを測る。形態の特徴は口縁下端に稜を持つ袋状口縁をなす。頸部は短く胴部へと続く。調整は口縁部内外面ヨコナデ頸部外面は粗いハケ目後縦方向の研磨が、内面は指ナデが認められる。2は環濠南西部最下層中より出土した壺底部片である。底部径5.2cmを測る。形態の特徴は底部がわずかな上げ底状の平底を呈している。調整は外面が粗いハケ、内面はナデである。3は環濠北東部土器溜りより出土した壺底部～胴部片である。形態の特徴は底部がややレンズ状を呈している。調整は内外面とも剝離が激しく不明である。4は結晶片岩系の磨製石鏃である。鏃は破損しており、残存長2.5cm、幅1.3cmを測る。基部はゆるやかに抉り込まれている。5は環濠北東部土器溜りより出土した壺である。底部の一部を欠損するがほぼ完形の土器である。口径13.5cm、残存器高22.5cmを測る。形態の特徴は口縁部が「く」字状に屈曲し、端部は方形を呈す。胴部は丸く最大径は中央になる。底部は一部分が欠損するが、やや丸みを帯びた平底を呈すと考えられる。調整は口縁部内外面が丁寧なヨコナデ、胴部上半外面は細かな縦ハケ目、中央～下半にかけては細かな斜め方向のハケ目、下半はナデを施している。

遺跡の性格によるものであろうが、土器類の出土が少ない特徴が有る。時期については、北部九州の編年を参考にすると福岡市比恵遺跡群第17次調査地点SE-02の一括遺物に類似するところから、弥生時代後期前半から中頃と考えられよう。

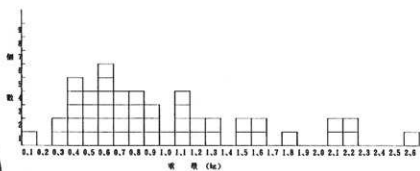
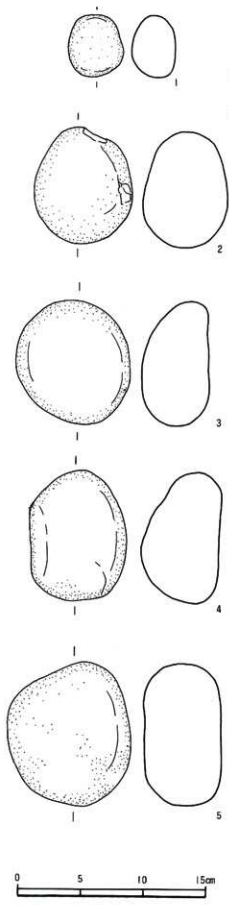


第63図 白岩遺跡出土遺物実測図 (1は1号土坑出土、2～5は1号環濠出土)

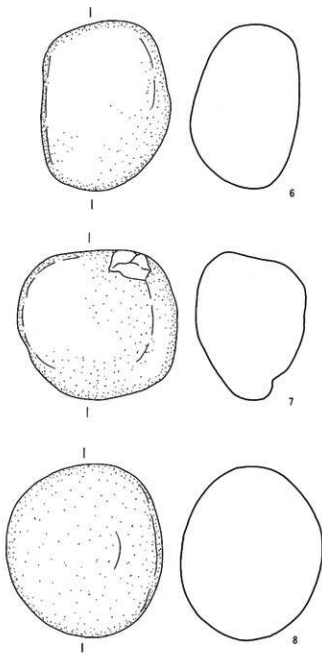
### 投弾 (第64図)

投弾と考えられる河原石約200個はすべて環濠中から出土したものである。そのすべてがローリングを受けた円礫であり、明らかに意図的に当遺跡に搬入されたものである。平成4年度に実施された範囲確認調査では遺跡の全容を知る由もないが、投弾と考えられる河原石が北側の環濠に集中する傾向が認められ、この要因の一つとして北側が当遺跡唯一尾根続きであることに関連するものと思われる。

投弾は第64図のように大小様々な円礫をそのまま利用したもので、大部分は安山岩である。第9表は出土礫約200点の内の48点のみの重量分布を表したものであるが、これによると1kg以下の拳大の円礫が主体を占めるようである。最大重量の円礫は8の2.6kgである。最小は1の0.1kgである。



第9表 白岩遺跡投弾計測表 (対象48個)



第64図 白岩遺跡投弾実測図

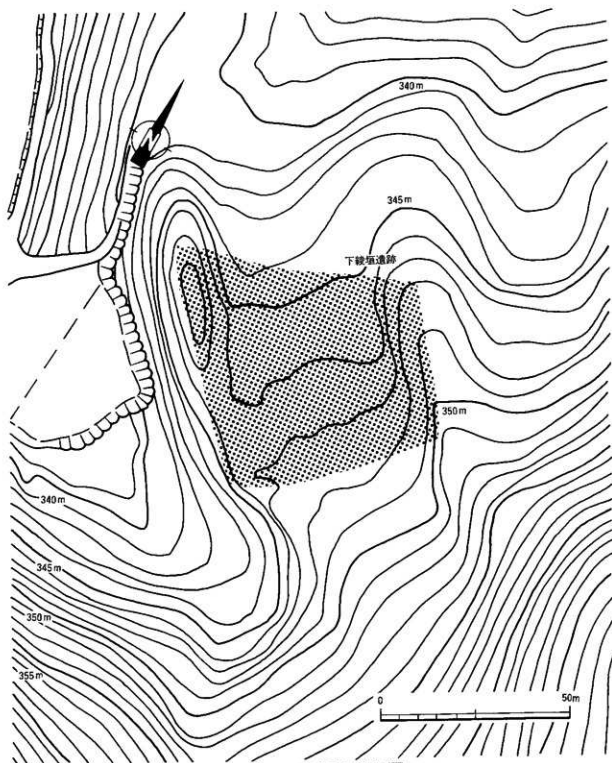


下 綾 垣 遺 跡

## 2) 下綾垣遺跡

### 遺跡の立地

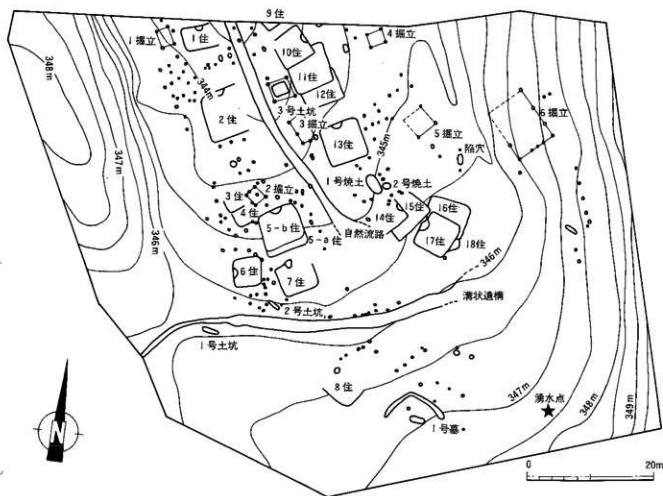
調査区は玖珠盆地の北西部、太田川東岸の尾根と尾根に挟まれた谷部緩斜面上に位置しており、標高は343.5m～347.5m程である。谷部は植林等を受けておらず良好な状態で保存されていた。遺跡の西隣は太田川を挟み急峻な白岩遺跡が所在するほか、北は太田川の氾濫域、東と南は尾根筋とそれにつづく台地と地勢的には隔離された状態にある。



第65図 下綾垣遺跡周辺地形図

## 調査の概要

調査面積は約4,000㎡である。区内の土砂堆積状況は表土層(厚さ30cm)－黒褐色土層(厚さ30cm)－黒色土層(厚さ30cm)－褐色粘質土層(遺構検出面である)の順である。確認された遺構は竪穴住居跡18軒(内11軒でカマドを検出)、掘立柱建物跡6軒、土坑3基、溝状遺構1条、陥穴1基、奈良時代の墳墓1基である。遺物は竪穴住居跡から坏、壺、壺、甕等を、奈良の墳墓主体部からは埴、坏が出土している。遺跡は調査区西側に続く谷部緩斜面上にさらに展開していくものと推定される。



第66図 下綾垣遺跡遺構配置図

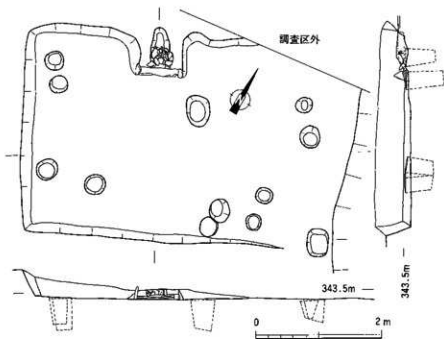
## 調査の成果

### 1号竪穴住居跡

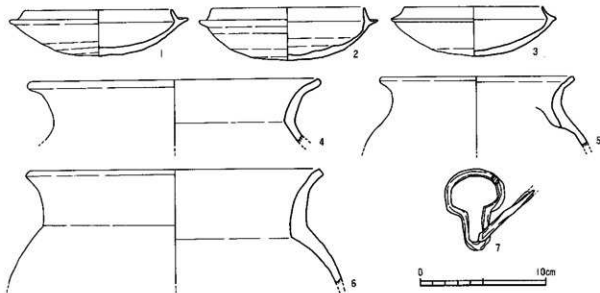
遺構は調査区北西隅に位置するが自然流路の侵食により東壁を消失していた。平面プランは長方形で、確認できる規模は3.42m×4.13m、最大深0.4mである。支柱穴は判然としない。北壁中央部には作り付けのカマド跡を確認した。カマドは残存状態がよく袖部、燃焼部、支脚、煙道部、袖石、天井石、カマド使用時の壘などを残していた。

### 出土遺物

1～3は須恵器坏身で、色調は内外断面ともに青灰色を呈す。胎土は微細で焼成良好な硬質の土器である。1は内外面ともに回転ナデ、底部は回転ヘラ削りを施す。口径は11.6cm、器高3.6cmである。2は内外面ともに回転ナデを施す。口径は12.1cm、器高3.9cmである。3は内外面ともに回転ナデを施す。底部の調整は不明である。口径は11.1cm、器高3.9cmである。4～6は土器器壁片である。胎土にはともに角閃石と白色砂粒を含み、焼成不良の軟質な土器である。4は内外面ともに調整は不明である。色調は内外断面ともに褐色である。口径は23.1cmである。5の外面は調整不明で、内面はナデを施す。色調は内外断面ともに赤褐色である。口径は15.2cmである。6は内外面ともに調整は不明である。色調は内外断面ともに褐色である。口径は22.8cmである。7は鍔金具である。出土した遺物は6世紀後半に比定できよう。



第67図 1号竪穴住居跡実測図



第68図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図

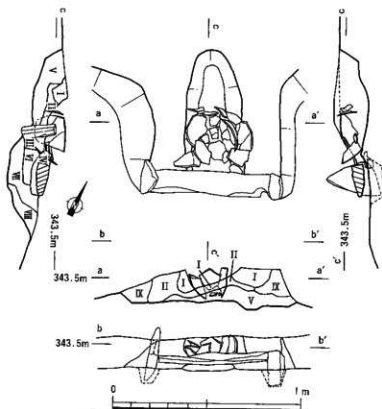
### 1号竪穴住居カマド跡

残存する遺構規模は75cm×75cmである。燃焼部長25cm—支脚（方柱状の安山岩で全高18cm、幅5cm）—煙道部長45cmである。カマド形成時の掘り方は95cm×60cmで、深さ10cmである。燃焼部横のニヶ所には径20cm×15cm、深さ10cmの袖石掘り方を確認した。袖石は砂岩質の河原石を用いる。袖石間には全長65cm、幅15cm、厚さ8cmの天井石が出土している。

#### 出土遺物

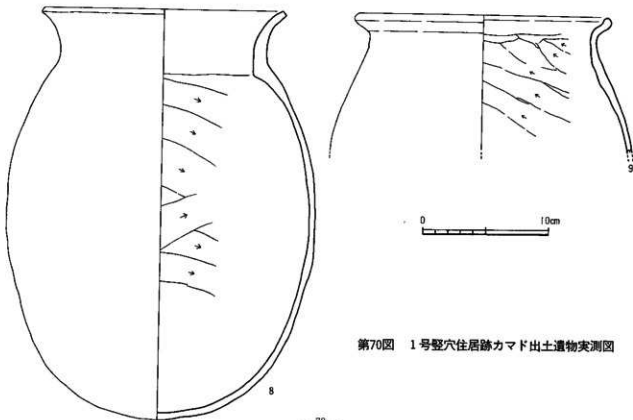
8、9は土師器壺である。胎土は角閃石と白色砂粒を含み、色調は内外断面ともに赤褐色である。焼成は不良で軟質な土器である。8の外表面は調整不明で、内面はヘラナデを施す。口径は19.1cm、器高32.4cmである。遺物は支脚部に据えられた状態で出土した。9の外表面は調整不明で、内面はヘラナデを施す。口径は19.7cmである。出土遺物は6世紀後半に比定できよう。

- I層……茶褐色土、小礫を含むが焼土ブロックは含まず。
- II層……暗茶褐色土、小礫・焼土ブロックを含む。
- III層……暗赤褐色土、焼土ブロック・炭化物を含む。
- IV層……黒褐色土、



- V層……暗黒褐色土・焼土ブロックは含まず炭化物を含む。
- VI層……赤褐色土、燃焼部と推定、被熱し、凝固している。
- VII層……暗茶褐色土、II層より暗く焼土粒を含む掘り方とVI層との階位的位置。
- VIII層……暗茶褐色粘質土、カマド使用時の粘土と考えられる。小礫・炭化物・焼土ブロックを含む。
- IX層……黒褐色土、IV層に類似するが、焼土ブロック、炭化物を含まない。

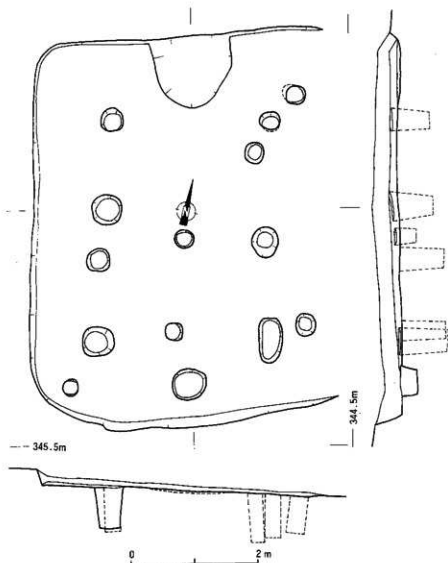
第69図 1号竪穴住居跡カマド実測図



第70図 1号竪穴住居跡カマド出土遺物実測図

## 2号竪穴住居跡

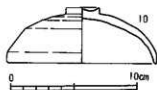
遺構は調査区北西隅に位置するが、自然流路の侵食により東壁を消失していた。平面プランは方形で、確認できる規模は4.25m×3.45m、最大深0.2mである。北壁中央部にはカマドを造り付けている。カマドの残存状態は悪く、熱変硬化した燃焼部を残すのみである。カマド掘り方の規模は71cm×79cm、深さ5cmである。支柱穴は4本である。



第71図 2号竪穴住居跡実測図

## 出土遺物

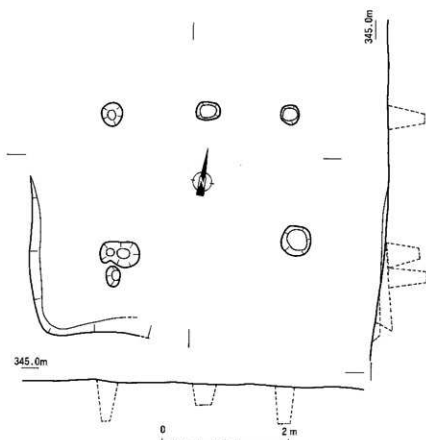
10は須恵器高坏蓋である。住居跡北西隅床面直上から出土した。胎土は微細で、焼成良好な硬質土器である。色調は内外断面ともに青灰色を呈す。内外面ともに回転ナデを施し、口径は12.0cm、器高4.4cmである。遺物は6世紀後半に比定できよう。



第72図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図

### 3号竪穴住居跡

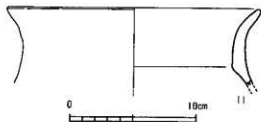
遺構は調査区の西側に位置するが西壁1.62mと南壁1.25m、最大深0.2mを残すのみである。主柱穴は4本である。カマド跡は確認されなかったが、埴土中より焼土ブロックと炭化物を大量に出土した。4号竪穴住居跡との前後関係は確認できなかった。



第73図 3号竪穴住居跡実測図

### 出土遺物

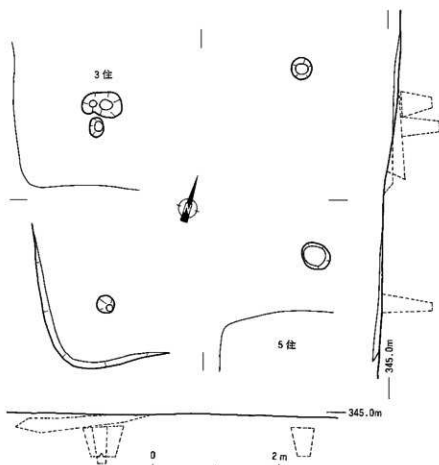
11は土師器甕片である。色調は内外断面ともに褐色で、胎土は角閃石と白色砂粒を含み、焼成不良の軟質な土器である。内外面ともに調整は不明である。口径は20.1cmである。遺物は6世紀後半のものと考えられる。



第74図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図

#### 4号竪穴住居跡

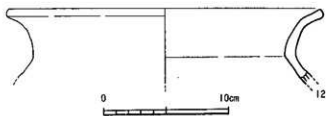
遺構は調査区の西側に位置するが、西壁1.39mと南壁1.01m、最大深10cmを残すのみである。主柱穴は4本である。カマドは確認されなかったが、埋土中からは炭化物、焼土ブロックが大量に出土した。3号竪穴住居跡との前後関係は確認できなかった。



第75図 4号竪穴住居跡実測図

#### 出土遺物

12は土師器甕片である。色割は内外断面ともに褐色で、胎土は角閃石と白色砂粒を含む、軟質な土器である。内外面ともに調整は不明である。口径は24.6cmである。遺物は6世紀後半のものと考えられる。

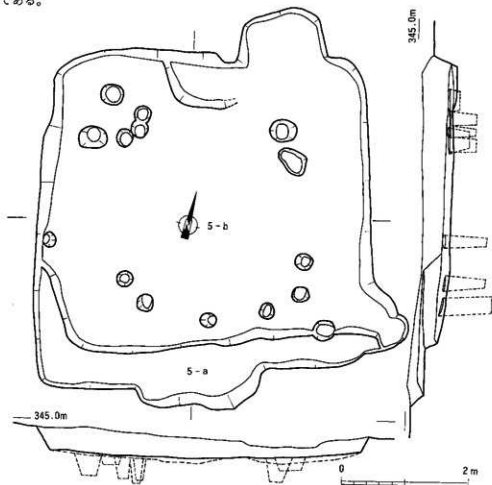


第76図 4号竪穴住居跡出土遺物実測図



### 5-a・5-b号竪穴住居跡

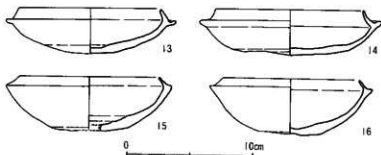
遺構は調査区のほぼ中央部に位置し、5-a住居跡→5-b住居跡の順で切り合いを確認した。5-a住居跡の平面プランは方形で、確認された規模は3.74m×3.23m、深さ20cmである。主柱穴は4本である。5-b住居跡の平面プランは方形で、規模は3.10m×3.53m、最大深30cmである。主柱穴は4本である。住居跡北壁にはカマド跡を確認したが、熱変硬化した燃焼部を残すのみである。確認できるカマド掘り方の規模は61cm×59cm以上、深さ5cmである。



第77図 5-a・5-b号竪穴住居跡実測図

### 出土遺物

13・14は5-a住、15・16は5-b住からそれぞれ出土した須恵器坏身である。13の色調は内外断面とも青灰色である。胎土は微細で焼成良好な硬質の土器である。内外面は回転ナデ、底部はヘラ削りを施す。口径は11.1cm、器高3.6cmである。14の色調は内外面とも青灰色である。胎土は微細で焼成良好な土器である。内外面ともに回転ナデを施す。口径は11.7cm、器高3.6cmである。15の色調は淡褐色である。胎土は微細であるが焼成不良な軟質の土器である。内外面は回転ナデ、底部はヘラ削りを施す。口径は11.1cm、器高4.2cmである。16の色調は内外断面とも青灰色である。胎土は微細で焼成良好な硬質の土器である。内外面は回転ナデ、底部はヘラ削りを施す。口径は10.9cm、器高4.5cmである。13・14は6世紀後半、15・16は6世紀末から7世紀初頭に比定できよう。



第78図 5-a・5-b号竪穴住居跡出土遺物実測図

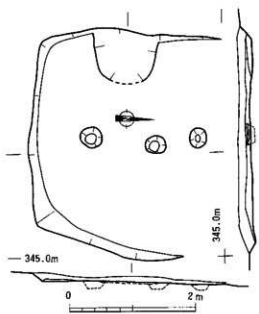
13・14は6世紀後半、15・16は6世紀末から7世紀初頭に比定できよう。

### 6号竪穴住居跡

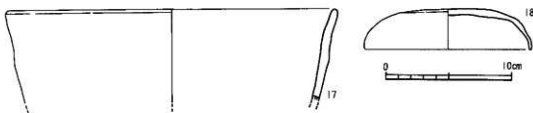
遺構は調査区の西側に位置する。確認できる規模は2.43m×2.04m以上、最大深0.1mである。主柱穴は2本である。住居跡西壁中央部にはカマド跡を確認した。カマドの残存状況は悪く、熱変硬化した燃焼部を残すのみである。カマド掘り方の規模は40cm×61cm、深さ5cmである。

#### 出土遺物

17は土師器椀片である。カマド燃焼部直上より出土した。色調は内外断面とも濃褐色で、胎土には角閃石を含み、焼成不良の軟質な土器で、内外面ともにナデを施す。口径は26.1cmである。18は須恵器坏蓋で住居床面直上から出土した。色調は内外断面とも青灰色で、胎土は微細で焼成良好な硬質の土器である。内外面ともに回転ナデを施す。口径は13.2cm、器高3.4cmである。遺物は6世紀後半に比定できよう。



第79図 6号竪穴住居跡実測図



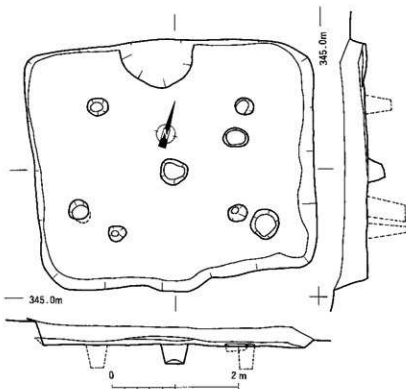
第80図 6号竪穴住居跡出土遺物実測図

### 7号竪穴住居跡

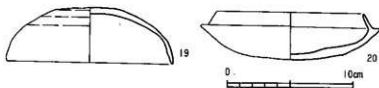
遺構は調査区の中央部に位置する。平面プランは方形で、規模は2.71m×2.93m、深さ0.2mである。主柱穴は4本である。住居跡北壁中央部にはカマド跡を確認した。カマドは残存状況が悪く熱変硬化した燃焼部を残すのみである。カマド掘り方の規模は40cm×68cm、深さ5cmである。

#### 出土遺物

19・20は須恵器坏蓋と坏身である。色調は内外断面とも青灰色を呈する。胎土は微細で焼成良好な硬質の土器である。19は内外面ともに回転ナデを施す。口径は12.2cm、器高4.2cmである。20は内外面ともに回転ナデを施す。口径は11.4cm、器高3.6cmである。遺物は6世紀後半に比定できよう。



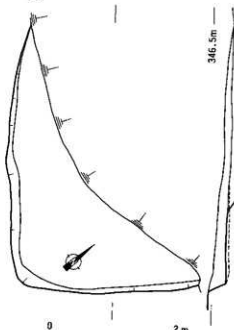
第81図 7号竪穴住居跡実測図



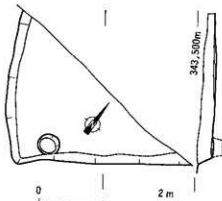
第82図 7号竪穴住居跡出土遺物実測図

### 8号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側に位置するが、風倒木痕のため住居跡北東壁と北西壁を消失していた。残存する遺構の規模は、南西壁2.83m、南東壁1.96m、最大深0.15mである。柱穴、カマド等は確認されず、遺物も出土しなかった。



第83図 8号竪穴住居跡実測図



第84図 9号竪穴住居跡実測図

### 9号竪穴住居跡

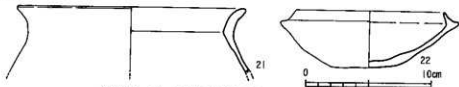
遺構は調査区の北端中央に位置する。確認できる規模は南東壁2.05m、南西壁1.59m、最大深0.16mである。主柱穴は確認できなかった。埋土中からは炭化物が大量に検出されたが遺物は出土しなかった。遺構は調査区外に続くものと考えられる。

### 10・11・12号竪穴住居跡

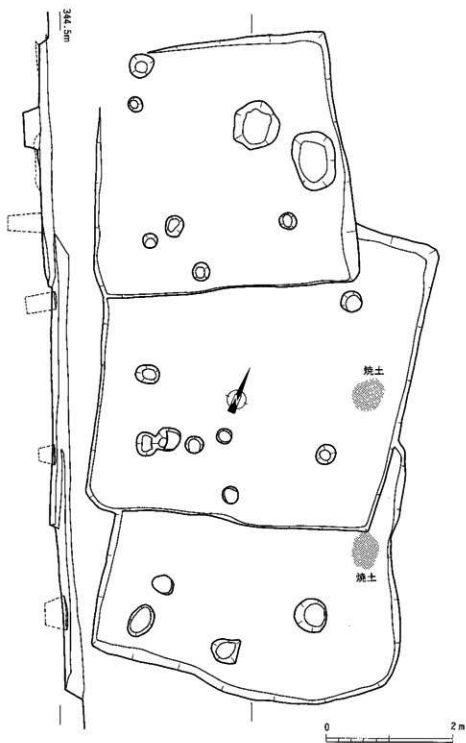
各遺構は調査区の北端に位置し、12号住→11号住→10号住の順で切り合いを確認した。10号竪穴住居跡の平面プランは方形で、規模は2.80m×3.05m、最大深0.2mである。主柱穴は4本である。住居跡東壁にはカマドを確認した。カマド掘り方の規模は40cm×60cm、深さ5cmである。11号住居跡の平面プランは方形で、規模は3.15m×3.30m、最大深0.15mである。主柱穴は4本である。12号住居跡の平面プランは方形で、規模は2.60m×2.60m、最大深0.1mである。主柱穴は3本確認した。11・12号住居跡は共に遺構東側に焼土をもつが、掘り方は共に確認できない。

### 出土遺物

21は土師器甕片で11号住居跡から出土した。色調は内外断面とも褐色である。胎土は角閃石と白色砂粒を含む焼成不良な軟質の土器である。内外面ともに調整は不明である。口径は17.4cmである。22は須恵器坏身で10号住居跡から出土した。色調は内外断面とも濃褐色である。胎土は微細であるが焼成が悪い軟質の土器である。内外面ともに調整は不明である。口径は11.8cm、器高4.4cmである。21は6世紀代、22は6世紀末から7世紀初頭にそれぞれ比定できる。



第85図 10・11号竪穴住居跡出土遺物実測図



第86図 10~12号竪穴住居跡実測図

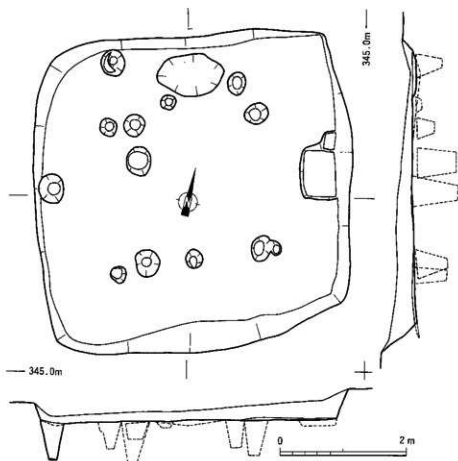
### 13号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部に位置する。平面プランは方形で、規模は3.30m×3.30m、最大深0.4mである。主柱穴は4本である。北壁中央部にはカマド跡を確認した。カマドは残存状況が悪く焼土ブロックを僅かに残す。カマド掘り方の規模は40cm×70cm、深さ5cmである。

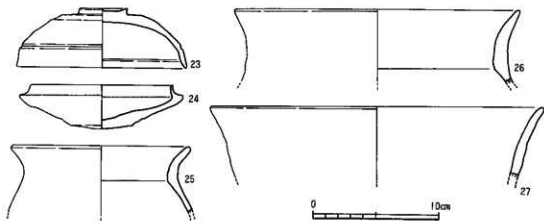
#### 出土遺物

23・24は須恵器高坏蓋、坏身である。色調は内外断面ともに青灰色である。胎土は微細で焼成良好な硬質の土器である。内外面ともに回転ナデを施す。23の口径は13.4cm、器高5.1cmである。24は内外面ともに調整は不明である。

口径は11.2cm、器高3.5cmである。25、26は土師器壺片、27は土師器椀片である。色調は内外断面ともに褐色である。胎土は角閃石を含み焼成不良な軟質の土器である。25は内外面ともに調整は不明である。口径は14.3cmである。26は内外面ともに調整は不明である。口径は22.4cmである。27の内面は調整不明、外面はナデを施す。口径は26.4cmである。遺物は6世紀後半から7世紀初頭に比定できよう。



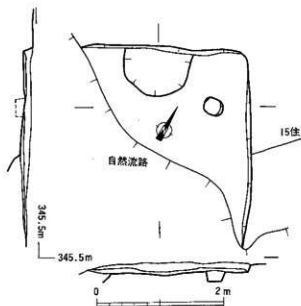
第87図 13号竪穴住居跡実測図



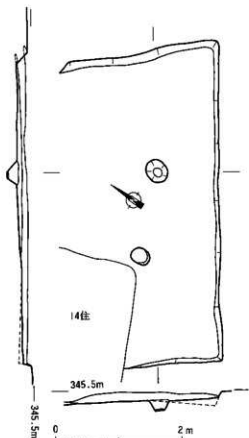
第88図 13号竪穴住居跡出土遺物実測図

#### 14号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部にあるが、南東壁と南西壁は自然流路により侵食をうけ消失していた。住居跡は15号住居跡と切り合い関係にあるが前後関係は不明である。確認できる規模は1.80m以上×2.05m以上、最大深0.1mである。主柱穴は1本のみ確認された。北西壁中央部にはカマド跡を確認したが、残存状況は悪く焼土ブロックを残す。カマド掘り方の規模は50cm×70cm、最大深5cmである。



第89図 14号竪穴住居跡実測図



第90図 15号竪穴住居跡実測図

#### 15号竪穴住居跡

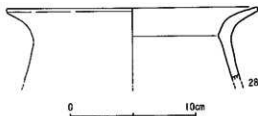
遺構は調査区の中央部に位置する。住居跡は14号住居跡、16号住居跡と切り合い関係にあるが、前後関係は不明である。確認できる規模は3.35m×1.80m以上、最大深0.1mである。住居跡には柱穴を2本確認した。

#### 16・17・18号竪穴住居跡

各遺構は調査区の東側に位置し、16号住→17号住、18号住→17号住の順で切り合い関係を確認した。16号住居跡の規模は3.40m×2.00m以上、最大深0.1mである。主柱穴は4本である。17号住居跡の平面プランは歪な方形で、規模は2.80m×3.20m、最大深0.15mである。主柱穴は4本である。住居北西壁中央部にはカマド跡を確認した。カマドは残存状況が悪く焼土ブロックを残す。カマド掘り方の規模は30cm×40cm、深さ5cmである。18号住居跡は南東コーナーを残すのみである。最大深0.1mである。

#### 出土遺物

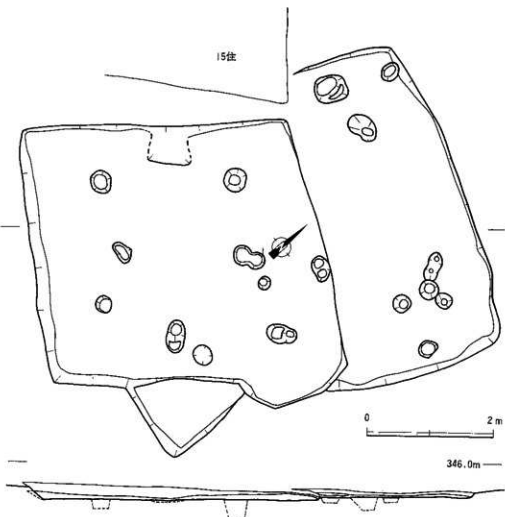
28は土師器甕片で17号竪穴住居跡から出土した。色調は内外断面ともに褐色である。胎土は角閃石と白色砂粒を含む焼成不良な軟質の土器である。内外面ともに調整は不明である。口径は20cmである。遺物は7世紀代に比定できよう。



第91図 17号竪穴住居跡出土遺物実測図

### 1号墓

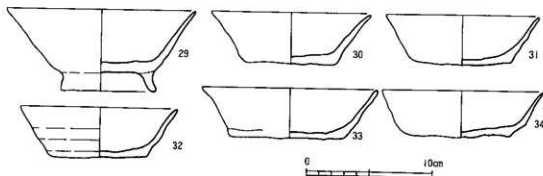
遺構は調査区南側の緩斜面上にて確認された。溝の規模は東西7.20m、南北4.60m、幅0.14m～0.65m、最大深0.2mである。主体部は30cm×90cmの長方形で、最大深20cmである。遺物は主体部より土師器の埴と坏が出土した。



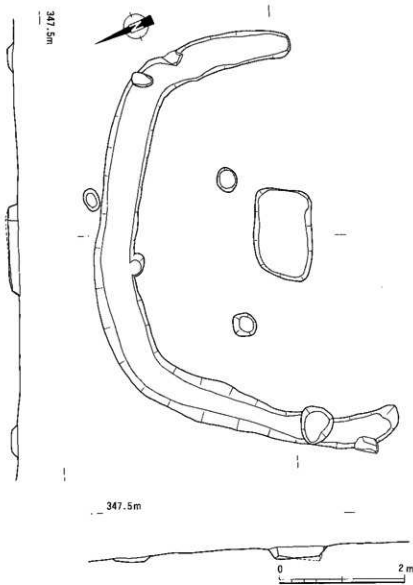
第92図 16～18号竪穴住居跡実測図

### 1号墓主体部出土遺物

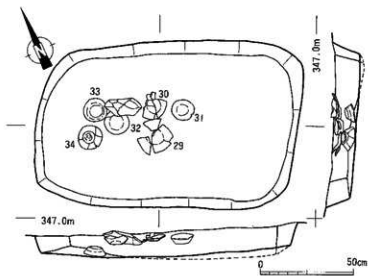
29は埴、30～34は坏である。色調は内外断面とも褐色である。胎土は白色砂粒を僅かに含み焼成不良な軟質の土器である。29は内外面ともに調整不明である。口径は14.8cm、器高6.3cmである。30は底部をヘラ切り後ナデ調整するが、他の調整は不明である。口径は12.6cm、器高4.1cmである。31は底部をヘラ切り後ナデ調整するが、他の調整は不明である。口径は12.2cm、器高3.9cmである。32は底部をヘラ切り後ナデ調整する。他の内外面は回転ナデを施す。口径は12.3cm、器高3.9cmである。32は底部をヘラ切り後ナデ調整する。他の調整は不明である。口径は13.8cm、器高3.8cmである。34は底部をヘラ切り後ナデ調整する。他の調整は不明である。29～32は見込みを上向きに主体部より浮いた状態でしており、棺外の祭祀に供されたものと考えられる。33・34は主体部床面直上に乗せた状態で出土しており、棺内副葬品と推定される。遺物は8世紀代に比定できよう。



第93図 1号墓主体部出土遺物実測図



第94图 1号墓实测图



第95图 1号墓主体部实测图



### 1号掘立柱建物跡

遺構は調査区の北西隅、1号竪穴住居跡西側に隣接したかたちで位置する。建物は1間×1間である。柱穴間の寸法は南側2.30m、西側3.60mである。柱穴の径は30cm~40cm、深さ40cm~80cmである。遺物は出土しなかった。

### 2号掘立柱建物跡

遺構は調査区の中央部、5号竪穴住居跡北側に隣接したかたちで位置する。建物は1間×1間である。柱穴間の寸法は北西側1.50m、北東側1.60mである。柱穴の径は30cm~50cm、深さ30cm~40cmである。遺物は出土しなかった。

### 3号掘立柱建物跡

遺構は調査区の中央部、12・13号竪穴住居跡と自然流路の間に位置する。建物は2間×1間である。柱穴間の寸法は北側2.05m、東側1.90m+1.70mである。柱穴の径は30cm~40cm、深さ50cm~70cmである。遺物は出土しなかった。

### 4号掘立柱建物跡

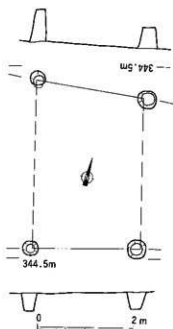
遺構は調査区の北端、11号竪穴住居跡の東側に位置する。建物は1間×1間である。柱穴間の寸法は南側1.95m、西側1.50mである。柱穴の径は25cm、深さ20cm~40cmである。遺物は出土しなかった。

### 5号掘立柱建物跡

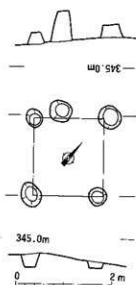
遺構は調査区の東側、13号竪穴住居跡の東側に位置する。西側の柱穴は風倒木により消失していた。建物は1間×1間である。柱穴間の寸法は南東側3.10m、北東側2.90mである。柱穴の径は25cm~35cm、深さ40cm~65cmである。遺物は出土しなかった。

### 6号掘立柱建物跡

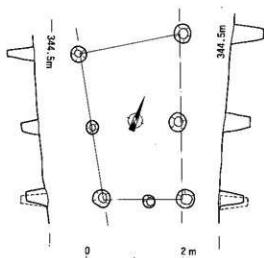
遺跡は調査区の東側の斜面上に位置する。建物は3間×3間である。柱穴間の寸法は南東側1.40m+1.60m+1.80m、北東側2.30m+2.30m+1.50mである。柱穴の径は45cm~55cm、深さ40cm~75cmである。遺物は出土しなかった。



第96図 1号掘立柱建物跡実測図



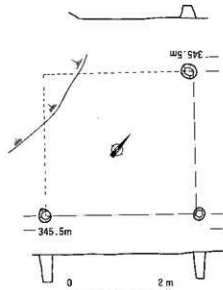
第97図 2号掘立柱建物跡実測図



第98図 3号掘立柱建物跡実測図



第99図 4号掘立柱建物跡実測図



第100図 5号掘立柱建物跡実測図

### 1号土坑

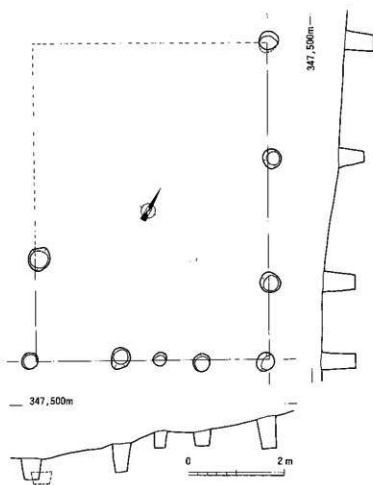
遺構は調査区の南西端に位置する。長さ2.20m、幅0.8m、最大深0.45mである。遺物は出土しなかった。

### 2号土坑

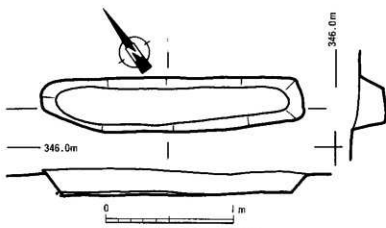
遺構は調査区の南西側に位置する。長さ2.90m、幅1.10m、最大深0.7mである。遺物は出土しなかった。

### 3号土坑

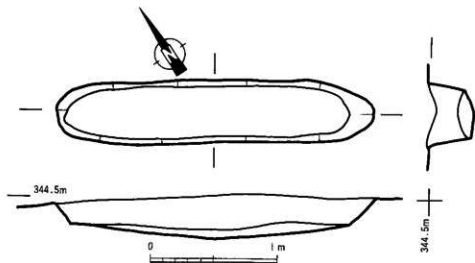
遺構は調査区の中央部、11号竪穴住居跡の西側に隣接する。土坑の平面プランは隅丸長方形で、規模は2.20m×1.65m、最大深0.3mである。埋土は黒色土一層で遺物は確認されなかった。床面は平坦で、壁の立ち上がりも明瞭である。土坑の外側四隅には、径45cm、深さ30cm～45cmの柱穴を確認している。埋土は黒色土で、覆土があった可能性がある。柱穴間の寸法は北側2.30m、東側2.30mである。内部から遺物は出土しなかった。



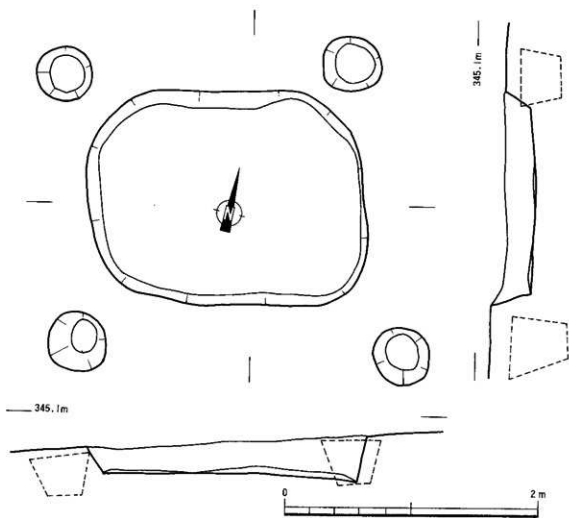
第101図 6号掘立柱建物跡実測図



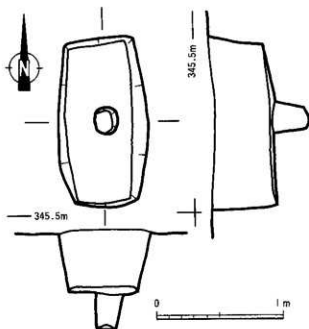
第102図 1号土坑実測図



第103图 2号土坑实测图



第104图 3号土坑实测图



第105図 1号陥穴実測図

#### 1号陥穴

遺構は調査区の東側に位置する。長軸1.35m、短軸0.7m、最大深0.45mである。中央には径が20cm、深さ30cmの掘り方を確認した。遺物は出土しなかった。

#### 1号焼土

調査区の中央部に位置する。長軸2.5m、短軸1.3mの楕円形に焼土粒が散在している。掘り方は確認されず、遺物も出土していない。

#### 2号焼土

調査区の中央部に位置する。直径1.1mの円形に焼土粒が散在している。掘り方は確認されず、遺物も出土していない。

#### 溝状遺構

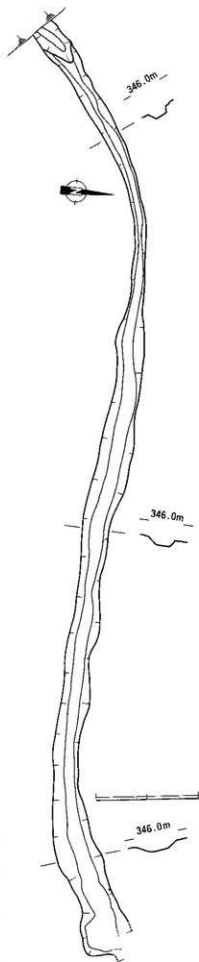
遺構は調査区の南側を東西に横切るかたちで確認された。全長40m、最大幅1.40m、最大深0.3mである。遺物は出土しなかった。

#### 小 結

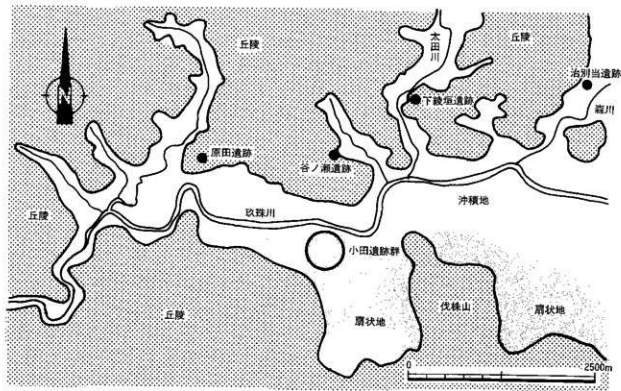
下鏡短遺跡は玖珠川の支流である太田川東岸の尾根と尾根に挟まれた標高約343.5～347.5mの谷部緩斜而上に立地している。谷部と太田川の比高差は15m程で河川氾濫等を受けておらず、安定した状態で土砂堆積が進んだものと考えられる。

今回の調査で6世紀後半から7世紀初頭の竪穴住居跡、奈良時代の墳墓、時期不明の独立柱建物跡、土坑、溝状遺構、陥穴が確認された。このように玖珠盆地の西部において古墳時代の集落跡が調査されたのは、昭和60～61年の小田遺跡群（西田遺跡、冷酒庵A遺跡、冷酒庵B遺跡、冷酒庵C遺跡、妙大寺A遺跡、妙大寺B遺跡、中西遺跡、板屋遺跡）、平成2年の原田遺跡、平成3年の谷ノ瀬遺跡、平成5年の治別当遺跡があげられる。

小田遺跡群は、玖珠川の南岸に広がる扇状地末端に立地するもので、中西遺跡は、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡23軒、西田遺跡では5世紀前半から中頃（7軒）、6世紀中頃（13軒）の竪穴住居



第106図 溝状遺構実測図



第107図 玖珠盆地西部の古墳時代集落分布図

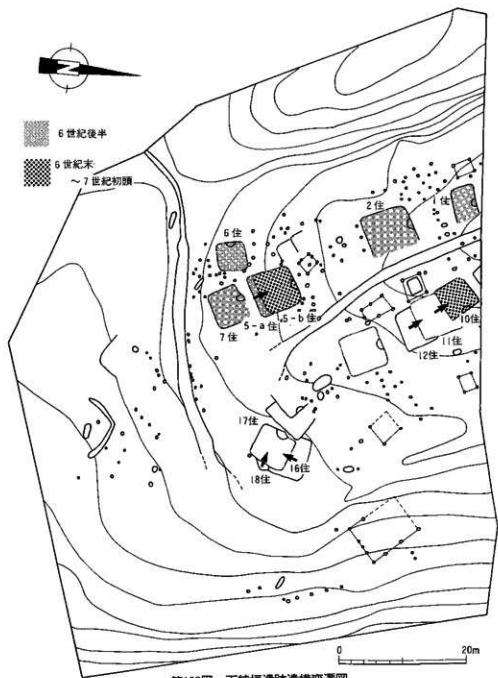
跡、板屋遺跡では5世紀から7世紀にわたる17軒の竪穴住居跡がそれぞれ確認されている。さらに、鬼塚古墳、鬼塚石棺群、冷滝庵C遺跡(方形周溝墓)、西田遺跡の7世紀後半から8世紀初頭の円面硯の出土など、遺跡群が当時の中心的集落であったと考えられる。

一方こうした盆地西部の扇状地の遺跡に比べ、その北側の台地、谷部、沖積地上に分布する周知の遺跡は少なく、本地域の集落形成を分析するのに大きなネックとなっていた。そのような中で原田遺跡では6世紀後半の竪穴住居跡11軒、谷ノ瀬遺跡では6世紀後半の竪穴住居跡2軒、下綾垣遺跡では6世紀後半から7世紀初頭の竪穴住居跡19軒、治別当遺跡では3世紀末、6世紀前半、7世紀前半、8世紀前半の竪穴住居跡計11軒が確認されたことから、いままでその実態が不透明であった集落形成の一端が明らかになった。したがって、下綾垣遺跡の調査は、本地域の動向を探る重要な結果をもたらした。それでは、遺跡の残存状況が悪く残念ではあるが、確認された遺構、遺跡について整理をおこなう。

確認された遺構は、竪穴住居跡19軒(内11軒でカマド跡を検出した)、墳墓1基、掘立柱建物跡6軒、土坑3基、溝状遺構1条、陥穴1基である。住居跡で切り合い関係が出土遺物と土層観察から確認されたのは5-a住(6世紀後半)→5-b住(6世紀末から7世紀初頭)である。土層観察と一部遺物が確認され切り合いが判明したのは12住(時期不明)→11住(6世紀後半)→10号住(6世紀末から7世紀初頭)、16住(時期不明)→17住(6世紀後半)、18住(時期不明)→17住である。他の住居については出土遺物が少なく時期、切り合い関係は不明である。さらに、住居跡の主軸方向をみると1、2、5-a、5-b、7、13住と3、4、10、11、12住と主軸を合わせると6、14、15、16、17、18号住に分類できる。

以上の結果から住居群をみると、時間的には6世紀後半の住居に切り合いがあることから6世紀末から7世紀初頭の住居を合わせ3区分以上、住居主軸でグルーピングをすると3グループ以上に分類が可能である。住居は約50～60年の間に最高で4軒以上の切り合い関係があることから、短いものは15年前後建て替えられたものと推定される。さらに、掘立柱建物跡6軒がほぼ住居に重なることなく展開していることから、一時期に存在した遺構の数は、住居6～7軒に掘立柱建物2軒程度であったと考えられる。

このように6世紀後半を中心とする時期に、前述した原田、谷ノ瀬遺跡を好例として、玖珠盆地北西部の丘陵や谷部には突如として集落が形成されていくことが確認された。扇状地上に立地する小田遺跡群は、弥生時代後期末から8世紀初頭、沖積地上の治別当遺跡は弥生時代後期末から8世紀前半に継続的に営まれていることが確



第108図 下綾垣遺跡遺構実測図

認されている。この二者には明らかに時間的、立地的な相違点を確認できる。

玖珠盆地における墳墓の分布を見ると亀都起古墳を中心とする大隈グループ、鬼ヶ城古墳等からなる森・帆足グループ、鬼塚古墳等から構成される小田グループが存在することから下綾垣遺跡は小田グループの亜流として6世紀後半から7世紀初頭にかけて展開した可能性が極めて高いといえる。さらに、台地、谷部に展開する集落跡は稲作を生業としたとは考えにくい地形にあることから、他の生産基盤を持っていた可能性を指摘しておきたい。

今後、玖珠盆地内における調査において、各グループの展開を前提とした集落跡、墳墓群の把握が玖珠の歴史を知る上で極めて大きなウェイトを占めることになる。

- 1) 『小田遺跡群Ⅰ 大分県玖珠郡玖珠町所在集落遺跡の発掘調査報告書』 玖珠町教育委員会 1987
- 2) 『小田遺跡群Ⅱ 大分県玖珠郡玖珠町所在集落遺跡の発掘調査報告書』 玖珠町教育委員会 1988
- 3) 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報-日田~玖珠間-第1集~第4集』 大分県教育委員会 1991~1994
- 4) 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』 大分県教育委員会 1995

# 下綾垣遺跡住居跡の焼土の地磁気年代

島根大学総合理工学部 時枝 克宏

## 1. 地磁気年代法の仕組

地磁気は一定ではなく不規則な変動をしている。この地磁気変動には周期の短いものから長いものまで様々な成分が含まれているが、それらのなかでも、10年以上経過してはじめて変化が顕著になるような緩やかな変動を地磁気永年変化と称している。地磁気年代測定法で時計の機能をはたすのはこの地磁気永年変化であり、過去の地磁気の方向の時間的変化を示す曲線に年代を目盛って、地磁気の方向から逆に年代を読みとろうとする。しかし、例えば、ある焼土が何時焼けたかを知ろうとすると、焼土が焼けたときの地磁気の方向がどこかに記録されており、それを測定できなくては目的を果たせない。実は、焼けた時の地磁気の方向は焼土の熱残留磁気として記録されている。地磁気年代を求める手順を述べると、まず、焼土の方位目盛りを採取し、それらの熱残留磁気を測定して、焼土が最終加熱されたときの地磁気の方向を求める。そして、標準となる地磁気永年変化曲線にこの方向に近い点を求めて年代目盛りを読みとることになる。

地磁気中で粘土が焼けると、粘土に含まれる磁鉄鉱、赤鉄鉱等の磁性鉱物が担い手となって、焼土は熱残留磁気を帯びる。この熱残留磁気の方向は焼けたときの地磁気の方向に一致し、しかも非常に安定であり、磁性鉱物のキュリー温度（磁鉄鉱で578°C、赤鉄鉱で675°C）以上に再加熱されないうち数万年以上年代が経過しても変化しない。もし、再加熱によって、焼土がキュリー温度以上になった場合は、それまで保持していた残留磁気が完全に消滅し、その代わりに、新たに再加熱時の地磁気の方向を向いた熱残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終焼成時の地磁気を熱残留磁気として正確に記憶する。それゆえ、あらかじめ、年代既知の焼土の熱残留磁気を測定して、地磁気の方向の時間的変化をグラフにしておけば、このグラフを時計として、年代未知の焼土がいつ焼けたかを推定できる。この時計では地磁気の方向が針に相当し、焼土の熱残留磁気が焼成時の針の位置を記憶していることになる。日本では、広岡によって西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線がかなり詳しく測定されているので<sup>1)</sup>、この方法が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている。地磁気年代測定法の詳細については中島による解説が参考になる<sup>2)</sup>。

## 2. 地磁気年代測定法の問題点

第一に、地磁気の方向は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、その場所での標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違していることが問題となる。厳密に言えば、ある焼土の地磁気年代を求めるには、焼土の熱残留磁気をその場所の標準曲線と比較しなければならない。相違が小さいときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きいたときにはその地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と焼土の残留磁気の方向を比較する必要がある。

大分県の標準曲線の問題については、既報告の伊藤田窯跡群の城山窯跡A地区2、3号窯、瓦ヶ迫窯跡1号窯の測定結果に関連して後述したい。

第二に、地磁気変動から推定される地磁気年代は土器編年に左右されないと思われがちであるが、これは誤解であり、地磁気年代は土器編年に強く依存している。すなわち、少数の年代定点をのぞくと、標準曲線上の年代目盛りのほとんどは考古学の土器編年体系を参照して決められている。それゆえ、地磁気年代が年代定点に近いときには問題がないが、年代定点から遠くなるほど土器編年の影響をより強く受けることになり、もし、土器編年に改訂があれば、地磁気年代もそれに伴って訂正しなければならない。年代定点の数が増加すると、地磁気年代の土器年代への依存は解消するが、現状ではやむをえない。しかし、地磁気を媒介とする地磁気年代測定法は、

無遺物の場合でも有効である点、また、遠隔地の土器編年を地磁気変動を通じて対比できる点で独自の性格をもつ。

### 3. 遺構と試料

下綾垣遺跡（大分県玖珠郡玖珠町大字綾垣）では、18基の住居跡、6基の掘立柱建物跡、土坑等が検出されており、出土土器から推定される住居跡の年代はほとんどが6C後半、一部は6C後半～7C初頭と考えられている。焼土の地磁気年代を求めるための定方位試料として、1、6号住居跡の焼土範囲の狭いカマドから各々10個と6個、2、5-b、7、11、12、17号住居跡のカマド、1、2号焼土から各々15個を採取した。焼土が受けた局部的攪乱を検知して最終焼成時の地磁気方向を正しく知るために、各焼土についてよく焼けたところを選びできるだけ広い範囲から試料を採取している。

### 4. 測定結果

試料の残留磁気方向をスピナー磁気計で測定した。測定結果を図1～10に示す。残留磁気方向の揃い方を見ると、図1、4、6、8に示される1、6、11、17号住居跡のカマドでは、データが全体に分散しており部分的にも揃わないので、焼成時の地磁気方向が分からず、したがって、地磁気年代を推定できない。その他の焼土のデータはよく揃っており、少数の飛び離れたデータを除いた円内データを元に地磁気年代を求めることにする。円内データから計算した残留磁気平均方向と誤差の目安となる数値を第10表に示す。kの値が大きく、 $\theta_{95}$ の値が小さいほど、残留磁気方向がよく揃っていることを意味している。

$I_m$ : 平均伏角     $k$ : Fisherの信頼度係数     $n/N$ : 採用試料数/採取試料数  
 $D_m$ : 平均偏角     $\theta_{95}$ : 95%の誤差角

遺 構	$I_m$ (度)	$D_m$ (度E)	$k$	$\theta_{95}$ (度)	$n/N$
1号住居跡カマド	残留磁気方向が分散する				
2号住居跡カマド	56.06	-13.23	843	1.77	9/15
5-b号住居跡カマド	54.55	-19.48	735	1.53	13/15
6号住居跡カマド	残留磁気方向が分散する				
7号住居跡カマド	54.77	-13.25	767	1.50	13/15
11号住居跡カマド	残留磁気方向が分散する				
12号住居跡カマド	53.27	-13.62	808	2.69	5/15
17号住居跡カマド	残留磁気方向が分散する				
1号焼土	57.00	-16.94	1103	1.38	11/15
2号焼土	54.84	-10.88	1131	1.99	6/15

第10表 下綾垣遺跡の焼土の残留磁気平均方向

### 5. 地磁気年代

図11は下綾垣遺跡の焼土の残留磁気平均方向（+印）と誤差の範囲（点線の楕円）、および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線<sup>3)</sup>である。地磁気年代を求めるには、残留磁気平均方向から近い点を永年変化曲線上に求めて、その点の年代を読みとればよい。年代誤差も点線の楕円から同様にして推定できる。このようにして求めた5-b号住居跡カマド、1号焼土の地磁気年代を第11表に示す。



標準曲線の550年から800年にかけての軌跡は伏角の増減に伴って下方に屈曲した細長い零型をしている。2、7、12号住居跡カマド、2号焼土では、各々の残留磁気の平均方向がこの零型軌跡の内側に位置するために、誤差の範囲を考慮すると軌跡の両側線に対応した2つの地磁気年代候補値が可能となる。このようにして求めた地磁気年代候補値を第12表に示す。

出土土器は6C後半のものがほとんどであるので、地磁気年代として西側測線に対応する若い年代値を選ぶのが合理的である。このようにして決定した唯一の地磁気年代を考古学年代とともに第13表にまとめる。

遺構	地磁気年代(A. D.)
5-b号住居跡カマド	590±15
1号焼土	620±15

第11表 5-b号住居跡カマド、1号焼土の地磁気年代

遺構	地磁気年代(A. D.)
2号住居跡カマド	610±20 or 710±30
7号住居跡カマド	595±15 or 730±15
12号住居跡カマド	580±20 or 750±30
2号焼土	590±20 or 730±25

第12表 2、7、12号住居跡カマド、2号焼土の地磁気年代候補値

遺構	地磁気年代(A. D.)	土器年代(A. D.)
1号住居跡カマド	—	6C後半
2号住居跡カマド	610±20	6C後半
5-b号住居跡カマド	590±15	6C末～7C初頭
6号住居跡カマド	—	6C後半
7号住居跡カマド	595±15	6C後半
11号住居跡カマド	—	6C後半?
12号住居跡カマド	580±20	不明(遺物なし)
17号住居跡カマド	—	6C後半?
1号焼土	620±15	不明(遺物なし)
2号焼土	590±20	不明(遺物なし)

第13表 下綾垣遺跡の焼土の地磁気年代と土器年代

## 6. 考 察

地磁気年代と考古学年代を比較すると、地磁気年代が全体に新しい方へ少しずれているが、両年代はかなりよく整合している。次に、標準曲線の地域差の問題について、今回の測定結果を以前に実施した伊藤田窯跡群の3基の窯の測定結果と比較して述べたい。伊藤田窯跡群の城山2、3号窯<sup>4)</sup>と瓦ヶ追1号窯<sup>5)</sup>の測定結果を第14表と第120図に示す。

遺構	地磁気年代(A. D.)	土器年代(A. D.)
城山2号窯跡	720±20	6C末
城山3号窯跡	750±25	6C末～7C前半
瓦ヶ追1号窯	650±25	6C後半～末

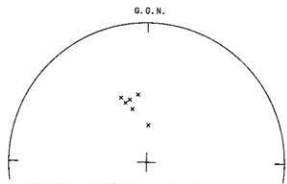
第14表 伊藤田窯跡群の城山2、3号窯、瓦ヶ追1号窯の地磁気年代と考古学年代

これら3基の窯について、考古学年代は下綾垣遺跡の住居跡とほぼ同じ範囲に納まっているが、地磁気年代は考古学年代よりも約100年新しい7C後半～8Cになっている。この理由は、第120図から分かるように、城山2、3号窯については、残留磁気の方向が標準曲線の550年～800年の零形軌跡の東側線よりもさらに東側に偏っているために、西側線ではなく東側線に対応した年代を読みとったためである。また、瓦ヶ追1号窯については、残留磁気の深い伏角に対応して軌跡の突端部の年代を読みとったためである。そして、城山2、3号窯の報告書では、この考古学年代と地磁気年代の矛盾を標準曲線の地域差によるものと考えている。

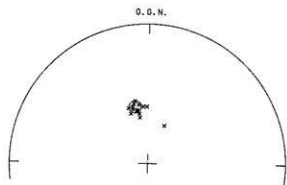
第121図には、下綾垣住居跡、城山2、3号窯、瓦ヶ追1号窯の残留磁気の平均方向がともに描かれている。考古学年代を正しいとすると、これらのデータの平均位置の変化が大分県の6C後半～7C初頭の地磁気変化を表していることになる。そうすると、この時代の地磁気の変化は、広岡による零形曲線に沿うよりも、この零形曲線の西側ラインを少し東にずらした点線の曲線に沿って生じたと見る方が合理的であろう。

見方を変えて、点線の曲線が大分県の6C後半～7C初頭の標準曲線を表していると仮定すると、城山2、3号窯の地磁気年代として、西側線に対応する6C後半～末の年代が得られ、また、瓦ヶ追1号窯についてはより考古学年代に近い～640の値を得る。一方、下綾垣遺跡の焼土の地磁気年代にはほとんど変化がなく、結局、考古学年代と地磁気年代の矛盾がかなり解消される。以上より、著者は大分県の6C後半～7C初頭の標準曲線は広岡による標準曲線を少し西側へ移動させたもので近似できるのではないかと考えている。標準曲線は地磁気年代の基礎であるから、軽々しく扱うことはできない。少数の測定値をもとにした著者の推論を確かめるためには、さらに多くのデータを蓄積して、それらのデータの平均的ふるまいを観察する必要がある。そのためには、出土土器等から考古学年代が明白であり、遺跡の年代観を与えるデータとしてとくに地磁気年代の測定を必要としない場合でも、標準曲線の地域差を求める基礎データを得るために、熱残留磁気の測定を行う必要があると思う。最後に、試料採取、情報提供に関して、染矢和徳氏をはじめとする大分県教育委員会文化課の皆様にお世話になりました。心から感謝します。

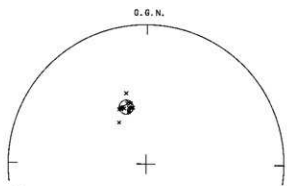
- 註1) 広岡公夫(1978) 考古地磁気および第四紀古地磁気の最近の動向  
第4紀研究 15、200-203
- 2) 中島正志、夏原信義 「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー9  
ニューサイエンス社
- 3) 註1)と同じ
- 4) 時枝克安、伊藤晴明 伊藤田城山窯跡A地区2号窯及び3号窯の考古地磁気年代について「伊藤田城山窯跡群」中津市文化財調査報告第5集 中津市教育委員会 115-120、1985
- 5) 時枝克安、伊藤晴明 瓦ヶ追窯跡1号窯跡-考古地磁気調査「上ノ原遺跡群Ⅲ、伊藤田窯跡群Ⅱ」一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査概報 大分県教育委員会 28-29、1984



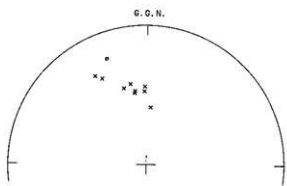
第109図 1号住居跡カマドの残留磁気の方向



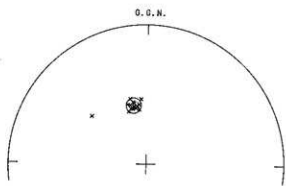
第110図 2号住居跡カマドの残留磁気の方向



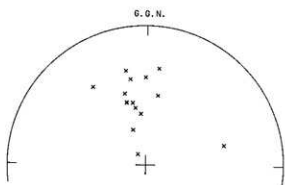
第111図 5-b号住居跡カマドの残留磁気の方向



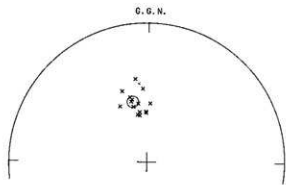
第112図 6号住居跡カマドの残留磁気の方向



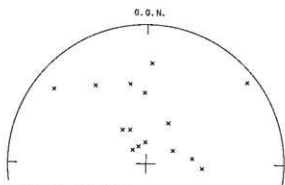
第113図 7号住居跡カマドの残留磁気の方向



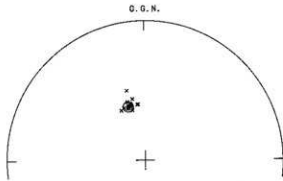
第114図 11号住居跡カマドの残留磁気の方向



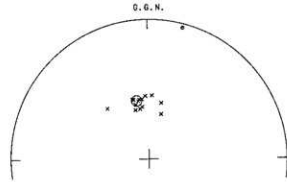
第115図 12号住居跡カマドの残留磁気の方向



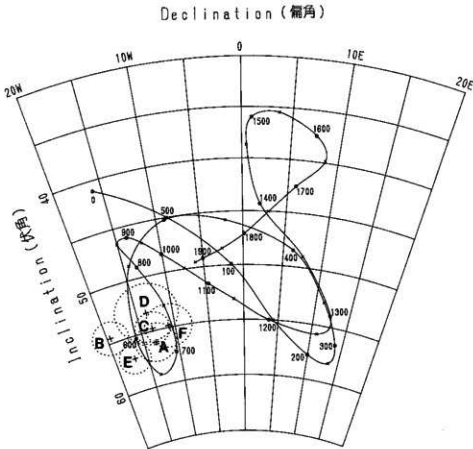
第116図 17号住居跡カマドの残留磁気の方向



第117図 1号焼土の残留磁気の方角



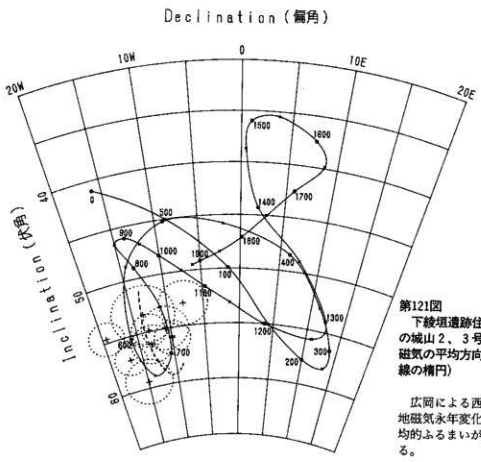
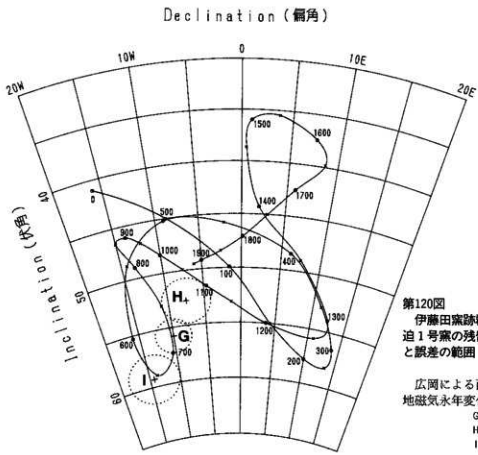
第118図 2号焼土の残留磁気の方角



第119図 下綾垣道跡の焼土の残留磁気の平均方向(+印)と誤差の範囲(点線の楕円)

広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線平均方向に添えられた数字は各炭窯の番号である。

- |               |               |
|---------------|---------------|
| A : 2号住居跡カマド  | D : 12号住居跡カマド |
| B : 5-b住居跡カマド | E : 1号焼土      |
| C : 7号住居跡カマド  | F : 2号焼土      |



## Ⅳ まとめ

九州横断自動車道日田～玖珠間は、平成5年度で現地の発掘調査を全て終了した。この間の遺跡は、日田市街地と玖珠インターチェンジ付近に集中するが、今回報告した白岩遺跡は九州でも数少ない高地性集落として注目されるものであった。また、下綾垣遺跡調査中の平成3年9月27日、大分県は強烈な台風19号に襲われ、拠点や現地のプレハブ建物が崩壊するというハプニングに見まわれた。このため下綾垣遺跡の遺物や実測図等の一部を紛失する事態となったが、幸にも現地が残存していたことと、調査を開始して間もない頃であったために、大きな被害はまぬがれることが出来た。

白岩遺跡は、玖珠盆地西側の牧野原岳より南にのびる丘陵端部にあり、盆地との比高差は90mである。遺跡の概要は報告のとおりであるが、九州では福岡県杷木町西ノ迫遺跡につく環壕を巡らせた弥生期の高地性集落で、12月23日に行った現地説明会には県内外から多くの見学者が訪れた。また、遺跡はきわめて学術的な価値の高いものと判断し、日本道路公団には工法変更等による現状保存の検討を依頼した。しかし、遺跡は九州横断自動車道の両側斜面にあたり、遺構検出面と車道との高低差が約50mあることから、45°勾配の法面が必要で、高速道路の構造上、安全性のうえからは、それ以上の法面を急勾配にすることは危険を伴うとの回答があり、県教委は計画どおりの着工に同意した。このため遺跡の重要性については、遺跡の全貌を明らかにすることとし、翌年度、玖珠町教育委員会が残り部分の確認調査を実施することになった。その結果、環壕は急斜面の東側を除き、標高約380m前後で頂上を囲むように巡っていることが明らかになり、きわめて軍事性の強い高地性集落であることが明確になった<sup>1)</sup>。

下綾垣遺跡は玖珠川の右岸にあり、三方を丘陵に囲まれ北に開いた馬蹄状の平坦部に位置する。6世紀後半から末にかけての竪穴住居跡19軒等が検出されたが、住居跡は中央部を南から北に走る流路を境にして、二例が南北方向に建てられる特徴をもっている。

玖珠盆地における古墳時代の集落跡は、昭和40年代後半から50年代にかけての県営圃場整備事業によって、大隈地区のおごもり遺跡・祇園遺跡、小田地区の小田遺跡群（冷酒庵遺跡・中西遺跡・西田遺跡・板屋遺跡）等が行われたが、いずれも玖珠川左岸の扇状地においてであった。しかし平成3年以降は、九州横断自動車道に伴う調査が玖珠川右岸で実施され、東から松木川、森川、太田川、浦内内川の小河川が分断するような地形にある玖珠川右岸の状況も明らかにされた。

日田地区は、昭和62年度に調査した小迫辻原遺跡が平成8年10月に国史跡に指定された。九州横断自動車道に伴う調査では、2基の豪族居館が発見されたが、その後は日田市教育委員会の確認調査によってさらに居館1基が追加され、また台地西側では3期の環壕集落跡等が発見された。環壕集落と豪族居館が一つの台地上に展開するきわめて類例のない遺跡と言えよう。さらに平成7年には、送電線の鉄塔工事に伴う吹上遺跡の調査では、甕棺墓や木棺墓から把頭飾付銅剣や銅弋等が出土し、またゴホウラやイモガイの貝輪を装着した人骨も発見され、北部九州の王墓を想定させる墳墓が検出された。

さて、今回は佐寺横穴墓群・大迫遺跡・日田条里遺跡群の報告となったが、いずれも当初の予想を上回る成果であった。

佐寺横穴墓群は、道路幅にかかる6基だけを調査したが、4号墓からはイモガイ製の貝輪が出土している。横穴墓出土のイモガイ製貝輪は、下毛郡三光村上ノ原横穴墓群や行橋市竹並横穴墓群など豊前地方に集中するが、竹田市十一横穴墓や日田市北友田横穴墓でも出土しており、広い範囲でみることが出来る。

大分県の横穴墓は、筑後川上流域、大分川下流域、大野川上・中流域、豊前地域に集中した分布をみせる。このうち筑後川上流域では、日田市羽野横穴墓群1号墓で須恵器大形竊が出土し、この地域では最も古い5世紀後半の初期横穴墓に位置づけられる。また、九州横断道に伴って調査した日田市小迫横穴墓群は、60基を完掘したのが100基を超える規模が推測され、形態的には墓道と違いつけの屍床をもつ横穴墓が多く見られ、県内で唯一の葺葺

形須恵器が出土している。その他、北友田横穴墓群をはじめ大規模な横穴墓群が存在し、県内でも最も集中した地域となっている。

次に大迫遺跡は、日田盆地北東部の求久里川流域の舌状丘陵上に位置する墳墓群で、古墳時代の石棺・石蓋土塚・土塚墓等26基が調査された。副葬品でみると、石蓋土塚墓・土塚墓は土師器・ガラス小玉・鉄鏃等がそれぞれ若干の出土があったが、唯一の石棺からは鉄剣2、鉄鏃7、鉄斧2、鉄鎌1が検出され、一つの墳墓群の中で優位性が明らかにされた。

日田条里遺跡群は、これまで考古学的な条里遺構は確認されていない。調査区は、日田盆地北部の花月川と有田川の合流する地区で、周辺には弥生から古墳時代の遺跡が集中する。今回の調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒と土塚2基、柱穴群、溝状遺構9条等が検出されたにすぎないが、日田盆地における台地上から沖積地への人々の動きを知る上で貴重なものとなった。

1) 「白岩遺跡」 玖珠町教育委員会 1993